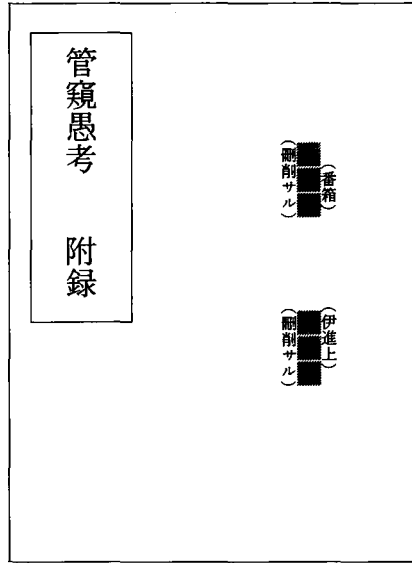
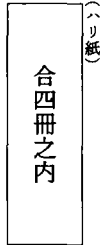


(表紙)



(中表紙)



管窺愚考 附録 稿

管窺愚考附録

此卷ハ、本篇を讀まん人座右に備へて引書ノ題号に應し時、披き合せてその證を取へし、

魔府 潜隠 平季安 纂輯

▽上巻 △

1 「續日本紀」

○天平二年三月辛卯、太宰府言、大隅薩摩兩國百姓、建國以來、未ニ曾班_レ田、其所_レ有田悉是墾田、相承為_レ佃、不_レ願_ニ改動_一、若從_ニ班授_一、恐多_ニ喧訴_一、於是隨_レ舊不_レ動、各令_ニ自佃_一焉、

2 「日本後紀」

○延曆十九年十二月辛未、加_ニ造宮大進一員_一、是日、收_ニ大隅薩摩兩國百姓墾田_一、便授_ニ口分_一、

3 「延喜式二十八」

○大隅國驛馬、蒲生・大水
 ○薩摩國驛馬、市采・英禰・納津・樺野・高來各五疋、
 傳馬、市采・英禰・納津、長井・川邊・刈田・美禰・去田後驛各五疋、飛・兒湯・當磨・田・教麻、
 日向國、長井・川邊・刈田・美禰・去
 救貳・亞椰・野後・夷守・傳馬、長井・川邊・刈田・美禰、
 眞祈・水俣・輪津各五疋、兒湯・去飛驒各五疋、
 (廣脱カ)

4

季安按、蒲生は始羅郡の今の蒲生ならん、大水は大隅郡の今の垂水欵、詳ならず、市来は日置郡今の市来ならん、英禰はいにしへ、英をアクとよミける「古」徴△ありし△を、中むかし知らでや、莫禰と譌れるならんと山田清安(一) (詠れ)り、今出水郡の阿久根なるべし、納津は網津の譌にて、今高城郡水引に遺れる網津村「あたり」ならん、(樺野は、薩摩郡、今の樺野に遺れる市比野村あたりならん、高来は、今高城郡の高城をかく作れる)道の後(シ)なと明證あり、且今にも江戸人の姓に楠(欵、田後は、道の後、また江戸人の姓、楠後などのよミ例にて、田尻とよむ)後とよめば、今伊作に遺る田尻村あたり欵、樺野はなつん、今伊作をその村名あれども、驛家をおかれし地なれば、今遺れる名薩摩郡今の樺脇に遺る市比野村あたりならん、高来は今高城郡の高城をかく作れる欵、驛家をおかれし日州の地名ハ、本篇にかうがへおけり)にて、今遺れる地名の似たるにのミ泥ミてハ、路程の遠近、方角などの當否もいかゝあるへき、重て考ふへし、餘はつばらに本篇に考おけり、

○類聚國史、承和五年五月乙丑、安藝言管驛家十一處、驛家別驛子百廿人、山路險阻、送迎繁多、良倍他國、勞逸不等、始自今年減公廩(額カ)頻加舉三萬一千二百束、以

5

彼息利、充給馭子等食、許之、

「古史徴」

○百練抄云、延久元年二月廿三日、可_レ停_二止寛徳以後新立庄園、縱雖_二彼年以往、立券不_二分明、於_二國務_一有_レ妨者、同停止之由宣下、閏二月十一日、始置_二記錄所庄園券契所_一、定_二寄人等_一、於_二官朝所_一始行_レ之

「大日本史、後三條天皇本紀、延久元年己酉二月二十三日庚申、勅寛徳二年以後新置庄園一切罷之、雖在二年前、券契不明、有_レ竄害者、宜停止焉、要記係正月、今從扶桑略記、百練鈔、閏十月十一日甲戌、始置記錄所於大政官朝所、百練鈔、愚管鈔、神皇正統記」

6

「全」

○又愚管抄云、延久の記錄所として始めて置れたりけるハ、諸國七道の所領の宣旨官符をなして公田をかすむる事、一天四海の巨害なりと、聞食しつめて有けるが、此ハ東宮と坐しほどの事を申せり、聞食つすなはち宇治殿の時、一のと坐しほどの事を申せり、聞食つすなはち宇治殿の時、一の

所の御領〔受領〕くとのみいひて、庄園諸國にミちて國々の

つとめ堪がたしなど云を、聞し食し持たりけるにこそ、

さて宣旨を下されて、諸人の領知の庄園の文書を召れ

〔ハリ紙〕庄園立券文也けるに云々、と云ひ、此に文書と有は風土記なるべく所思たり、

7 「全」

○又續古事談に、帝即位ありしに、秋の納にも及はぬに、

世の中なほりにけり、始めて記録所を置て、國々の衰

を直されたり、延喜・天曆以来には、誠にかしこき御

事なり、此時より、執柄の權抑おさへられて、君ミづから

政を知り給ふ事に歸る云々、又云、「帝」東宮の時、天

下の政をよくく聞置たまひ、御即位の後、さまく

の善政を行ひ給ふ、其中に、諸國重任の功といふ事、

永く停止せられしに云云、此天皇より前、治暦元年九月一日、越中國に下されたる官符に、案去寛

徳二年下五畿七道諸國符云々、停止前司任中、以後新立庄園云々、符宣抄に見えて猶あり、

又註、延久四年十二月、第一皇子白河院天皇、八歳に

て御受禪あり、後三條院天皇御悩の事もおはさぬに、

三十九の御年にて、八歳の皇子に御位を譲り給へる事、

秘ひけき故ありける御事なるべし、藤原の氏人たちの甚しく威勢ありし頃なりけり、

「右、東都平田大角の古史徴より抄載す、」▽季安

△群書一覽に考ふれハ、續古事談は寫本三卷、書牋

ハ古事談に同しと〔あり〕「あれハ」、〔真字にて記るせしと

おもわる、〕百鍊鈔も寫本十七卷、記者詳ならず、

大治・承安・文曆の頃の事共記して、奥書に嘉元二

年正月十五日、以大理定房卿本書寫、校合畢、貞願

とあるとそ、愚管抄も寫本七卷、慈鎮和尚の作にて、

神代より當代迄、君臣の事跡をしるし、東鑑と参考

して益あるとの赴〔なと〕見ゆ、尤巻首に慈鎮の自

序あると〔いへり〕本府にて此三部を探れとも、所

藏の人なし、〔右の註に、平田篤胤の〕「篤胤か右に註せし」諸人領知の庄園

に付たる文書を、風土記なるべくおもふと▽いへる

△ハ、季安心得す、〔6〕廳宣またハ立券狀にこそあるへ

けれ、本篇の文治三年四年に併せ知るへし、

8 ▽ 黃白問答

庄園、庄と申もの、古にハ聞ヘ不^レ申候、中頃より相聞
 へ候て、^{「え」}庄官庄司など、申もの、別當を置などと申候
 事、相聞へ候、東鑑の中、こゝかしこに庄名多く見^{「え」}
 當時諸國に庄と申もの散在仕候、郡にもあらず、郷に
 もあらず、其地界も、今ハたしかならず候、昔庄と申
 もの、出来たることの起り、如何御座候哉、答、是ハ
 今知行所と申す其起りに候、庄ハ俗字にて、莊ノ字に
 て候、韻會に舍也と、又正字通にも、唐崔群知^三貢舉^一
 歸、妻乘^レ間令^レ置^レ田、群曰、我莊三十所と、園ハ説
 文に、所^三以樹^レ菓也、今案に、莊園と申候ハ其始め
 人の譲たるか、又私に買得たる地も有^レ之候、以^三不封
 地^レ賜^レ田稱^三莊園^一、さるによりて、新立莊園など、申
 候、末の世に給ふ事を得候へども、先王の法にあらざ
 候、故に地は広けれども、俗に下やしき、鳥屋鋪など、
 申こゝろにて、庄園と申候、此起りにて申すなり、事
 長々しく、まづあらず申し候、我邦上古の王制、李
 唐均租調之法也、以^レ戸計^レ口、以^レ口班^レ田、戸とハ、

一軒の家にて、一軒に主人以下子弟・奴婢十人なれば
 十口と立て申、一口に付キ田を賜り、男は田二段、女
 は減^三三分之二^一、一段の田に稻五十束を得申、束を春^{「え」}
 て五升を得るの由、令義解に見へ候、されバ、尊ハ太
 政大臣、卑ハ奴婢にても、おしなべて口分田を受け申
 候、口分の租ハ、一段に二束二把を出して、男は九十
 五束余を一人の養に給り候、是によりて上下貧富ひと
 しく、その中尊は用途ひろきゆゑ、位田・封戸等の品
 を立て、不足なき様に設け置るゝ大法にて、其の位
 田・職田等も、封戸とても、ミな一段二束二把の租を
 出し申候、位田とは、五位以上位階に依て田を給り候、
 令に、正一位十町と此類にて候、職田は、大納言以上
 は職重きゆゑ、別に又田を賜り候、令に、職分田太政
 大臣四十町と有之類に候、封戸とハ太政大臣封戸千五
 百戸と申す類に候、前ニ申候、千五百軒を給るにて候、
 封ハ、封地封國の字の意に候、如^レ此なれば、上は節
 儉にして用足り、下は豊饒にても暴富驕奢なく、國治
 り俗うるハしく候、此外に賜田と申もの、是ハ令ニ曰、

凡別勅賜_二人田_一者、名賜田_一と、此田は后妃湯沐の料、功臣報勞の田にて候、令所_レ謂大功世_レ絶、上功傳_二三世_一など有_レ之、皆その限り有て、かの位田・職田も、その身薨卒の上へ、返還申候て収公す、口分も死没して収公す、又あとより出生出身にて班給す、仍て班田の法は、六年一班と令に見_レゑる、又輪地子田と申もの有_レ之、しかるに是へ、公私雜用の外、多く餘りたる田にて、是を民に授て耕作して、其租を擧るなり、此法は、毎國品差_レ不同候、これ延喜の定にて、此田も六年に一度返進す、ヶ様なれば、實に六十六州錐を立る程も主田は無_レ之候、凡王制は、殊の外上苦むゆ_レへ、おのづから政ゆるまり、班田の法も怠がちになり候、かの后妃湯沐の料を外家に譲り給り、功田は子孫寺に施入す、惠美押勝大職冠の功田を以て、山階寺維摩料に施入する事、國史に見_レゑ候、かの后妃湯沐の料の、外家へ授け申てへ、湯沐の所と稱じがたく候、功田も施入の後へ、寺にて功田とハ申されぬゆ_レへ、かの皇やしきと申すやうの意にて、是を庄園と名けて、後々

ひろくなりて、剩へ庄園多くもちてへ、富有なれば、近隣の庄園を買得て、彼是兼あハすゆゑ、富は益富ミ、貧は益貧にして、豪民恣に買得て、豪民國々に出来候、末世の事なれども、伊藤_{東敏}親、くすミ河津の莊持候も是なり、一端の例ニ申候、かやうなれば、下民奢申候故、後朱雀院寛徳年中に、新立の庄園停廢の宣下有_レ之候、ゆゑは無富民の由なり、後三條院延久の初政に記録所を置くも、この停廢のこと第一の義なり、其後代々の聖王も、政の第一ハ此事のミなれども、跡々より止_レ不_レ申候、これを申せば、下官先祖の事をそしり申候に似候へ共、下官が先祖ばかりにもあらず、多くの人のことにて候、往昔執政大臣も、とかく田地を貪るゆゑ、辭にハ被_二停廢_一の事を申せども、忽に失損ある事なれば、何かにことつけて、この庄園をはなち不_レ申候、しかのミならず、尚新立を企申候、延久より長承までハ六十年許にて、知足院関白、宗忠公に談せらるゝ事、中右記に見へ申候、此より甚しきハ、後々の人主、停廢のこと宣下せられながら、御讓位の後へ、

院の御領と稱せられて、定れる御封の外に田園を貯へられ、剩へ崩御の後、遺命を以て、男女親王にわかち給り、得寵の女房・常侍^{〔掌券〕}・女官等に分ち下され、是を院の御処分と申候、ケ様なれば、庄園常になりて、争論出来候よし、舊記に見^{〔え〕}へ申候、元久の頃、京極黃門定家卿の所領、江州吉田庄を三位局に掠られ、度々詔に及候事、明月記に見^{〔え〕}へ候、如^{〔え〕}此風俗になれば、私領と申候こと、いよ^{〔え〕}盛になり申候、義家朝臣、武衡・家衡を撃て三ヶ年戦ひ、勝利を得られ、勢に乗て、東國の豪民を麾下に招かれ、御家人を建らる、義朝平治逆乱も、是よりひよきたると被^レ存候、頼朝卿流人にて兵を起さるゝも、時政の類、三浦一黨、かの豪民御家人にて、是を助けなし申候、されバ寛徳・延久の政に、つとめて庄園停廢のこと申候ハ、誠に後代の弊を思ひはかる處遠く深く、恐ながら存候事也、このゆゑニ、庄園ハ私領なれば、郡にもあらず、郷にもあらず、ひたすらに買得れば、境界の定もなきものニ候、或は庄園主人もなくおとろへ、子孫断絶なれば、

つぶれ申候なり、又ハ往昔は富て貯へおくも、貧になりおとろへ申て、何となく在名になりたるものニ候、さて庄園は私領にて、其領内にてハ、國法にもかゝわらず自由に働申、是を戒るに名をかりて、頼朝卿地頭を置れ、遂に六十餘州を手に入られ、かの庄園の内の土も土産も、皆其領主に受納し、其奉行人を、荘司・庄官・別當など、申候て、私に召置ものニ候、此趣諸記雑集の旨を以て見れば、僅にかやうに見^{〔え〕}へ申候、△

〔本記事ハ、「旧記雑録前編二」八九四の一号ト同文ナリ〕

9 ○公卿補任七

- 後一條院
- 万壽三年丙寅 正月十九日、太皇太后宮彰子入道、^{〔此註本ナン〕}号上東門院、^{〔一〕}ノ字ナン
- 太政大臣、從一位、 藤八公季七十^{〔一〕}
- 関白、左大臣、從一位、同頼通卅五^{〔此註ナン〕}
- 右大臣、正二位、同實資七十^{三月廿一日上表、勅答不許、}
- 内大臣、正二位、同教通卅一^{右大将、東宮傳、四月一日聽警車、}
- 大納言、正二位、同齊信六十^{〔以下ナン〕} 左大将、
- 中宮大夫、

權大納言、正二位、
同行成五十五(ナシ) 二月七日兼按察使、

同頼宗卅四 春宮太夫、

同能信卅二 中宮權大夫、

權中納言、正二位、

同長家廿二(ナシ)

中納言、正二位、

同兼隆四十二 左衛門督、

同實成五十二 右衛門督、

權中納言、從二位、

源道方五十五(九) 宮内卿、大皇大夫、
藤公信五十 左兵衛督、春宮權太夫、五月十五日薨、

正三位、

同朝經五十四

從三位、

源師房十九 十二月六日任(十六)、
日兼春宮權太夫、廿八

外ニ參議略之、

萬壽四年丁卯、(此註ナシ) 九月皇太后姪子崩、
十二月四日、入道相 國興、六十三、

太政大臣、從一位、
藤公季七十二(ナシ)

関白、左大臣、從一位、
同頼通卅六 十二月四日服解、同 廿八日復任、

右大臣、正二位、
同實資七十一 右大將、皇太弟傳、

内大臣、正二位、
同教通卅二 左大將、(以下ナシ) 十二月四日服解、廿八日復任、

大納言、正二位、
同斉信六十一 中宮大夫、

權大納言、正二位、
同行成五十六 按察使、十二月四日薨、年五十六、
(ナシ)

同頼宗廿五 春宮大夫、十二月四日服解、
同能信卅三 中宮權大夫、十二月四日服解、
同長家廿三 十二月四日服解、
(ナシ)

權中納言、正二位、

同兼隆四十三 左衛門督、

中納言、正二位、

同實成五十六 右衛門督、
(三)

權中納言、從二位、

源道方六十 宮内卿、皇太后宮大夫、九月十四日止大夫、依本宮崩也、
(以下ナシ)

〔自是已前〕
寛仁三年己未

〔末ニ〕
前大政大臣、從一位、藤道長五十四、三月廿一日出家、
(觀) 法名行寛、

〔後〕
宮義如故不改、又封邑三千戸殊以賜之、六月十九日、
上表止準三宮二千戸、勅答不許、今度上表日、改七月三日、
(中脱カ) 觀字為寛字、
(日脱カ) 日、修伏又請、万壽四十一八宮行啓於法成寺、依入道

也、
御防、同給千度者、十二日、天下非常大赦、依入道太相 廿

六日、行幸於法成寺、
(大脱カ) 入道相國受病遷御、
(日脱カ) 即日封戸五百烟

事施入寺家、又有御誦經、
(奉カ) 施物絹二百疋、兼又以散位藤

原庶明朝臣任美乃守、
(頼明) 死替、以左衛門志豊原為長補檢

非違使、
(雖無其闕、依是依造塔行事各有賞、又被供養寺造塔行事也、)

家并南北(西)西京高僧一萬口、廿九日、東宮行啓、十二月

四日、遂以薨、六十二、在官(8)關白攝政勞廿三年、
長徳元(以)後、長和六年已前、

治曆三年丁未

關白、從一位、藤頼通七十七十月五日、行幸宇治平

等院、同七日、勅年爵年官一準三宮、又食邑(封)三千戶、

内舍人二人、左右近衛兵衛右六人、為隨身資人卅人、

一如忠仁公故事、十一月五日、上表固辭、六日、勅答

不許、廿九日、重以上表、十二月五日、勅答許之、但

政巨細(悉)可諮詢者、

治曆四年戊申、
四月十九日庚申、天皇晏駕、皇太后踐祚、春秋卅五、七月廿一日、御即位、十一月廿二日、大學會(七)

關白、準三后、從一位、頼通七十七、三月廿三日、依(六)

病上表辭退、政無巨細可諮詢之勅、四月十七日、勅答(事)

從所請、肥遁宇治別墅、延久四四廿九、出家、以權律(者、即也)

師長(晏)寔為戒師、法名蓮覺(華脱力)、後改寂覺、同六年二月二日

薨、行年八十三、

前太政大臣、從一位、藤頼通、
四月十六日辭關白、準三后、

10 ○國史略卷之三

從五位下行(大)舍人助兼音博士源朝臣松苗編次

塔 從六位下出羽介和氣義真 校(岩垣)

一條天皇、諱懷仁、圓融帝長子、母梅壺女御、諱詮

子、右大臣兼家之女、

○治安元年、左大臣顯光薨、乃以右大臣公季為太政大臣、

内大臣頼通為左大臣、實資為右大臣、教通為内大臣、

○二年、法成寺金堂成、設(大)法會、天皇及 太皇太

后彰 皇太后后妍 中宮威子皆臨幸之、三后皆道長之

子、自是以後、世人稱道長為御堂關白、
寺在近衛北京宮、東、金堂其中央、

○萬壽二年、尚侍女嬪子卒、道長第三女、為東宮所幸、年

十九、贈正一位、道長自仕 一條帝以來、事無不吉、

至是、始喪其女、哀嘆殊甚、○四年、皇太后崩、諱

妍子、亦道長之女也、道長悲傷、遂病、尋薨、道長歷

事 三朝、權傾内外、政(出)父子兄弟之間者、三十

餘年、子男繁多、榮貴最盛、公卿六人、女子立后者三

人、其餘為妃嬪、遂至世相家不斷、宮媛亦染衛門、著

榮華語四十卷、使讀者如目見其富貴(也)、○長元二年、

関白頼通饗公卿於白川別業、有舞樂、道長薨後、頼通相繼專權、

○後朱雀天皇、諱敦良、母 上東后、外舅左大臣頼通関白如故、其義女諱姫子、立為中宮、敦康親王之女

○後冷泉天皇、諱親仁、先帝長子、母 贈皇太后諱嬪子、道長之女、 上年二十二、即位、頼通関白如故、

○康平三年、頼通罷左大臣、使教「通」代之、頼宗為右大臣、頼通長男大納言師實為内大臣、父子兄弟皆居相位、頼通二弟能信・長家・姪信家、妹夫源師房、四人既任大納言、○四年、頼通任太政大臣、○治暦元年、

右大臣頼實薨、以師實為右大臣、師房為内大臣、○三年、頼通請 帝、幸宇治平等院、頼通年既七十、構山莊于此地、世「称」宇治関白、朝政無大小、取決于此、

右に抄載「せ」し(且参考すれば)「趣にて」、(ハ)愚管抄にいえる宇治殿の時、一の所の御領くとのみいひて、庄園諸國にミちて「國々」のつとめ堪がたしなと云へる、當時の(受領)

「權威」▽をよよく△おもひ知「らるべし」、是を觀

て」鹿屋氏に藏めたる嶋津御庄官等か「言上状の(赴カ)も中に主も無き荒野を開墾せしめ、庄号をつけて宇治関白家に寄進せしと言上しける状を併せ觀れば、今庄内の郡本あたりに開墾して、延喜の頃より驛に立たる地名の嶋津を其庄号となし、世々近衛家の家領にて彼殿下より知行せらるる庄園となりしには疑ひなし、よて左に表章す、併せ考べきなり」

11 ○大系圖

近衛系圖略抄

藤原家正統

上世略

三条右大臣、天慶四年 関白摂政

忠平 貞信公

村上帝ノ天曆三薨、

師輔

母左大臣良有公女

伊尹 天祿三薨、 謙徳公

兼通 天祿三為関白、 忠義公

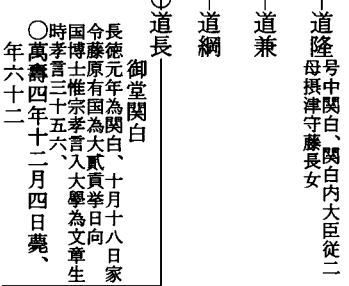
兼家 関白摂政大臣、從一位 永

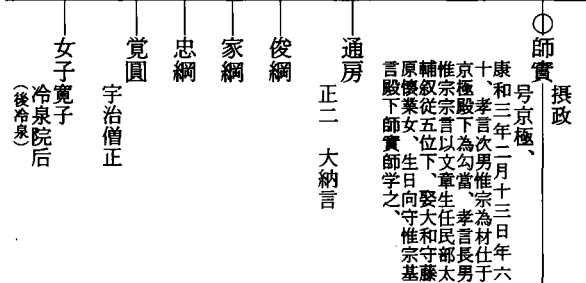
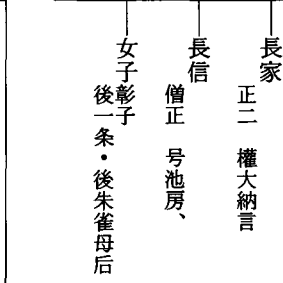
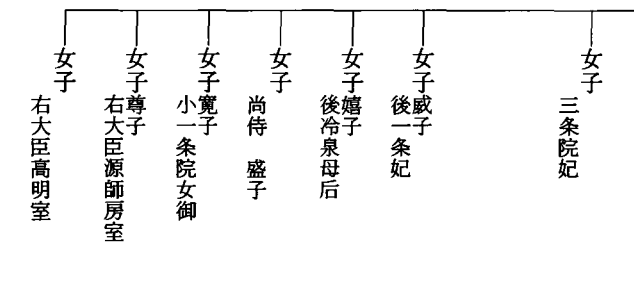
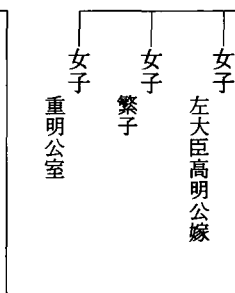
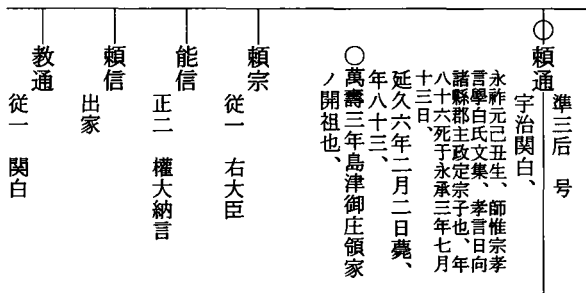
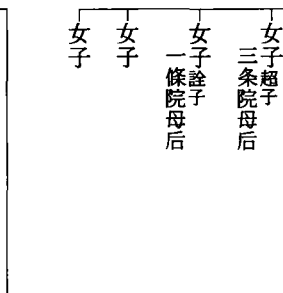
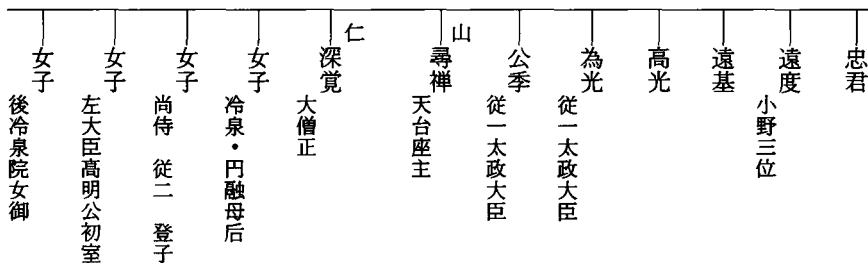
母武藏守經国女 法興院

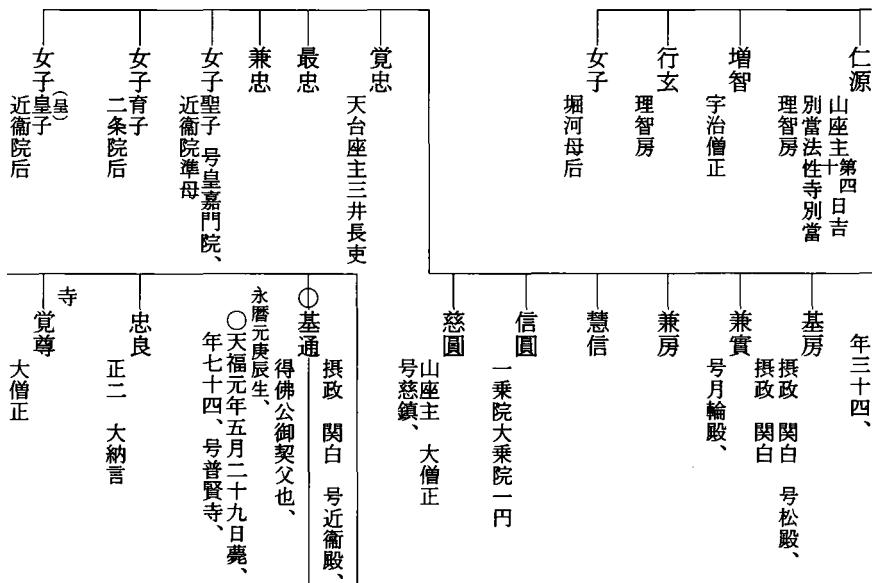
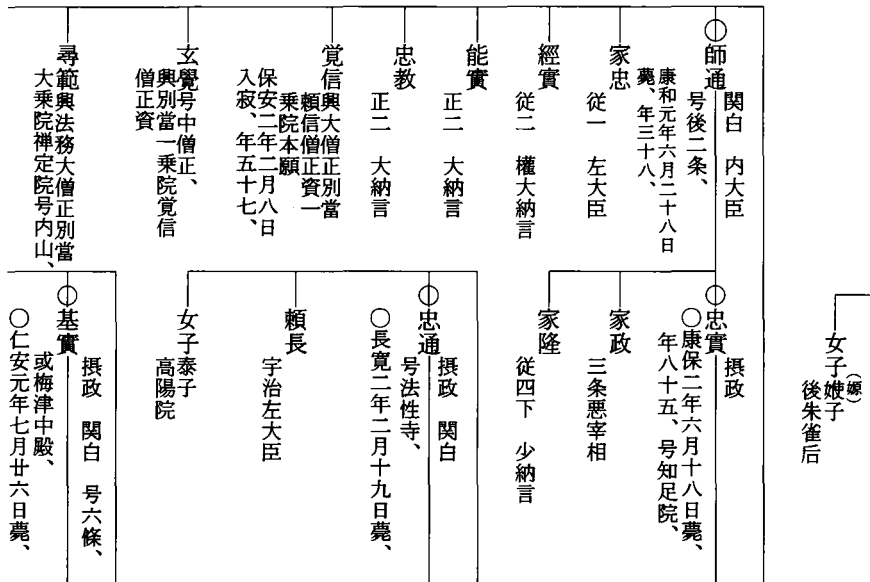
遠量

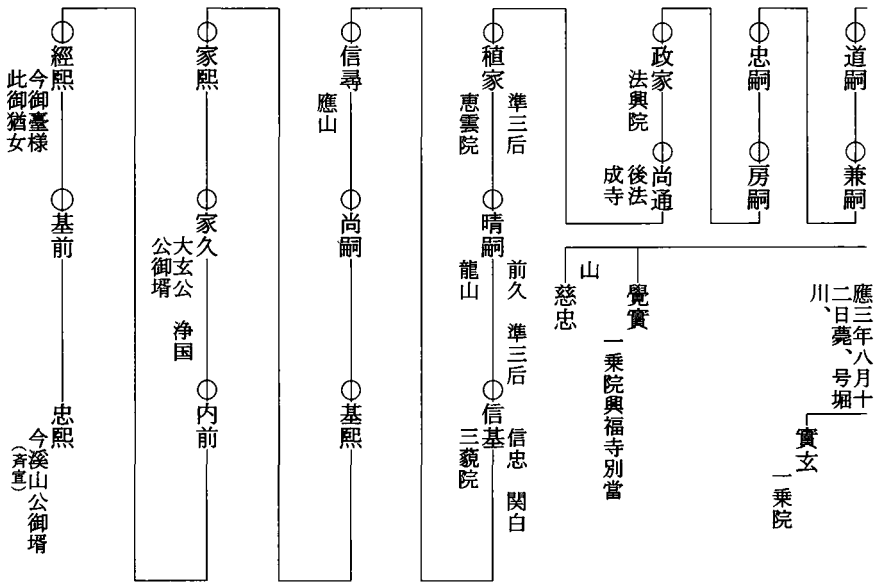
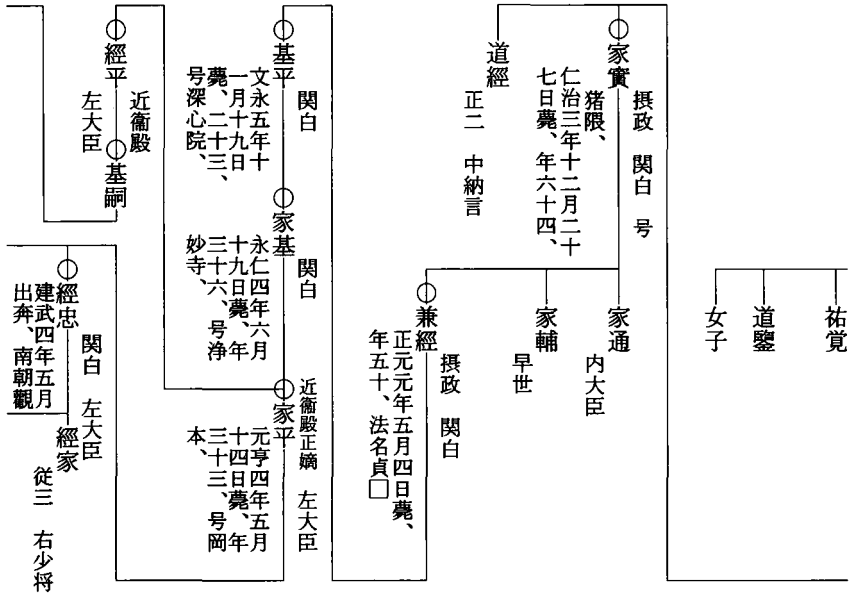
(嶋津本庄者、萬壽年)

(赴カ)









12 ○大和名所圖繪

一 乗院〔積書曰、當院ト大乗院トカハルノノ寺務職ニソラハシマス、天平寶字元年、慈訓僧都ニハシマリテ後今世ニ絶ス、當院ハ定照僧都ノ造立トカヤ、〕

大乗院〔舊跡幽考曰、傳ヘ聞、大乗院ハ堀川ノ御宇寛治元年二月ニ造立シ給ふ、本願ハ隆禪大僧都ト申歟、〕

右、大和名所繪圖より抄載す、一乗院は覚信僧正の本願たりし事ハしらざりにや、寛治元年は覚信僧正十八歳の時に當れハ中興なる歟、

新井氏折たく柴の記に、南都兩門主〔一乗院殿大乗院殿〕相論の事、すてに御裁断におよひて御他界あり、此事によりて一乗院門主使者並にその院家花藏院・發心院等を下して申さるゝ事共あり、しかるに此事の由をは近衛の相國よくしり給へり云々、又寛文五年十一月三日に其望申されし旨によられて御朱印をなされたり、前代の初におよひて、公家よりの仰に、興

福寺ハ藤氏の氏寺にて代々の天子御外戚の御寺なれハ、公家の御沙汰にまかせられたき由の御事なりしかハ其仰に任せらる、貞享年中に至て一乗院の門主ハ維摩會中第六日に寺務職に任せられ、大乗院の門主ハ進講の後に拜任あるへしとハ宣下せられたりけり、
(一)二号及ビ本記事ハ玉里本ニナン)

○季安〔按、公卿補任等、〕長徳二年丙申七月、藤道長轉〔左大臣〕叙正二位賜一一座、長和六年丁巳二月、後一條帝即位、三月、授道長從一位、停其攝政、以男頼通代為攝政、四月、改為寛仁元年、十二月、以道長為太政大臣、二年戊午二月、頼通為内大臣、攝政如故、三年己未三月、道長祝髮、改名行親〔(願)又改、〕五月八日、詔賜爵準三宮義如故、特賜封邑三千戸、十二月、頼通上表停攝政、勅為関白、五年辛酉正月、頼通進從三位、時年三十、二月、改為治安元年七月、以藤公季為太政大臣、時年六十六、而於

頼通ニ從祖叔父也、而萬壽三年、則公季居ニ太政大臣、頼道(通)以ニ左大臣ニ為ニ関白、而其弟三人、頼宗居ニ權大納言、教通居ニ内大臣、長家居ニ權中納言、且父道長時尚存、則島津庄官等上疏所謂、以ニ開發田、寄ニ進 宇治関白家、(即、頼通也)立券庄号为ニ島津本庄ニ云、應レ在此時ニ也、當時威權、▽莫比肩者△何事之不可レ為、而況於ニ無レ主荒野ニ乎、可四以觀ニ上疏所言非ニ偽妄ニ矣也、四年丁卯十二月四日、道長薨、年六十二、所謂赤染右衛門之榮花物語、言ニ此道長榮花ニ云、長元二年己巳十月、公季薨、頼通乃居ニ所、而永承二年丁亥、則頼通・教通・頼宗兄弟三人居ニ左右内大臣、又佗弟、能信・長家居ニ權大納言、康平三年庚寅七月、頼通辞ニ左大臣、関白如故、弟教通任ニ左大臣、頼宗為ニ右大臣、男師實為ニ内大臣、弟能信・長家居ニ權大納言、四年辛丑十二月、頼通任ニ太政大臣、〔據レ是觀レ之、〕我島津稱号之隆ニ赫于今、溯ニ尋其源、則首ニ乎(如是)〔道長〕之榮華ニ者明矣、▽故書所考以埃來

哲爾△

〔右に輯録せし趣にてよくく、萬壽中の宇治関白殿威勢をバ會得して、左に表章せし御庄官等が言上状を觀れば、島津御庄てふ庄号の立券して、その以来代々近衛家の家領たりし庄園にて、本庄とハその一圓持切、今の庄内、則その遺址なる事を知らるゝ也、〕

13の1
〔志布志鹿屋權兵衛兼治家藏ト云〕

○嶋津御庄官等謹言上

欲且依代々 政所御下知并庄号以後二百六十餘歲不勤例、大隅國 正八幡宮御造營當本庄不勤子細「事」、〔善本例字下有朱註云、此間略ス、今季安按、文義只脱事字耳、舊註恐有錯置、故以朱補之、埃良本爾〕

副進

一通、普賢寺禪定殿下政所御下文案、承元二年九月日状云、於無舊記者、神人等今案計也、舊跡之外可令停本庄新儀支配云云、
一通、同政所御下文案建曆三年六月廿七日状趣、以同前、此外貞應二、嘉祿三、正嘉弘長年間御下文御教書等數

通、又弘安元年十二月廿八日状、云造正八幡宮嶋

津本庄役事、

一通、同二年六月九日同断、

一卷、當御庄寺社繪圖、

一卷、同年中行事、

右、謹考故實、正八幡宮御垂跡者、和銅年中、正殿

已下社屋不残一字、被支配三州圖田日向大之間、既五

百余歳御造營、敢所無相違也、嶋津本庄者、萬壽年中、

以無主荒野之地、令開發庄号、令寄進

宇治関白家以降、長元年中奉崇伊勢太神宮依神告号神柱宇

佐八幡、庄號以後二百餘歳者、彼寺社造營之外、無余

事之處、神官等建仁三年始雖掠賜 宣旨御庄官、以下

略ス』

於當本庄圖田之跡、為無主荒野開發地之間、停止新儀、

『以下略ス』

右正應元年之言上状、季安按、此十字、後人所追書也、

三年、自長元元年為二百六十一年、則據莊号、自萬壽三年至正應元年為二百六十

以後二百六十餘歳云、以書之、可推知也、
(本文書ハ「旧記雜錄前編」一八八八・八九号文書ト同一文書ナルベシ)

13の2

284

右の原本は、志布志士人鹿屋權兵衛兼治が蔵書にて、前に載せし慈鎮和尚が愚管抄に、宇治殿の時、一の所の御領ノとのみひて庄園諸國にミちてとあるに、能く符合せしにて考ふれハ、島津の御莊の開發を述たる古証、此文書より善きものを、季安いまた外に見當らず、故三卷の中にて、屢莊官上疏と(引用るも)「引もの」、皆是なり、此を鹿屋が家蔵せしを考るに、肝付兼石が三男宗兼、(父の譲りを承け)「父に譲られ」鹿屋院の辨濟使と為りて分族し、またその姉婿觀阿より男なしとして三俣を傳られ、此と併せけるよし系圖に在り、然あれど、觀阿も鹿屋の辨濟使に還補せしこと、永仁四年の執達伏にあれば、觀阿より受たるそ近(からめ)「如し」、左ありて正應元年ハ、永仁より九年まへなれハ、右の文書に謂へる御庄官も、觀阿等に當るなるへし、のちに宗兼より「に」憎まれて、鹿屋のミを領して家号とせり、それより三俣は姪をハ郎兼重に譲りて、高城におり三俣殿と呼ること、鹿屋系圖および聖榮自記等にあり、永仁より四十四年

14 (ハリ紙、㊦ナン)

(本記事ハ「旧記雜錄前編」一八八九号文書トホボ同文ナリ)

〔○隅笈帖佐郷者(保)安三年知足院禪定殿下被寄進 正八幡宮、
雖然其以後帖佐治部丞宗家法師至先祖地頭之處、右大將家
頼朝公建久九年七月被避之、亦被寄附 正八幡宮、其後其(前々)
後善法寺在下向栄清成所司云々、
右平山家由緒書ニ有之、是ニテ考候へハ、帖佐茂保安
三年已上ハ嶋津庄之寄郡ニ而為有之筋ニ被考候、
季安記之、

〔(を經て)して〕、曆應二年の八月に至り、畠山直頭に攻ら
れて落城し、(それより)五十年▽ほどすぎ△嘉慶二
年に▽至り△また▽鹿屋周防守忠兼に△ 恕翁公よ
り當院の長田を〔鹿屋周防守忠兼に〕舊封として下さ
れたり、忠兼は宗兼か曾孫にて、公の惣奉行(即今御)
家老なり、老て玄兼と更む、所著の自記〔のちに〕
在り、▽後に載す△斯りけれハ此書も彼家に遺れる
(ならん)、

15 一 上別符為永吉地頭令進止下地否事

右、地頭則嶋津庄荒野開發之地、為永吉地頭進止之条、
云御下知、云傍例、顯然問訴之、郡司亦為永吉地頭進
止事、無其例之旨陳之者、如宗久所進貞應二年四月十
八日御下文者、可㊦早為地頭代▽㊦沙汰△開發嶋津庄
日向方本庄内荒野事、件荒野為地頭代沙汰令開作、云
領家御年貢、云地頭分米、無懈怠可弁濟云云、就彼下
文、上別符者、為永吉地頭進止之由雖申之、以嶋津庄
日向方本庄荒野開發證文、備進薩摩方寄郡證文之条、
難指南、就中、如弘安御下知者、於下地者、郡司可為
進止之由被載畢、當別府於永吉地頭令進止者、先相論
之時、尤可申子細之處、依無其儀、山田・上別府兩村
下地可為郡司進止之由、被載之間、宜為越訴欵、仍地
頭訴訟不及沙汰焉、

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一〇五〇号文書ノ抄ナリ)

右、抄于正安二年七月二日前上総介平朝臣下知状
〔云、〕▽本是△志布志山田氏文書といへり、前件の

島津御庄官等言上状に、此外貞應二云々御下文と引

〔き〕載せしハ、右^⑤下知状にいへる、貞應二年四

月十八日の御下文を指なるへし、

※（頭注、⑤ナシ）

『此貞應二年ノ御下知ノコト、此下ニ載セシ比志島氏文書ノ

天福元年九月廿二日ノ執達状ト併セ觀ルヘシ』

16 ▽ 「比志島氏藏本」

○薩摩國豊後三郎左衛門尉忠義領荒野事、為地頭沙汰、

開發常々荒野、減斗代、可令弁勤年貢之由、所申請也、

宜為公平欵、可被申達本所之状、依鎌倉殿仰、執達如

件、

天福元年九月廿二日

（北条泰時）
武藏守
相模守

（北条重時）
駿河守殿

（北条時盛）
掃部助殿

（本文書ハ「旧記雜錄前編」一三七二号文書ト同一文書ナルベシ）

17 ○造正八幡宮嶋津本庄役事、如鎮西去々年三月三日注進

状者、正安三・乾元々・嘉元々以上三年、舊米對捍云

々、甚無其謂、急速可致沙汰之状、依仰執達如件、

延慶二年二月十日 陸奥守判

相模守判

嶋津下野前司入道殿

（本文書ハ「旧記雜錄前編」一一二四号文書ト同一文書ナルベシ）

右も雜抄にあり、陸奥守は宣時、相模守は師時、皆

北條氏にて、守邦親王の執權なり、前に載せし庄官

等が言上せし赴を申募て、正宮の造營料をハ島津本

庄よりハ出ざりしと見ゆ、それゆへ斯く沙汰ありし

ならん、頼朝公此かた、守護と地頭は將軍の令を

き、庄官等ハその後尊氏の世となるまで、多くハ

領家の下知を守りて、如此對捍せしと見得たり、

18の1 「鹿屋周防守忠兼覺書」

○大隅・薩摩・日向、於此三州、伴氏之源被分候次第之

事、少々存知分註置候、大伴親王後胤善男大納言、清和天皇時、檢非違使之別當ニ而御入候、其時流罪候、其末子兼貞言仁、鵜戸參詣之砌、三侯院御通候、三侯主平【大監 季 基】たひけんすゑもと云人之在所を一見候、折節平たひけん表に指出候て、彼兼貞見參被申候て、客人者いづくより御渡候哉尋被申候時、いづく共なき旅人にて候、被仰候、左様候者、暫御逗留候へと留候間、一兩月逗留候、然者彼平たひけん被申事ハ、愚身者無子候、女子一人持申候、あわれく御茶取せ候へかし、左様候者、我等か跡を可進之由被申候、其儀候者ともかくもと被仰候て、平たひけんの聲に御成候、無程男子出来候、其次第御子出来候、已上男子五人候、太郎肝付、二郎萩原【三郎 宗 義】、四郎和泉、五郎梅北と皆々在名名乗候、兼貞梅北而遠行候、然ニ梅北方ハ五人めにて候、兼貞之跡を次候、即善男大納言十番之けい馬の時、本【大監】とりにゆひ籠候て信仰申候十一面金銅之佛をハ格護之由申候、三侯之神柱ハ、平太檢殿御伊勢夢想を蒙り候て勸請候、其より梅北殿大官司御持候、彼平太檢殿在

※

所、都城与梅北間原に、屋形于今在無隠候、伴家幡之事、大堂宮の御幡被下錦にて候、幡横廣三尺三寸、長さ一丈二寸五分候、竿五尺也、伴家幕文きつこふの内に足上たる籠ニツ、共ニくもてを合、根【子】の日の松を一本ツ、くわへ候、幕布上三のハ白、下二のハ黒候、妙見氏神也、三侯院神社大明神也、

鹿屋周防入道

右もまた鹿屋兼治か藏本なり、

※ (頭注)

「此佛像今尚神社社司梅北氏ニアリ」

18の2

「垂水肝付約右衛門藏(本)上文開説」

○候間、善男之大納言十番競馬の時『も』とゆにゆひ籠候てしんかう申候十一面金同御ほとけをハ覚悟【格】之由申候、三侯之上柱大明神ハ、平代けんとの御伊勢夢想を蒙り勸請候、それニよりて梅北殿大官司御持候、彼平大けんとの在所ハ、都城与梅北間原ニ屋形于今在申、無隠候、伴家幡の事、大堂宮之御幡被下錦幡にて候、

幡之横廣さ三尺三寸、長さ一尺、鳩二寸五分にて候、
竿一丈五尺也、

鹿屋一鈞入道註之訖、

右と前本と小異あり、傳寫の誤にて、得失もたかひ
にミゆれハ、併せて宜きに從ふべし、前の庄官等か
言上せしには、長元年中、伊勢太神宮を崇め奉り、
神の告により神柱と号したる事ハ申たれど、▽崇め
ける其人は△誰とも〔其人ハ〕無けれど、▽右の鹿
屋一鈞入道が記せし赴と、古き棟札等に併せ考ふれ
ば△平大監季基なるハ〔明らけし〕、

19 ▽「梅北村神社司庫」

○大日本國海西路日向州南郷益貫村神社宮再興勸進〔疏〕

夫神祇者、天地之精靈、而二氣之良能也、陰陽所合散、
寒暑所往來、無非神明之至誠、故有其誠則有其神、無
其誠則無其神、〔蓋〕誠者天之道也、誠之者人之道也、
其氣發揚于上下、而能鎮非常、此百物之精靈也、故曰

至誠如神、于茲南郷益貫村有古廟、扁內宮外宮一字、
金軟尊星王垂高跡於茲郷、昔平朝臣平大監末基者、住
居於此地矣、傳聞其志、誇神明之至誠、以慈脩身、可
謂一代之善士也、萬壽三年丙寅歲、參詣伊勢大神宮、
謂巫祝曰、兩分彼垂迹、請安置於我國、巫祝許之、終
拜受頂戴歸去、創造大廟、巧架高殿、唐高祖始如立周
公孔子之廟相似、世人不謂乎、日本二柱、是其一社也、
以故号神柱妙見大菩薩、其實體天照大神也、舉國歸
仰尊信者惟夥矣、則奉稱御莊之宗社、焄蒿悽愴、威光
照應、證明蒙護持、春祈秋賽、不敢怠焉、不享非禮、
季氏如旅於祭泰山邪、所憐有材、退之齊赦於祈衡山耳、
諸侯大夫及諸士致美乎黻冕、行膳于其膏香、祭如在、
此所謂神明之至誠也、自最初建立以降、已五百有餘年、
風霜所侵、柱根權朽、雨露所墜、梁棟傾斜、造敗壞凡
五六箇度也、永正十三年丙子歲、前近江守新納忠武、
重肇建立之基、而經之營之、庶民之役、匠人成功、不
日而落成矣、〔輪〕奐之美如在目、其如周文經始靈臺
者乎、永正辛卯之冬、干戈蜂起於鼎國、而不安社稷、

日淹于茲矣、同癸巳二月十又五日、寇讎陷于此境、乱將雲集、步卒霞遮、八人放出、忽成焦土、恰不異咸陽成原也、鴻業沙崩、烏有冰礎石、僅存遺塵荒廢矣、爾來矛戟未収、徒移涼燠而已、戰塵路暗、兵車岐喧、依之借沙門勸進之力、欲興起此宮、無緇素、無尊卑、不擇多寡、分與半文錢、善因之慈化、展轉之功德、不可思議、不可稱量、其詞曰、

曩構數十間瑞籬、華麗盡美、幾重紺殿、英靈⑧如加威、簾篋徹毛、歌雍鬱鬱、灌不同禱、郊社能備上下之禮、昭穆元有左右之倫、今也此地、堦除秋盡、黃葉埋霜、廟前日晚、碧草偃雨、若無鵠眼展轉、争成鸞瓦經營、
大永六年丙戌秋九月廿有四日

勸進沙門

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」二〇四五号文書ト同一文書ナルベシ)

20 ○奉修造島津御庄惣鎮守神社宮御寶殿一字三間

右意趣者、奉為金輪聖王、天長地久、別而者當檀越藤原朝臣忠重、同朝臣忠勝并同朝臣久如、官祿

增進、武運長久、領内泰平、萬民豐樂、殊者社頭安全、諸人快樂之故矣、將亦當大宮司伴朝臣兼秋并勸進沙門權律師賴舜、同隆行、無二發願力、驅有緣、勸無緣、願念忽成就、抑當社妙見者、日本二柱月神伊勢大神宮日神、此兩天為無雙尊神、依是日州南鄉奉崇敬者也而已、仍諸願成就如件、

本願沙門敬白

天文四年乙未卯月廿九日

小工 藤原正續
大工 藤原範續

(本文書ハ、「旧記雜錄前編二」二三四四号文書ト同一文書ナルベシ)

21 ○奉修造島津御庄惣鎮守天照大神神社宮御寶殿壹字三間

代々造營之事

- 第一、萬壽三年丙寅、大願主平朝臣平大監末基
- 第二、仁安二年丁亥、大願主散位伴朝臣兼景
- 第三、弘安四年辛巳、大願主執行左衛門尉伴兼世
- 第四、應永八年辛巳、大願主島津朝臣前陸奥守元久

并讚岐入道沙彌道旦

第五、文明十五年癸卯、大願主島津陸奥守武久

第六、永正十三年丙子、大願主島津近江守忠武

第七、天文四年乙未、大願主新納忠重、遷宮卯月廿

九日

遷宮二月九日、願主市部當藤弁貞家、大工守滿、同

守次

遷宮四月十四日、本願主沙門源晟、願主市部當貞次、

大工典續

右筆者權律師慶舜坐主、七十三

22 ○ 梅北大吉宮棟背文表文不明

第一建立、平朝臣平大監末基、萬壽三年九月十五日落

成、第二再興、三位伴朝臣兼景、仁安二年二月十三日

落成、第三再興、左衛門尉伴朝臣兼世、弘安四年八月

廿七日落成、第四再興、陸奥守藤原朝臣元久、應永八

年十一月七日落成、第五再興、豊前守伴朝臣兼續、文

安五年戊辰十二月十八日落成、夫以自性清淨之滿月、

衆生本有之德、而心水本覺真如之資、豊葦原之國、和

光之垂於跡矣、抑當社重於春秋、久積歲霜、遠而既及

廢壞刻、去天文廿季辛亥南呂十六日、俄大風頻吹、不計

利那而反蹤、因茲神主竹島市正橋秀信并宮太郎丸、累

年步於運而突前數千有餘之勵於人力、新造立大吉宮一

宇三間處也、仰願者施主各息災延年、子孫繁昌、家內

如意滿足耳、遷宮道師西生寺別當權大僧都勝貞、同書

之、

23 〔梅北村祝司藏本
〔在梅北村祝子家〕

一神柱大明神

右、萬壽三年丙寅正月廿日、平朝臣平大監季基卿領當

地移住之日所崇也、同年九月九日、神柱造立、伊勢內

宮也、出羽庄内一社、〔日向庄内一社、〕日本二柱之神

也、仁安二年丁亥、散位伴朝臣兼景再營、弘安四年辛

巳修造、大願主執行左衛門尉伴兼世、應永八年辛巳二

月七日修營、陸奥守藤原朝臣元久并沙弥道旦、文明十

五年卯二月九日修營、陸奥守武久、永正十三年丙子四

24 「都城名勝志(書)差出」

○日州庄内梅北内

島津御庄惣鎮守

神柱兩社妙見大菩薩御本地

一初建之事

平朝臣平大監末基と申て、平家の侍、梅北をきりあげ知行せられし、萬壽三年丙寅正月廿日、大門の柱を大
吉山よりひかれ候時へ、片柱を五百人つゝのつもりにて候處に、片柱うこかすして、千人よりて引候處に、
末基の女子六歳になりけるが、見物に被參候時、彼六歳
の女子俄にくたひれ候て、御たくせんあり、伊勢の外宮、此地にい「本まゝ」わん有へく候、此儀不用候へ、即彼「(ひ款)」

月十四日修造、嶋津近江守忠武、天文四年卯月廿九日修理、新納近江守忠勝、天正四年丙子二月廿日鳥居建立、北郷左衛門時久入道一雲、同十四年丙戌八月三日、時久代地頭伴兼廣、慶長十四年修營、北郷讚岐守忠能也、

女子めしあげへき由候間、領掌申候て、伊勢の國へ飛脚を以此を「申さか」れ候処ニ、いせ人も神人の子七歳の男子にのりうつり、御たくせん候故、日向へ尋に飛脚下り候、伊勢人も尋にのほり候処、あかたにて同しく宿をとり、相互に物語とも仕候へハ同儀を申候故、さらバ同前にて談合つくニ、伊勢のものはいせへのぼり、日向のものは日向へ下り候、其時の事を伊勢や日向の物語と申也、其後同し年の九月九日に勸請申候故、今に祭禮なり、梅北より彼社頭を覚悟申事ハ、右の末基卿平家の世の末に成たるを見きりて、箸野の本名の御所に隠居して渡されたと申傳候、梅北ハかこしまを先祖の善男の大納言のきりあげ所にて居られ候へとも、嶋津さま中之郷の堀の内の御所へ御堪忍なされ候時、梅北家より梅北名をうけて知行申され候時、相互に御入魂の上を以て、かこしまを島津さまへ渡し申、梅北へ移られたると申傳たり、梅北ハ益貫と申たるを梅北より知行被申候故、梅北と申也、神柱兩社と申事、伊勢の内宮外宮、日本六十六か國を三十三ヶ國つゝ司に

て、内宮ハ出羽國庄と申所にいわれ被成候、外宮ハ日向國庄内にいわれ被成候、是によりて日本二柱と申也、

右上代ノまゝ書付申候、今はをしに成事おゝし、

寛文六年丙午二月吉日 梅北正兵衛判

一伴兼貞北之方ニ梅之木多郷へ罷移、家名を梅北と被下、兼貞之子孫、古来西生寺之地へ無根梅と云梅有て、根無之して其枝繁り、北之方へ枝を打候ニ付、其郷を梅北と名付候共申説有之候、何れ欵是欵可考、無根梅之儀、近来迄ハ有之候へとも枯候而、于今元之木ニ似合せられ植續、右寺地ニ有之候、右梅北家之儀、古来者代々梅北を領知候由、忠久様三ヶ國守護職御給候而、鎌倉より御下向之時分、梅北隣郷堀之内へ御所之節欵、梅北を父とせよ、富山を母とせよと、御頼被成由申傳候、梅北・富山御所へ隣り罷居候ニ付、左も可有事、于今梅北之内へ女子分門と申候者、[㊦]梅北家女子ニ配分之知行之由申傳候△

○益貫

一字佐八幡宮 南向、神柱之社より壹町計東之方、

傳云、平大監末基建立焉、天正十年、一雲入道時久再

營之云云、

余社略ス、 代宮司 相馬勝善坊

右者、古来より有来候神社之由来ニ御座候間、相認可差上之由被仰渡候ニ付而、御差圖之通相調差上申候、以上、

戊四月五日

祠官

感應寺河内印

25

〔朱カキ〕

「此字佐八幡ト神柱宮ト両社ハ島津御庄開発ノ時ヨリ創建アリシコト、鹿屋氏ニ蔵メシ庄官言上状ニ見ヘテ、神柱ト共ニ近衛家領ゼラル時トモハ最ト御崇敬アリテ、此両社ノ作事ナド御庄中ヨリ辨ヘルニ因テ、自余ノ課役モ御免アリケル赴ヲバ第一ニ言上セント見ヘルヲ以テ考レバ、島津庄ニ於テハ格別ナル由緒ノ社ナルベク思ハル、ニ、只今ニテハ都城モ如是由縁ヲ知ラレザルニヤ、只荒果タル茅葺ノ小キ堂トモ社トモ知レザル雨漏リ勝ナル崩レ堂アルトソ、尤

鳥居サへ立ザリシト聞ケリ、可嘆哉、神タル徳ニ左迄甲乙ハ無カルベケレトモ、時ニ因テ遇ト不遇ハ守護ノ力モ足ラザルニヤ

神柱大神宮并宇佐八幡宮御祭事

- 一 正月元日 一 正月七日 一 二月彼岸
- 一 二月初ノ卯日八幡宮祭 一 五月五日
- 一 六月十五日 一 八月朔日 一 八月彼岸
- 一 九月八日 一 九月九日 一 九月十日
- 一 十一月初ノ卯八幡宮祭

合十二祭

守護御名代として 社参 富山六郎兵衛

北郷御名代として

地頭

右者古来より富山家社参仕候事、

一米四石三斗五升五合ハ、右十二祭之入用分、都城蔵より渡候也、

一米六斗四升八合

鎮守講入目

右者十二ヶ月之入目如此、右米都城蔵より被渡候也、

一米七斗五升

大般若入用方

右者春初於神前轉讀有之、都城蔵より相渡候也、

一 毎年九月九日御祭ニ付鎗流馬老騎、濱下り御座候事、

右由来之儀者、(勳進候并縁起)「縁紀并勸進帳」委數相見得申候故、

書写差上申候、以上、

代官司

梅北伴左衛門印

祠官

感應寺河内印

26 ○ 覚

忠久様三ヶ國江御下向之時分、頼朝公より富山を父

とせよ、梅北を母とせよ、三ヶ國之者共ハ御家人たる

べしと御教書を下給、御下向被遊、庄内南郷堀之内御

所へ被成御座候時、富山之聲に被成御成候、就其梅北

神柱を御信仰被成候而、神柱御祭ニ一兩年御自身御参

詣被遊候へ共、其後薩摩方御移被遊候故、富山へハ名

代被仰付、御代相勤申之由候、依之私先祖代より

至三只今、毎年御祭之時分ハ鐘など為持申候而、梅北

衆中何茂上下着用ニ而、屋形様御名代之御供之由ニ

而召列參詣仕来申候、此等之由緒、古来より申傳候付、如斯御座候、以上、

元禄十年丁丑

六月五日

富山六兵衛印

△

右に見得し（神社宮と宇佐八幡の両社は、前の庄官等が言上状に併せ考ふれば、島津御庄を開發せし平大監季基が長元年中に創建したる神社、即是上状に謂へる長元年中に崇たる両社是にて、右の十なり、右に所謂十二祭も、同じき状に年中行事といへる事におもひ合せられ、二祭も同じき状に、年中行事といへる事とおもひ合せられ、いよく島津御庄開發の由緒も疑なき事とらん、慶長五年正月十一日、酒匂新右衛門が呈上せし訴状に、かくなん見得考えらるゝなり）たり、首尾を省き左に抄出す

27 一 忠久様、薩摩大隅日向、其外上方江四ヶ國、七ヶ國御

給被成、當國江御下向之刻、豊前國宇佐八幡宮へ御參

詣之時、御太刀を酒匂江被仰付、供奉仕候、於（素袍款）社檀

青錢二枚、御蘇芳の袖にふりかゝり候を被成頂戴、

酒匂ニ被下候間、代々倅家ニ覺悟仕候事、

此間略ス、

一 愚親江鎌田尾張守殿御使ニ而、忠久様宇佐八幡宮江御參詣之時、錢ふりたる由被聞召及候、于今覺悟仕候歟と被成御尋候間、則 義久様江掛御目申候、其後ハ不被返下候条、定而御物之内ニ可有御座候事、

右、愚親とあるハ、日當山地頭にて右馬頭忠將に給事して、永禄四年七月、馬立の戦ひに陣歿せし酒匂源左衛門なれば、御覽に備へけるも永禄三四年以前の事に當れば近古の説にハあらず、然あれバ所謂宇佐八幡は、豊前のかたより島津荘の内に祠れる、右の宇佐こそ近からめ、さあるを豊前と傳誤るにあらずや、併せ考べし、

△

28 (別紙、㊦ナシ)

「此梅北之神柱・宇佐両社宝殿内ニ古物之文字残候ものハ無御坐哉、就中、神鏡共も於有之ハ、裏銘など之有無御札知らせ被下度、向ニ御願申上可被下候、此願主平大監季基弟ハ、平判官良宗と申人にて、始良開發之

29の1

祖と古系圖ニ有之候処、此度郷土年寄田野邊甚藏と申人、始良八幡社内之神鏡を拜見候へハ、裏之方くぼり候成ニ丸き鍋蓋之様成板を恰と押はめ有之、引はなし見候へハ、長久四年平判官と書花押御坐候由、鏡と板と合せ候間ニ書付有之候得ハ、七百九十一年成事候へとも、文字もよくよめ居候と承候、梅北神柱・宇佐ハ長元年中ニ奉崇と古文書ニ出候、長元十年長曆と改元有之、四年ニ又長久と改元、同比之創立ニ御坐候、依之梅北のも右躰之古銘ハ無之哉、尚精蜜ニ御探らせ被下候へハ無此上も安心御坐候、萬々宜御取成奉頼候、

普門院

季安

「帖佐土安樂五郎左衛門藏〔本〕」

○座衛御願大曼茶羅院 一字三間
『庄衛』 『折願所ノ意カ』
『回』 『クワイアツヘ』

弘安元年歲次 戊子八月日修造之、
『寺ハ』

右當寺者、其仁安二季歲次 尋譽聖人造立之、大願主當檀那伴朝臣兼高也、而其彼カレシ從カレシ百十餘廻之間於相代、於後カ弘安元年八月廿九日時正月初日、尋譽聖人殊孫弟『子カ』

29の2

法橋上人位舜應、為大勸進造立之、于時施主兼高五代孫子右衛門尉伴朝臣助兼六代孫子方郷〔北カ〕弁濟使伴朝臣兼郷、但前者雖為一間四面、法會時堂内狹少之間、座席依有其煩人、改前造所造於三間四面、仍銘如舛、
 造營奉行僧舜應

（本文書ハ「旧記雜錄前編」一七九七号文書ト同一文書ナルベシ）

右の字、すべて古躰らしく、其後〔缺〕を其彼とかき、百十餘廻の廻〔回〕を廻とかき、弘安元を於安元とかき、如件を如舛とかくの類、ミナ文字に矇き人傳寫を誤りしと見ゆ、是に據れハ座衛御願もまた庄衛御願の誤なるには疑なし、然在れハ庄衛とハ島津御庄の府〔府所にて、安元二年七月日、輪津御庄よりの下云、庄衛宣承知云云の庄衛に本〕といふ事にて、近衛領の時、三ヶ國諸ノの寄當るもまた疑なし、府本とは近衛整ノ御領の三ヶ國諸方に散在せし寄郡の政令を出郡に政を出されし官廢あるの所なれば、此大曼茶羅〔されし官廢の在所を云ふなるべし、さあれ、此大曼茶羅院西寺といへる寺は近院西生寺といふ寺は、近衛家御菩提などの為に建ら衛領庄園長久の御折敷、またハ御先祖冥福の為に建られ御願の字であるは〕れしハ、明らけし、其かうがへハつばらに本篇に述〔レバ〕おきたり、併せ証すべし、

（本文書ハ「旧記雜錄前編」一七九八号文書トホボ同文ナリ）

○ 奉修造西生寺大曼荼羅院

奉為金輪聖皇、天長地久、別者當且那藤原朝臣忠武、官祿增進、武運長久、領内泰平、萬民豐樂、殊者當城軍代藤原久友、御息災延命、中文抑尋響者、(舊寺)扇天台之教風、而湛比叡之法水、亦略兼又見先修之銘記、草創者、尋譽上人之開基、伴朝臣兼高、仁安貳季丁亥、第二再興者、舜應聖人之勸進、(當)且那伴之兼郷、弘安元稔戊寅云云、

皆明應九歲庚申三月 日 大勸進衆徒中

大檀那藤原朝臣忠武 本願田中坊沙弥秀珠

奉行大藏朝臣匡成 大工藤原武典 小工藤原勝正

(本文書ハ「旧記雜錄前編二二七七号文書ト同一文書ナルベシ」)

霧島山西生寺大曼荼羅院、勅〔筆〕額有之、後鳥羽院
▽或伏見院^(廣)震筆、(或伏見院)共申傳、本尊阿彌陀
閻浮檀金古往今來秘佛也、并鎮守山王權現、脇宮弁財天社有之、右御堂一丈間、七間四面、四方各丈間一間椽礎茅葺也、古寺領町反不知、凡只今謂之三千石公知行三百五十石寄附之、其後五十石ニ罷成、大伽藍も悉破壊、故蜜宗第六世住僧實海法印、御堂引移寺中、四間三間前四尺堂造營、

于今有之、又屬五十石被召放、唯今ハ寺地許也、來梅北引移云々、山号符合之、又於霧島本西生寺ト云谷有之云々亦平家小松殿建立、此時大橋中将殿有下向被造營云々、以是勘之、於霧島山小松殿建立之棟者、梅北引移而兼高被建立之棟

欽、素琴小松殿寄進云々、裏ニ奉寄進西生寺阿彌陀佛御寶前、下ニ字有、脇寺四十二坊、名都而略ス、其中玉藏坊住持有トアリ、三

味衆九名略ス、當寺門下成福寺、棟札永享三年庚戌建立、大旦那中務少輔藤原知久、當住持法印真海等云々、唯今ハ百姓地、神柱宮座主、于高二十六石、只今五貴船寺、貴船社座主、于今當寺ノ末寺也、高二十六石、今三石七斗、性淨院普門山、尊星院妙見山、新山寺、脇寺有六坊云々、于今當寺ノ末寺也、高二千手院、十六石、今六斗一升分、醫王山勝軍院、高二千手院、脇坊有六坊云、山野悉為、右六ヶ寺ノ内三ヶ寺敗壞也、皆為山、内山寺、百姓地、

西生寺内
○山王社 (木) 本像七体 焼金鉢二体

右神体厨子ノ中ニ五寸方許ノ板(ヲ藏ム)、其文(如左)、

『仁』安三年(丁亥)三月二日(庚子)造立之、

為大施主『且那散』位伴朝臣兼高并藤原氏

息災延命「次諸」人快樂、殊致精誠所造立

如件、

常福寺旧跡

(本記事ハ「旧記雜錄前編一」四五の2号トホボ同文ナリ)

也)板に三年とかきしハ▽二年の△誤なるらし、
字なれども△仁安丁亥より今とし天保癸巳まで六百
六十七年(尚文字も大概よまれて、當寺の什宝となるは是に珍奇ならずや、但し
になれり、寔に當寺の什宝と為へきもの)
也)板に三年とかきしハ▽二年の△誤なるらし、

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」四五の1号文書ト同一文書ナルベシ)

「結」誓願大悲中 一人不成二世願
「述」虚妄罪垢中 不還本覺捨大悲

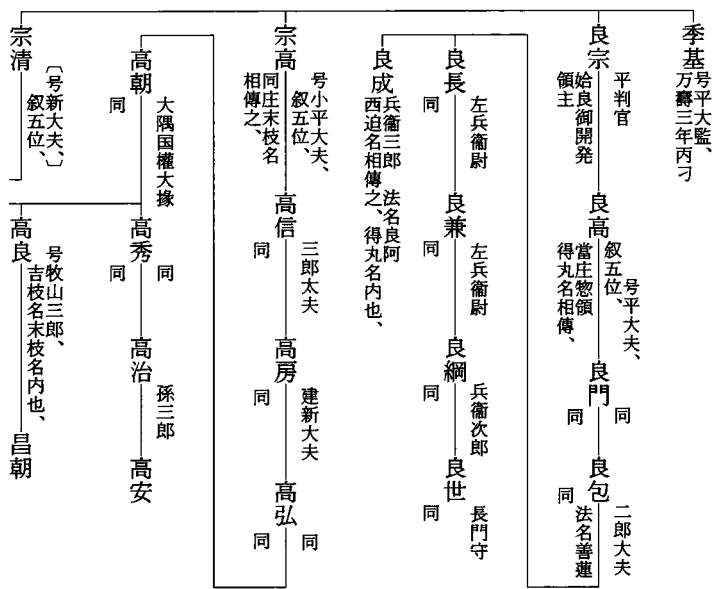
右▽やう△檜板(にかき)「は」先年西生寺の仁王▽像の△朽
損し▽たる△体内より「小板に細字あるもの」露ハ
れ出「事ありしとぞ、必ず是なるへし」、帖佐士人
安樂氏に藏めし弘安元年戊寅八月再建の銘に、庄衙
の御願(として)「に」當寺を仁安二季歲次丁亥尋譽聖人造立之、
大願主當檀那伴朝臣兼高也と記(おける)「にも」能
く△符合し、疑なき當寺開基の時▽造れる△仁
王の体内に銘し納めたる▽小板の△古物にて、▽細

右、此地常福寺門と申候、霧嶋山西生寺、六ヶ末寺之
一寺ニ而、久敷破壊仕、當分寺跡數ニ相成、其數之内
ニ近年迄阿弥陀堂有之、是も及破壊、隣家之者假堂ニ
阿弥陀木座像
壹尺九寸安置いたし、花香相備置候処、文化十
五年之夏五月、大雨大風之節破敗いたし、後光落損し、
鉢内より鬮體出候由ニ付、由緒相糺申候得共、所中為
何(誤)誤為存者無御座、其後家中西牟田傳兵衛与申者持傳
候旧記ニ符合仕候ニ付、左ニ書写差上申候、文明十八年
十月二日
西牟田三河守武則書置候、新納三河守是久、同左京丞忠祐戰死之次
第なり、此一件ハ、別段考置趣(有之)、此に略す、此常福寺、則
成福寺なり、(あれ)

大曼荼羅院と▽いふ△五字の勅額、裏に永仁三年乙未
七月十日、正四位下左衛門佐藤原定成書と記しあると
「そ」▽さあれば、前に宸筆と傳へるハ誤ならん、永
仁も△亦島津庄官觀阿等か時に當れり、「前にのせし」
庄官言上状に▽いへる△當御庄寺社繪圖(とある)「とある」寺
社ハ此西生寺と神社・宇佐の両社などを指せるハ明ら
けし、又仁安元年建られし、今安久村の醫王山知足院
正應寺も、同じき寺社の中と考合らるゝ事あり、つば

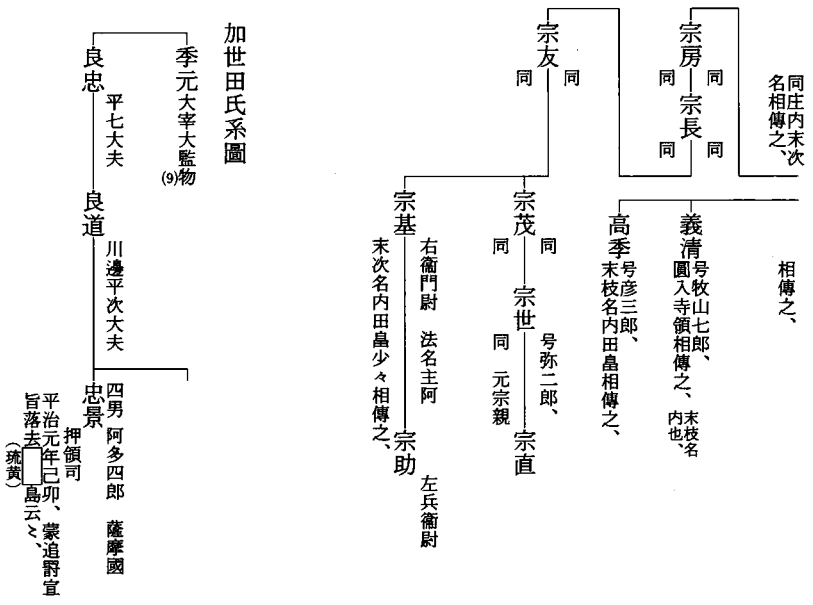
らに前編に述置也、

32 ○得丸氏古系圖

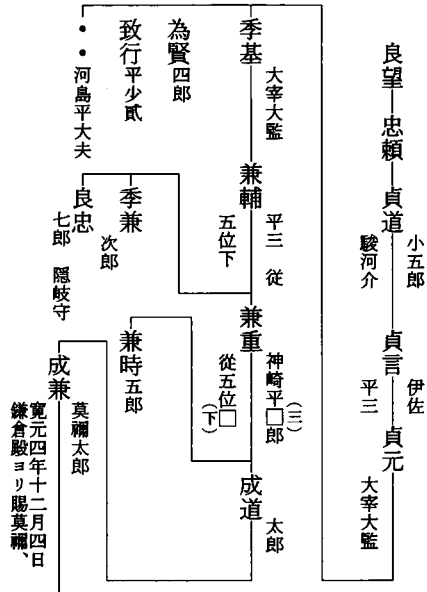


33

加世田氏系圖



34 ○阿久根氏〔系圖〕



35 ○「名勝差出」

一安久住富山家事、九月九日、正祭禮之節、古米守護御名代參詣相勤、手鐮挾箱供廻召列申候、右年月由緒相知不申候、御元祖忠久公建久八年三ヶ國守護職御給候而御下向之節、日州島津之御庄中之郷安久堀之内ニ御所作ニ而被成御座候由、其以前より罷居候与相見得申候、往古より傳來之文書等御座候ニ付、左ニ書写

差上申候、

36

「此二通ノ」 ※ (ハリ紙貼付、左ノ三行ハ朱ニテ抹消サル) 全文ヲ見
 △ 承安五年八月十四日
 也、然ア
 ニハ又考
 トモアル
 (シ)、ハ朱ニ
 テ抹消サル
 ※ (ハリ紙)
 「此二通補入ヘシ」
 (御カ) 庄政所下 百引村
 定遣并濟使職事
 勾當僧安兼
 (右人カ) 為令執行一事已上、所遣如件、郡内宜承知用之、(故カ) 下、
 (定脱カ) 遣如件、郡内宜承知用
 (悪)

○ 安元元年十二月 □
 別當伴朝臣判
 別當伴朝臣
 「此外十一人連名判」

〔本文書ハ「旧記雑録前編」一五三号文書ト同一文書ナルベシ〕

37

御使下家〔司源〕判

庄政所下〔御カ〕 百引村

定遣并济使職事

▽^④勾當僧安兼△〔ニハ▽△部分アリ〕

「二字 不知」人、為彼職殊致勸農、為令勤仕庄國〔一字 燒キ〕

之課役、所定遣如件、住民等宜▽^④承知、用之、

故下△

承安五年八月十四日

別當伴朝臣

〔其外八人連名判〕

〔本文書ハ「旧記雑録前編」一五〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

38

右、都城安久居住之富山氏文書、先年彼方記録掛荒〔畿方〕川津右衛門写見せ候を、先頃反古之内より見出候へ

とも、字画不分明候上連名も略有之候間、追而摹写

之良本を求可書載也、尤伴朝臣ハ梅北兼高などにて、

嶋津庄政所之別當欵と被考事□以上、

季安記

39 ^{④下} 嶋津御庄

補任百疋村并济使職之事、

勾當僧安兼

〔右人カ〕 任相傳文書之理、補任彼職畢、庄衙宜承知、敢

勿違失、〔故カ〕下、

安元二年七月 日

〔留カ〕 守沙彌判

〔本文書ハ「旧記雑録前編」一五五号文書ト同一文書ナルベシ、尚「太妻姓来由」五号・「靈遊雜記伝」六号文書ト同文ナリ〕

40 ○□件境神官等、不知▽

□之状、猥依致非論、令言上子細於京□

□令停止彼濫妨之由、殿下政所□〔御カ〕下文、□

□〔將カ〕軍家御成敗之状、兩度被成下畢、仍守彼状、□

□國守護所并御領方惣奉行所八木入道・同惣□

□庄司打莅件境、加見知之處、次第證文与□

〔無有相違事、神官等之非論、誠以顯然〕
〔者、為止後代之非論、所令記錄如件、

元仁二年二月廿一日

左近將監藤原朝臣(花押)

別當伴朝臣(花押)

右近將監藤原朝臣(花押)

別當藤原朝臣(花押)

左近將監伴朝臣(花押)

別當柴嶋宿祢(花押)

別當藤原朝臣(花押)

文章生伴朝臣(花押)

別當伴朝臣(花押)

別當藤原朝臣(花押)

別當藤原朝臣(花押)

別當伴朝臣(花押)

別當藤原朝臣(花押)

別當伴朝臣(花押)

沙 弥(花押)

執行散位伴朝臣(花押)

別當柴嶋宿祢(花押)

別當藤原朝臣(花押)

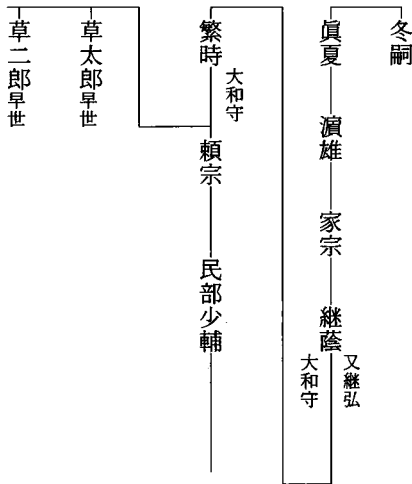
執行沙弥(花押)

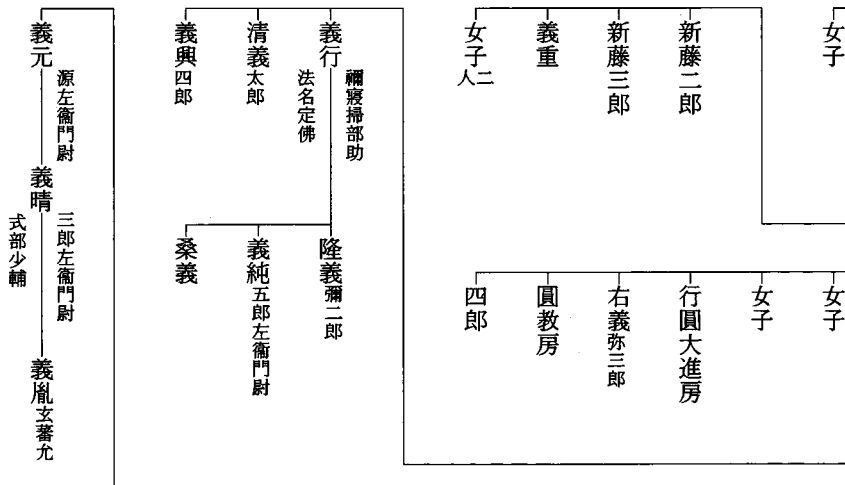
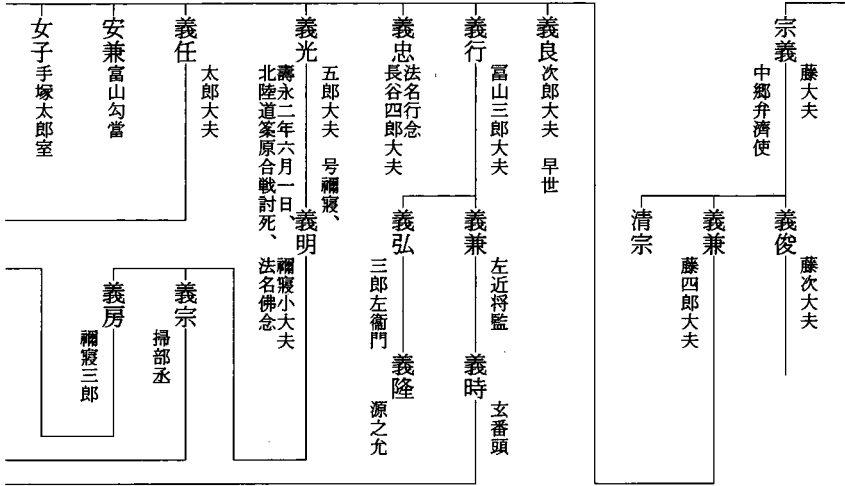
當村地頭右兵衛尉中原朝臣(花押)

目代少監物藤原朝臣(花押)

41 ○富山氏系圖鈔

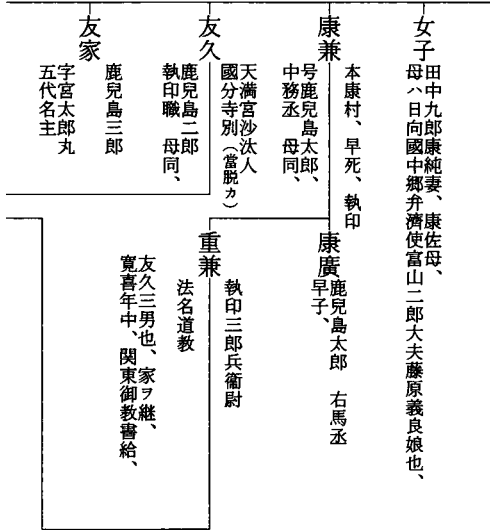
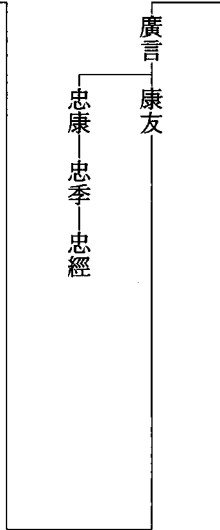
(本文書ハ「旧記雜錄前編」三三二号文書ト同一文書ナルベシ)





42 ○市来氏系圖鈔

具驥—正邦—孝親—孝言—忠方—言國—友兼



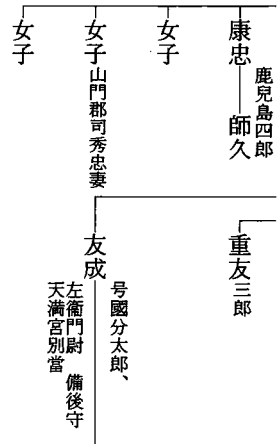
44の1

〔長門本平家物語ノ抄〕
 (ハリ紙)
 ○かくて日数(日)つもり行(日)へ、ひうかの國あやへのミ(瀬)な
 と、わか(和歌)の津にこそつかれけれ、夫よりして、てつ
 輪(三足)のさかにとり上給(上)、下臈(下)ハかなハさると
 も申けり、是ハ我朝人皇の始、しんむ(神武)天皇のひうか(日向)

43

〔廿卷平家四ノ巻〕

○従夫室町船引大山とて、月影も日影も洩らす、我々石
 巖を凌越(シノギヨコヒ)、日向國西ノ方、嶋津ノ庄に着給ふ云々、
 〔右、丹波少将成經、薩ノ硫磺島に流さるゝ條に在り〕



國宮崎の郡にて、(帝都)かまどをたて、御即位有し時、三(みかど)

女一男くたりて、(士)つちの佛をつくりて、てつりん三

そくをたて、供御をしまつりけり、それよりし

て、最初竈門三皇の峯とも申、都にありし時ハ、家

の日記をもて是をしるといへとも、いかてか親に見

へき、遠流のおもひ出に、かゝる名所を見るこそ、

すこしなくさむ心地すれば、(イ町)室野船引大山といひて、

月影日影もさゝぬ、深山の(嶽)かゝたる石岩をしのきこ

へて、ひうかの國西方、(本ま)嶋津の庄につき給ふ、か

の庄内にあさくら野といふ所に、一ツの峯たかくそ

ひへて、煙た(え)へせぬ所あり、日本最初の峯、霧嶋の

たけと号す、金峯山、しやかのたけ、富士のたかね

よりも、最初の峯なるゆ(え)へに、名つけてさいしよの

峯といふ、六所権現のれい地也、かのいたゞきに巖

穴あり、長時に猛火もへあかりて、雲につ(く)く、い

つくとなく黒砂降下りて、其す(ま)へ何千里とはかる事

なし、しかれともかのミ(を)ね何の本地ともしらざりけ

るを、播磨國(書高)しよしやの山をこん立してけるし(性空)やう

くう上人、かの峯に登山して、この神の本地を拜ミ
奉んとちかひ給ひて、中七日参籠して、法華廿八品、

尺の石の面に書寫してこめ奉り、そとはを作り、五

りんをきささミ、梵漢兩字を書なとして、わすれ形身

を残し、梅桜をミつからう(あ)へおき、様くにかの山

にわすれかたミを残しなとして、宿に下向あり、

中略さてはや小夏影とかミあかさかといふ所をう

ち過て、大すミの國けしきの森に着給ふ、少將此森

を見給ひて、秋近きけしきの杜になくせミの▽

「涙の」「本ま」△露や▽「下葉」△そむらんといふ名所ハ是や

候ハんとそおほしめしける、正八幡宮の御あたりを、

よそなからおかミ奉り、宿願を立て出られけり、

中略、さつまたとハ(藤原方)そ(總)う名(な)、きかい十二の嶋な

れハ、くち五嶋ハ日本にしたかへり、た(お)く七しまハ

いまた我朝にしたかハすといへり、白石、あこしき、

くろしま、いわうか嶋、あ世納、あせ波、やくの嶋

とて、「永長部」「沖繩」「糸らふ、おきなハ、きかいかしまといへり、

くち五嶋のうち、少將をハ上(三)のとまりのきた、いわ

うか嶋に捨(お)をく、康頼をハあこしき、しゆん寛をハ白石か嶋にそ捨置ける、かの嶋にハ白鷺おほくして石しろし、水のなかれにいたるまで、波白くそ見(え)へて、いさきよくか(し)りけれハ、白石嶋といひけるなり、せめてハ一嶋にもすてられたらハ、なくさむかたもあるへきに、はるかなるはなれしまにす(て)置けれハ、くるしきなといふもおろかなり、

※(行間)

〔按に日向國をバ〕
〔「日向ニ」西日向・東日向ト(分け呼けること昔よりありけるにぞ)太閤西征ノとき、

諸縣郡ノ内西日向百三十七ヶ村、東日向ノ内穆佐・飯田・

内山・八代・綾五郡二十七ヶ村、都合百六十四ヶ村ヲ(ハ)

薩隅ニ加へ賜トアレハ、西(く)方トハ西日向ニアル島津ノ庄

ト云コトナラメ、(且庄内とミへるも)〔左アリテ道程ノコトトモ思へハ〕、今ノ

庄内(あたりとミへたり)〔ヲ云ヘルハ明ケシ〕、亦〔一證ナリ、〕霧島ノコトハ

別ニ(考ことありて)〔氏)伴譜ノ▽譜に△(つばらに述おけり)〔天忍日命ノ譜

ニイヒオキタリ〕

44の2

45 「東鑑」

〔右(薩摩方十二島の事)伊集院兼誼うしか東都より拔寫し給へれハ、こゝに載おくなり〕、嘉禄三年、〔御元祖〕得佛公より 御二代道佛公にゆつらせられし国の中▽にも△薩厂方地頭守護職并十二嶋地頭職とありて、文永二年六月、道佛公より 御三代道忍公に▽譲られしに△も、十二たうのしまと(書せられ)ハシ、元徳三年八月、御五代道鑒公より 宗久公に▽ゆづらせられし時に△も十二嶋のちとうしきとミへ、またその頃御所領の注文にも、薩厂国河邊郡同十八島ともあれハ、右の物語に(十二の島とへるも、能く積ミレバ、得佛公御地頭所の十二島も、おなし輪十二の島も、得佛公地頭し給ふ欵ハた別の十二をバ指すならん、此等のかうかハ、別に南聘紀考と名ケ、三冊を著は欵、おきなハとは沖繩にて、今の本琉球なれハ、せり、おきなハとあるハ、即本琉球の事にて、俗に昔より沖繩島といへり、大岳公の時より増封といふにもあらず、そもく近頃さる有司の間を承て、薩州唐物の来由も書綴り、其中にも大槓、申述の御領欵、再考すへし、新井氏の南島志、白尾氏たれ、此にもらしぬ)の南島考てふ書とも假て研究せん、とかく

○元曆二年乙巳七月廿二日壬寅、日向國住人富山二郎（本）太

夫義良以下、鎮西輩之可為御家人分者、他人不可令煩

之旨、今日所被成遣數通御下文也〔云々〕、

46 「高岡土攝宿十郎右エ門藏本」

○嶋津庄日向方富山七郎左衛門尉義道申、嶋津院住人右

衛門五郎致追捕蒞田以下狼藉由事、訴狀副具如此、早

土持掃部左衛門入道相共莅彼所、且遂檢見、且企參上、

可明申旨相觸之、可被執進請文、若令難澁者、載起請

之詞、可被明申也、仍執達如件、

元弘三年十月十三日 （島津貞久・道鑑）
沙弥判

攝宿郡司入道殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編一」一六六八号文書ト同一文書ナルベシ〕

〔都城富山氏藏本〕

47 ○日向國富山（⑩鍾）補房快實申、嶋津庄日向方北郷宮丸名内富

永・成清等事、舍兄同孫四郎義恒、隱蜜親父富山掃部

左衛門入道覚成讓狀、押領下地無謂、所詮、快實所帶、

49 「全」

任親父覚成讓狀案文、快實可令執行之狀如件、

建武元年五月十日

源朝臣御はん

〔本文書ハ「旧記雜錄前編一」一六九三号文書ト同一文書ナルベシ〕

48 「全」

○嶋津御庄廳政所補任

貴船宮大宮司職事

▽（栄カ）⑩散位藤原義□△（ニハ▽△部分アリ）

右職者、尼妙覚（⑩手）左衛門太郎邦兼〔弓箭〕訴陳之處、

邦兼依無理、相副御下知以下調（及也）、避渡于妙覚早、雖然

妙覚依（⑩為）非式之身及知行之間、被召出彼職早、處義榮

為▽（本）□△子孫之間、任重代實、所令補任也、早可

被狀如件、

康永四年三月五日

目代僧儀實

〔本文書ハ「旧記雜錄前編一」二一九六号文書ト同一文書ナルベシ、尚「富山文書」ト同文ナリ〕

○日向國富山彦五郎義弘申、嶋津御庄日向方北郷宮丸名

内富永・成清等事、相傳之段無相違候、仍京都御吹拳所望仕候、可有申御沙汰候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年三月十一日

越後守氏久(◎花押アリ)

進上 齋藤六郎左衛門入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二八五号文書ト同一文書ナルベシ)

「加治木桑波田氏藏本」

○右近衛府政所下 薩摩國牛屎郡相摸人大秦元光并府使

「和氣氏」
「光里等」

可早任道理停止國吉妨田地并取田貳拾伍町參段事
「安元三年」
「九郎大夫」
「番長ニテ」
右、得去二月日元光并府使光里等解状傳、云云具、而

件元光田地、以去去年可停止國吉妨之由、被宣下畢、

而彼國吉或相語國衙在廳官人等、或相語嶋津莊官等、恣去年秋取作田毛稻之由、有其聞、事若實者、且任道理、且任先日下知之旨、停止彼國吉妨、早可糺返件取取稻之状、依大將宣、所仰如件、敢勿違失、故下、

安元三年四月 日

※2

將曹惟宗	朝臣清景
將監藤原	朝臣定從
番長中臣	宿禰近誠

(印款)
(◎成)

權中將藤原朝臣

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」五二・五四の号文書ト同一文書ナルベシ、尚本文書原本「桑幡文書」ニハ軸二箇所・奥ニ二箇所「右近衛印」朱印アリ)

※1 (頭注、◎ナシ)

「季安公卿補任ヲ按ニ、此時ノ右大將ハ權中納言從二位平宗盛ニ當レハ、此ニ大將トハ宗盛ノ宣フト云コトナルヘシ」

※2 (頭注)

「此文書ノ解ハ別ニ季安著ハシ置タリ、故コ、ニ略ス」

(右文書ノ解ハ往年桑波田が需に應テ、別に一小冊を著はしおけり、時の大將は、公卿補任を按に、權中納言從二位平宗盛の、右大將たるの年間に當レハ、宗盛の宣給ひし仰なるべし)

▽ 中巻 △

○董部之時分承候し程ニさたかならず候得共、存知之分令申候、抑當家御先祖忠久と申ハ、右大将頼朝之御子、三男にて御渡候、御母ハ丹後之御局、比企の藤四郎かあねにて御渡候、懐妊候時、頼朝之御臺ニ位殿と申ハ北条四郎時政かあね(つと)、仍此二位殿之御はからひに、謀叛をもくわたて天下を(お)をし取て、何事も二位殿之おほしめさるゝまゝにて候間、丹後の御つほねの御腹(ニ)にて、御子有へきよし、其間へ有ニよつて殊外御そねニにて、彼女房海ニしつむへきよし、頻ニ被仰ける間、日向國へなかし被申へきにて鎌倉を出させ給けるに、若男子(ニ)□而あらハ、道より御左右を申へしと、頼朝被仰下けるに、摂津國住吉にて御腹氣つかせ給ふ間、御宿を借候得共、住吉之習にて、不浄之人ハ久しくいむ所にて候間、更ニ宿をかさず候程ニ、折節大雨にて候けるに、道の邊ニ平き大石候ニ御こしをかきすへ、臆而御産候ニ、男子にて御わたり候間、鎌倉へ飛脚を立此由を申、

住吉之神主此由承、いそぎ御所をあげ候て入申候、御産候間ハ大雨にて候に、ミやうふ殿其あたりにそひ申て居て候ける間、當家ニハ野干殿と大雨を吉事ニせられ候由(承候脱カ)、彼石を御産の石とて、此邊よりのほられ候年来之人ハ、拜し申けるよし、老者共被申候し、然間男子之由、頼朝被聞召候而、摂津國より被召返、八文字民部太夫廣言預申て養育申候間、丹後の御局を給られ候てさいあひ候、忠季と申ハ民部太夫か子にて候、忠久一腹の御兄弟にて御渡候、随而初ハ惟宗氏、承久三年ニ改姓ありて号藤原と、民部太夫ハ日向國司にて候ける間、嶋津ニ居住(す)□、民部太夫も比木ノ判官も、承久兵乱に謀叛ノ人数にてうせ候ぬ、其子孫、土佐ノはたの庄ニ、ひき・なかむら・さかハ・ひとをかとて、(カ)今もあひ残候云々、(書おかれし)山田聖采自記には、御養父八文字民部太輔殿も、始ハ嶋津ニ居住有歟、嶋津殿と奉申、其後ハ八文字殿、土佐國ハ御移、中村なとハ御座候由、其末于今御座候と申傳也と有之候、季安考に、安國寺ハ八文字と比木か事を併せ申(をいひて)、後(書おかれし)に其子孫、比木中村なとて今も相残候と「あれ、べ、此」比木中村なとハ皆比企判官の子孫(をいひて)にて、八文字の子孫とハ、別事にハあらすや、八文字の子孫ハ市来氏にて御國に居れる歟、また△作者部類ニハ「又左の通也」(左の如し)の市来あたりに殘と云説に合はず

作者部類⁽¹²⁾

五位

筑後守

孝岐守

惟宗廣言

自承曆元年千五、玉一、至壽永元年少監 式部

惟宗忠貞

惟宗行政筑後守行貞子 載一、

風一、新千一、

權介

良仙

僧都

民部大夫惟宗時助 勅一、續一、遺二、

凡僧下

定覺

宗八左衛門入道 称廣言流

才一、

右建武四年七月六日類聚せし古書にて、右の如く廣言の名に似たるを、^(采)採取めて、^(此)此に抄載し、^(考)追て考べし、^(備)備し、

53 「山田聖榮自記」

○嶋津忠久御記云、忝も源之頼朝之御子頼家・實朝者、

北條四郎時政息女二位殿之御腹、當腹之御事候、三男

忠久与奉申は、比企判官義員之御妹丹後之御局之御腹

之御子なり、然ニ二位殿御妬深ニより、八文字民部太

輔と申人ニ丹後之御局を給^(り)妻として、忠久をも養父

八文字民部太輔か宿所に育ひ奉る云々、

54の1 「御當家之由来」

○御當家者、頼朝卿ノ三男、豊後守忠久、嶋津判官と申

奉ルヲ為曩祖、御母者、比木藤四郎義員之妹、丹後ノ

御局是也、頼朝殊ニ御最愛有テ、已ニ懐人ト成給フ、

御臺様二位殿ト奉申者、北条四郎時政息女、相模守義

時之姫也、嫉妬世ニ越給フ間、彼御局御懐人ノ事聞食

シ入テ、速ニ繪島ノ沖ニ沈メヘキ由逆鱗有ケルニ依テ、

不及力給日向國ヘ流シ奉ル由ニテ、舍弟之義員ニ仰付

※1 ラレケル様ハ、女子ナラハ汝トモカクモ可計、若男子

ナラハ何所ヨリモ可達上聞之由蒙仰、攝津國マテ奉

具下ラレケルカ、當國住吉ニテ御産氣出来ト見給フ、

其アタリニ御宿ヲ被借ケレトモ、社領ハ不淨ヲ忌由申

テ、一宿ヲ奉ル所ナシ、サテアルヘキ亶ナラネハ御興

ヲトアル石ノ上ニ搔居、御旅宿ヲ求^(ル)間、御産ノ紐ヲ

解キ給フ、則男子ニテヲワシマス、カクテ一夜ヲ明ケ

給フニ、大雨頻ニ降テ、深夜ノイブセサ限ナカリシニ、

一狐来テ火ヲ灯シ、其アタリヲ奉ニ守護ニ風情也ケルト

カヤ、サテコソ當家ノ御氏神稻荷大明神ト崇給ヒ、狐

ヲ殊ニシツシ給フ其謂也、直ニ名ヲハ不申無名殿ト申

也、去^レハ必ス御吉事有ントテハ、狐声ヲ立、御發足

ノ砌ニ雨降^レ、其御佳例ト申傳タリ、其御産之石トテ

于今是有、住吉之社頭ヨリハ南、古池ノ邊ナリ、

倉へ注進申サレタリケレハ、攝州ヨリ召カヘサレ給テ、

義員ノ宿所ニ置奉リシカ、其隠レヲワスベキ、御臺様

聞食シ付給ヒ、以ノ外ニ逆鱗有^レウエ、當時北条殿大小

夏執行、粉骨ノ忠節ヲ盡サレタル人ノムスメニテ渡ラ

セ給^レエハ、御臺様ノ御鶴執難默止思食ル、ニ依テ、其

比名ヲ得タル八文字民部大輔惟宗ノ廣言ト申ケル人、

無双之頼朝御寵愛ナリケル間、彼御局ヲ廣言ニ給リヌ、

則忠久ヲ「モ」養育仕奉ルヘキヨシ仰付ラレ、彼所ニ

テ生立^テセ給フ、サレハ暫者御養父ノ姓ヲ御借有テ、惟

宗ノ忠久ト申奉也、如此アナガチニ副シ給フ夏ハ、御

臺腹ノ御曹司實朝之御料ノ御為、御用心ノ故トソ承ル

云々、

54の2 ※1

〔伊東肥後守祐昌家臣吉田與三覺ノ赴宝永六年八月聞書ノ

内ニ〕

寛永十九年正月十一日、御當地出立、三年御勤、正保元

年御帰國、

一京都大坂御留守居之節、大坂住吉之かこひの内ニ嶋津

石ト申、所之人申傳候、むかし 忠久公御誕生被成候

所之由ニ候、此石ニかきも無之候を、祐昌御詰之内ニ

石ノ井垣を御申被成、御調置被成候、末代ニも井垣ニ

而候、京都御同役ハ高崎惣右エ門殿ニ而候、惣右衛門

殿ハ格別御若輩ニ而候、本文之石垣みかけ石、于今た

をれ有之、近年又ノあたらしく出来候得共、其内ニ

有之候、[▽]是は伊東肥後守祐昌家臣吉田與三といふもの覺た

る事共を、寶永六年八月聞書せしもの内ニあり△

54の3 ※2 (頭注)

〔朱カキ〕

〔伊東肥後守祐昌家臣吉田與三といふもの覺たる事共を、寶永六年八月聞書せしもの内ニあり△〕

「古今戦」

違へり、社頭の在所、古にかはれる状、ハた此御産石を移せしか、蓋亦此記者うつゝに其地を踏しらで聞たかへたるまゝをしるせる状、いつれに今、南ならざる事ハ決せり、（といへり、さて）
〔考へしと浮帖せり、季安いふ、〕此御由来の今とあるハ、（北）
 永正六年より同十七年までの詞なり、こは本篇に〔詳〕註し
〔おきぬ、〔併せ知へし〕、〕
〔今の重臣が歌として聞けり〕
 ▽萬代もかけそくつれす此石や

三國よくにのしつめなるらん△

○抑薩摩之國ノ太守島津殿と申ハ、頼朝之三男忠久之後（胤）
 院也、去程ニヒキノ藤四郎義カスノ姉ニ丹後之局ト申テ天下無双之遊君也、内々頼朝之御手ヲカケサセ給間、程無ク懷人ニ成給、此亶北条ノカミ様聞召、御弟ノ安時・吉時ナトへ仰せケル様ハ、此局如何成洩瀬ニモ沈メハヤト有ケレハ、彼兄弟三人計イにて、君之御心中者ヲソロシケレ共、姉ノ心ヲ休メン為ニ日向之國へ流ス由申ケリ、乍去頼朝へ此由申上、偏ニ暇ヲ御出シ候

※

得かした申、若左様無御座候ハ、御外聞悪敷事モヤ出来候ハント申上ケレハ、其時迄ハ頼朝モ未流人（之）□御事成レハ、彼北条カ心ニ不任シテハ如何トヤ思召ケン、菟も角モ北条計ヘトノ御返事也、乍去今程只モナキ由申候、何處ヨリモ産之紐ヲ解給タル御左右可申上ト仰ケリ、左有ラハ都之如く上せ、便り次第日向之國へ流ントテ、攝津之國住吉野原迄列下リケルニ、彼住吉之松原にて、俄ニ産之紐ヲトキ給、サレハ不思議之キスイ多カリケリ、先何人共無キ女房達之出来ラセ給而カイシヤク仕給、中ニモイトクラカリケレハ火ナトヲ燈シ、色々養生仕玉フ、明朝者、我々ハ鎌倉之若宮也、三島也、伊豆也、箱根也、木船、岩船、春日、住吉也ナト、テ聲々ノ玉ヒテ、カキ消スヤウニウセ給、見ル人聞人モ不思議成トソ申ケル、中ニモ稻荷ハ未立帰給ハス居給、折節大雨降りて住吉ノ不浄ヲ洗キケレハ、彼狐女ノ姿ニ身ヲ成シテ、若君ヲねムリカハラケナトシケリ、扱社御稻荷とハ知レケリ、此由鎌倉へ御内意申上ケレハ、當時平家繁昌之折ナレハ、我子ト不知様

※(行間)

「高尾野士出水(氏藏本)
次郎右エ門藏」

「口切ナシ」

宿をかりうけをき申、よくくいたわり申ける程に、十

三の御年までハかくし申しのひ給ふところに、その比奥

州ひてひらと申者緩急あり、これを頼朝御せいはいあら

んとおほしめし候得共、大しやうにさためられん人もな

し、畠山重忠に御頼有けれハ、重忠申されけるハ、今日

の御座しきに、左おりの(え)ゑはししてきたりけるわかき人

モテナシ、母ヲ誰ニモ遣セト仰下シ給、其比八文字之
民部太夫トテ、漢ノカウソノ後院成人御座マスガ、モ
トヨリ彼局者天下無又之女也、我モ能上薦ナレハ、此
女房ヲ給リ、都之カタ原ニ住給、然者彼君ハ生サセ給
時ダニモ、神々ケ様之キズイ有ケル故、本トヨリモ只
人トハ見得玉ハス、ハヤ勢程モ次第くニ乙名敷成セ
給ヘハ、頼朝モ天下之將軍ニ成セ給、我カ子トシテハ
則御恥有シトテ、時之攝政ニ而御座マス程ニ、近衛殿
ニ奉ル、去程頼朝程無クセイ將軍ニ成セ給テ、御祝限
リ無シ云々、

か大将と申、頼朝ふしんの事を申ものかなと思召て、や
かて御らん候ヘハ、重忠申やうニ、是ハ何ものかと御尋
ありけれハ、其時重忠申けるハ、是こそ丹後の局の懐た
いにてなかしまいらせ候ひし時、住吉にて御産のひほを
とき給ふ御子にて渡り給ふと申セハ、頼朝おほきにめて
たしと御らん候て、やかて重忠をちまうとかうし給へと仰
下候程ニ、重忠の忠と云文字ヲまいらせて、忠久と申奉
ける、其後丹後局ハ八文字民部大輔へ給てさいあいをな
し、男子二人出来たりける、忠久宇治川を渡し給ふ時御
供申、河を渡申ける時、馬弱くて河にうもれうせし間子
孫なし、其時鞍のもんニ桜のもんをしたりける間、御當
家ニ御嫌疑、又御當家ニ門屋きらい候ハ、かとやなき所
ニ御宿をめされて十三の年を御せいしん候間、其御賀例
を引也、

一三日まで松原にひくくして大なる石あり、其上に此子を
すておき申、三日すきて、八文字の大輔、今ハともにか
くにもならせ給ふらんとおもひて、参候て見申せは、白
き狐かこあり、此きつね「か」乳を参せて給(たりし)「事」を見
申候て、やかて御宿へ懐中申かへり、十三まで住吉に御
座候、しかるあいた大雨ふりて、やかてうふちなとをき

れ人しらぬ事也、

よめ申、其外ふしきなる事共多く候ぬ、八文字かうちハ
惟宗氏なり、市来殿先祖ハ八文字也、一比市来殿申され
けるハ、我家より嶋津殿御はんしやう候程ニ、惟宗氏ニ
て御座候と申され候、惣して水上をたゞし申さハ、源氏
にてこそ御座有へけれ共、此方へくたされ給ふ時氏重忠
が養子として、氏をハ近衛殿まいらせ給ふよつて、忠
久ヲ藤原氏と申奉也、つくしに御下候ほとに、幕のもの
ハ何にて御座候するやと重忠頼朝ニ申されけれ□、おり
しも御臺時分にてありけれハ、はしを座敷になけ候て、
是かことくにして有へしと、御意くたる時、御はし十文
字になる間、とにかくにし人ノ十文字と心得候得共、
十文字にてハなし、御はしのちかふもの也、式の十文字
のやう、筆のいきおいはねたる文字のすかた、かまへて
あるへからず、ミぬ人幕の文ハ、此方へ御下候しるし也、
人ノかやうなると、當家の御事ハくハしくしらぬ也、
御ゑはしハ前ニかきつけをく、忠久此方へ御下候、日向
國嶋津庄と申ところに御下候所の名におほして嶋津と号
す也、忠久御腹ハ、はしめハ丹後殿と申御すゑの方の人
なり、頼朝御てうあひ有しによつて、後ハ局になり給ふ
と、是名付候故に、丹後のつほねと今にこゝものい

56 「東鑑」

○治承五年辛丑七月十四日 十月十七日甲寅、御臺所并若

公自御産所入御營中云云、比企四郎能員為御乳

母夫、奉御贖物、此事雖有若干御家人、義員嫡母

号比企尼當初為武衛乳母、而永曆元年御遠行于豆州之

時、存忠節之餘、以武藏國比企郡為請所、相具夫

掃部允下向、至治承四年秋、廿年之間、奉訪御世

途、今當于御繁榮之期、於事就被酬彼奉公、件

尼以甥義員為猶子、依舉申如比云々、

57 「公」

○養和二年壬寅五月廿七日 三月九日己卯、御臺所御着帶

也、常胤妻依仰、以孫子小太郎胤政為使猷御帶、武衛

奉令結之給、丹後局候陪膳、

58 「本朝武家系圖諸氏部」

○藤原氏

遠宗

比企掃部允
頼朝卿伊豆御座時、
朝夕ヲ進セシ人也、

能員

比企藤四郎 新判官
北条時政殺能員、
朝宗
比企藤内
女房者御臺所ノ召遣越後局、

時員

比企弥四郎 与市兵衛尉

宗員

比企四郎

女子

笠原十郎左衛門親重妻

女子

中山五郎為重妻

女子

糟屋藤太兵衛有季妻

女子

頼家將軍妾若狹局 一幡君之母也、

(別紙、㊦ナン)

義時七男
時房

時盛

時景

時顯

備前守
彦太郎

政忠

(女カ)
母嶋津大隅守忠時安

泰實祖父時盛為子分讓跡、

盛信彦二郎

時盛為子、以彼孝續母儀遠山尼公跡、
弘安元年五月九日先父卒、

政國彦三郎 母同、

(時盛ヨリ繫引カル)
宣瑜寺
法印

義時次男

名越遠江守
朝時

母比企藤内朝宗女
長久六季乙卯誕生

仁治三季五月十日
出家、卅九

法名生西

藤卷
從五位下
修理亮

左近大夫將監
四郎

母同、
廿五日出家

同、六月十一日
卒

時幸

寛元四季五月

母同、

同、六月十一日
卒

遠江守

政直
童名竹鶴

基政
四郎
童名宮鶴

母嶋津周防入道女
童名宮鶴

平兼基妻

女子

時春
太郎
母有時女

通時
童名正鶴

政家
童名弥鶴

參河守
五郎 右京亮

▽右鈔於伊地知氏古系圖 本田嫡家
所藏古本△

59 「御下文」

○ 「頼朝御花押」

下地 嶋津御庄官

可下早任領家大夫三位家下文状、以左兵衛少尉惟宗忠久一為三下司職、令致中庄務上事、

右、件庄下司職、任領家下文、以忠久一為彼職、可令致庄務之状如件、庄官宜承知、勿違失、以下、

元暦二年八月十七日

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」八九・九一号文書ト同一文書ナルベシ)

右の下文に、領家大夫三位家下文とある〔赴(旨趣)ぎ、むかし古〕

より史館にても能く解せざる事の由にて△季安が従兄本田親孚、史職に居れるの日、(彼)職原に精き

赤井清兵衛・伊木某等に訪ひ糺したれとも、卒(卒イ)にその詳なる△を得すとの物語を、季安も竊(竊イ)に聞こ

あるに與(與イ)れり、爾来意を注(注イ)むたるに、伴氏の譜を改撰するわざを頼まれ、▽近ごろ△博く史籍ども〔近

ころ〕搜覽せしに、幸ひ▽にして△島津御庄の開発を言上したる文書を、▽鹿屋氏が蔵書に△見あたり、

彼此と稽へ糺せしに、實に本立て道生の心地して、

此御下文なども、愚か心におひてハ解釋〔するを得たる〕やうにおぼへ侍(侍イ)れハ、斯く漫に和訓〔するも〕、

その恐れ▽誠に△鮮なから〔ねど〕〔粗〕▽只識者に訪て惑ひを解かん為のミなりき、因て△此に、和

訓したる愚意を註〔しおきぬ〕、夫島津御庄とは、近衛家代く領し給ふ庄園の名号にて、領家とは今

俗に〔いふ〕領主の意にて、その頃の近衛殿下基通公を指し云へるなり、大夫とは近衛家に使令せらるゝ

諸大夫▽にして△尚通公・植家公の時など、進藤筑後守長美といへる類と考へられたり、三位家とハ、基

通公の北政所、従三位子を謂(謂イ)なるべし、然あれバ、頼朝公より 忠久公を我子と遊ばしてハ恥給ふ

よしにて、時の攝政近衛殿に奉られしこと、古今戦にいひ、また奥三ヶ國は近衛殿の御分國たる間御讓

あり、或ハ 公を近衛殿御養君となと御當家由来に書おける赴にも能く符合し、基通公とその北政所の

三位家は、御養父母のおほん親しみましたませば、其

※(行間、㊦ナシ)

頃 公は御七つ、なほ庄務など知しめす御年ならねと、只其俸を分ち給ふ例にて、御養料に此下司職となしまいらせよと、北政所▽の三位家△より大夫に仰せたりけんを、下文をもて鎌倉へ告たる状に任せて、頼朝公(卿)より則御判を居すられ、御下文を島津の御庄官等に下され、斯く 公を下司職となし、庄務を致さしめ給ふによりて、その以前より領家譜代の庄官たる富山・梅北が輩などよく承知して、聊も此御下文の旨をバ違失すること勿れとの御判物ならん、則御當家由来に、公より一年さきに本田か下りてとあるも此年の事に符合し、公は僅御七つの時なれハ、右職の御名代に先づ下國しけんには疑あらし、

「後白河后妃列傳 藤原成子、大納言季成女也、叙従三位稱高倉三位局、帝王編年記、仁和寺御傳、生守覺法親王・以仁王・殷富門院・式子内親王・休子内親王紹運錄按編年記、殷富門院母高階榮子、宣陽門院母成子、未知孰是、

後白河皇子列傳 宮人藤原氏生第二子守覺法親王、第三子以仁王、

後白河六女列傳 亮子内親王、従三位藤原成子所生也、保元元年為内親王伊勢齋、三年罷、壽永元年以皇姑尊曰皇后、及後鳥羽帝踐祚、為準母、文治三年上号曰、殷富門院、建仁三年雅髮為尼、法名真如觀、建保四年四月崩、年七(十脱カ)

61 ○類聚國史、仁壽元年十一月乙亥、進右大臣藤原朝臣良房階正二位、加其家夫人正四位下源朝臣潔姫従三位、

是にて基通公従一位昇進の時、その夫人平位子も従三位と為り給ふも例し知るへし、尤▽その△従三位たる事は大系圖に見ゆ(れ)とも(なればなり)、年月考と云

62 ○類聚國史、聖武天皇天平十六年(十月脱カ)己未、授左大臣家令正

※(余カ)(授脱カ)

六位上、舍義仁外従五位下、清和天皇貞觀五年十月

二十一日、天皇宴太政大臣於内殿、以賀滿六十、而授(之齡脱カ)

其家令従五位下菅野朝臣内弟従五位上、六年二月二十

五日、幸太政大臣東京染殿第、授其家扶正六位上日奉

部若外従五位下、陽成帝元慶三年五月八日丁酉、授

(壬午脱カ)

63

「田中國明著宗藤源辨」

○嶋津と云ふ事ハ、元来薩隅日三州之惣名也、然るに御

元祖忠久公八歳ニ被成、〔雨漏〕頼朝公薩隅日之守護

職に封せられ、文治二年、〔不知〕薩州山門院江御下向被成、

三州を御領知被成候ニ付、三ヶ國之惣名嶋津を以御家

号ニ御定被成候、忠久公より以前、嶋津と号候家ハ

右大臣家令正六位上菅原朝臣永津外從五位下、永津檢〔粟カ〕
校造東田山庄、仍有此授也、四年十一月二十五日、先〔乙亥脱カ〕
是 太上皇不豫、是日自樓霞觀御圓覺寺、詔授左大臣〔遺脱カ〕
源朝臣家令正六位上伴宿禰〔枝雄カ〕□枝從五位下、樓霞觀者、
左大臣山庄也、故有此賞也、圓覺寺者右大臣粟田山庄
也、

是をミテ、大臣達の家令、三位に叙〔せらるゝ〕「する」例なき

▽こと△を知るべし、然あれば、領家の大夫が三位

家の下文に任せてと讀て通ずる〔やうに覺へたり〕「なり」

※〔付葉、⑨ナシ〕
「治承四廿」從一位
基通公

藤原系ニ出

64

「御當家由来」

無、「亦雨漏〔に〕」三州之惣名ニ而候證據、元曆二年八
月十七日、以 忠久公被任下司職候節、從 頼朝公嶋〔てなし〕
津御庄官ニ被下候御下文ニ、嶋津御庄官と有之候、肩
ニ同筆ニ而、同紙を以押札〔ニ〕、日向大隅薩摩三ヶ國
惣名也と有之候ニ而、無疑候事、

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」一〇七号文書ト同一文書ナルベシ〕

○去程ニ、奥三ヶ國者近衛殿之御分國タル間御譲リ有テ、

夷國防戰之タメニ御在國有テ、日向國島津御庄ニ御居

任有リ、島津判官ト申、御下向之時、女子殿原トシテ

本田ヲ秩父〔古本ニハ父〕ヨリ付申サレケル事者、忠久〔横〕

上様本田二郎親經カムスメ重忠之思人ニテワタラセ給〔次〕

フ、其腹ニ持給ヒタル▽御ムスメ△ト云云、其故ニ、

當國マテモ御供サセラレケルトナリ、先御先ニ下向シ

テ、薩州山門院知行シテ、瀬崎野ノ牧、又ハ感應寺、

「古本感作」ナト立初ケルニ、一年〔ノ〕後忠久〔ハ〕御下

向、御供十人也、富山ヲ父トセヨ、梅北ヲ母トセヨ、

三ヶ國ノ御家人ハ忠久ノ家人タルヘシ、但〔シ〕鮫島者可指置ト、頼朝御自筆^ニ遊ハシテ給ハラセ給ヒ、御在國有リケリ、仍テ御分國者、御領百十三ヶ所、具ニ御重書ニ是アリ、鮫島ヲ御指置ルヘシトアソハシ候夏、如何トナレハ、鎮西八郎為朝ノシウトタルニ依テノ儀也、▽然ニ忠久近衛殿ノ養君ニナシ御申事、頼朝御御遠慮フカキ故也△云々、

※(行間)

【スヘテ朱カキ】今東國に伊秩父^{イヂヂ}てふ名字あり、或人いひけらく、

「白尾國柱云、伊秩父^{イヂヂ}テ、郡村の名ハ各二字を用ひられし時、秩父の字に省けりといへり、さらば秩父ハ本伊秩父の上略、伊地知は伊秩父の下略なり、凡物の名に伊もて呼ぶハ多く發語の辭にて、家をへ、未^{イミ}をまだ、猪をし^{イソノ}と省き呼ぶかことき、餘多例あり、昔の村字かゝる訣さへしらざりしならん〔と〕云く、季安因^{アキヤ}に按^{アヒ}、〔此伊の字を地名に省くハ、本藩にも在り〕、正應五年十一月卅日和興狀に、伊作庄の内に宮内・伊與倉・今田^{イマ}〔とて〕三ヶ名〔ありける事〕

見得〔たるに〕、〔伊^{また}与倉は今の与倉あたりならん〕寛永十

三年〔府下屋敷帳に、與倉源兵衛を伊與倉源兵衛ト書けるに、今、伊作の地名も、府士の家号も、皆與倉と呼べり、まあれハ、上古の伊秩父、秩父と據れば、伊秩父を秩父と省くの同例歟、去あれハ、秩父の子孫、越前に移へたる城をハ伊地知城と呼ぶハ、伊秩父の下をたる城を伊地知城と呼ぶハ、斯りければ、秩父氏後に越前に移り、據居る越前より、へるも、讀れあることなるら、伊地知左近將監、略し名乗るに因て歟、康曆二年正月廿七日、伊地知左近將監^{イヂチササネ}於越前國亡と室町記に出たるも、本藩伊地知と同族なり、今ハ井筒山陽巖寺てふ寺その遺墟にありとぞ、勿論伊地知・福澤正が從弟、親實が事に當れば、康至三年、彈正藩に移れる以後二十七年めに越前の伊崎・仲馬などハ、越前よりと山田聖榮もかきおかれしを併せ知るへし〕

65 「山田聖榮系圖目安」

○忠久 文治二年秋之比、三ヶ國さいこく候歟、

66 「全自記」

○島津忠久御記云、爰西國之末、日向・大隅・薩摩こそ地頭御家人強〔し〕國なり、伯父鎮西八郎為朝、鎮守府將軍として打隨、其儘三ヶ國に住居有りし其國なれハ、忠久が自力に持べしとて御讓と云々、御領之國は

67の1

「古今戦」

七ヶ國、伊勢・若狹・信濃・越前・薩摩・大隅・日向、
 國々之御本領六拾七ヶ所早、丹後之御局之折々に、
 大膳大夫廣元・齋院司官掃部頭親能
入道寂忍也、御口入に付而御申
 候様子者、同者天下に應ぜざらん遠國を忠久に知せ給
 度之由被仰候、依而奥三ヶ國御入部也、先薩州山門に
 御下、夫より嶋津之御庄と申者、日州庄内三ヶ國を懷
 たる在所とて、庄内嶋津之庄南郷之内、御住所堀之内
 ニ御所作有り御座候訖、御養父八文字民部大夫殿も始
 ハ嶋津に居住、其跡に御座候故、嶋津殿与申也、頼朝
 之継書御判ニ茂、三ヶ國地頭御家人ハ忠久か下人たる
 べし、但此内、阿多平四郎忠景ハ、為朝之せうとなる
 によて、其式臺に除かれしと承及フ、鮫島万事也、

○建久七年ニ、薩摩之如く下ラセ給、建久四年ヨリ七年
 迄ハ都ヘヲハシ給ケリ、去程ニ、其中ニ本田次郎親恒
 ハ薩摩ヘ下り、様鉢見オウゼテ、又御迎ニ上り、同七
 年ニ御供ニ而下り給、先出水之山戸(門カ)ヘ御座有り、其後

67の2

「全」

庄内へ移セ給ふ、サレハ志布志ニ其比高橋之中将一門
 仁禮殿トテ在之、鹿兒島ニ矢上殿トテ御座マス、ケ様
 之人ノ引募(事)リ嶋津殿ウチ候ハ、其時ニ外山ヲ父ト
 セヨ、梅北ヲ母トセヨ、其外三ヶ國之者共可為御家人
 与御教書ヲ下シ給云々、

○武藏之國畠山チ、ブ殿ヲ召寄、此三郎ヘ烏帽子ヲ着せ、
 御身之子ト名付候へと仰ける、忝トテ臆而烏帽子ヲ奉
 リ、御名ヲ則又三郎ト号、御名乗モ自身重忠之忠ト云
 字ヲカタ取、忠久ト定被申ケリ、其時頼朝ヨリ、未主
 定マラヌ國ナレハトテ、越前・信濃・伊勢・若狹四ヶ
 國ヲ給せ給、頓而東へ御打立被成候、其時チ、部殿
 秩父(殿也)、本田次郎親經(皇)娘ヲチウアヒ仕給、其腹ニ姪尙
 人御座候ヲ、彼又三郎殿ニ奉リ、執婿(婿)ニ社申サセ給云
 々、

右に見得しやうに、忠久公の御夫人ハ畠山重忠の

女にて、その母ハ本田親恒の女なれハ、重忠の爲には女婿、また親恒爲にも外孫女婿におはせしゆ(六七)へ

親恒一とせ御先に下向して、山門院を知行せしなと云へるは、右の下司職と爲らせ給ふ時、庄務を致さん爲めに下れる事なるべし、左ありて、翌文治二年三月、公惣地頭に補せられ給ふ頃までハ尚山門あたり在國し給て、其事も承知せしならん、故に木牟禮の城を見たて築き、御迎に上り、其秋八月、はしめて山門院に御入部在つらん、富山・梅北か事を御自筆もて御下知在りしハ、鮫島が事とおなし文言なるに據れハ、古今戦に云へる、建久七年御下向にて庄内に移らせ給ふ時の御下知なるべし、但鮫島か事と忠景か事と附會せしハ、聖榮等の聞誤なるべし、忠景一族没収せられてこそ、鮫島は没官領の地頭に建久三年補せられ下れり、何そ為朝の外舅と云にあつからん、公も没官領に地頭し給ひ、御同職の義あれバ、常の御家人とハ式躰をかへられ〔給ふ〕て、鮫島は除られしならん、また親恒等御先きに居て庄

68 〔御下文〕

務の事を沙汰せしに、武士國人など 忠久公の御下知をバ自由(一)に對捍して、御庄の年貢を妨るもの有りして、又左の通下知し給へは、其聞へハ必ず親恒等言上せしには疑あらし、

○ 「頼朝卿花押」

下 嶋津御庄

可令早停止旁濫行、從地頭惟宗忠久下知、安堵庄民、致御年貢已下沙汰事、

右、諸國諸庄地頭成敗之條者、鎌倉進止也、仍件職先日以彼忠久令補任畢、而今殿下依令相替給、雖無領家之定、至于忠久地頭之職者、全不可有相違、慥令安堵士民、無懈怠、可令致御年貢之沙汰也、兼又、為武士并國人等、恣致自由(二)、濫行(三)打妨御年貢物、或背忠久之下知、每事令對捍之由、有其聞、所行之旨、尤以不當也、自今(四)已後、停止彼等之濫行、令安堵住人、不可違背忠久沙汰之狀如件、以下、

文治二年四月三日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一〇二・一〇三号文書ト同一文書ナルベシ)

69 ○嶋津上総入道々鑿代得貴謹言上

欲早被直用捨御沙汰、就鎮西管領御下向、寺社本所
領半成可有御管領旨、被成御教書由、承及間事、

副進

一通 右大將家御下文案文治三年九月九日
數通雖有之、依繁略之、

二通 鎮西警固御教書案文弘安九年三月卅日
正應六年三月廿一日

右、道鑿曩祖豊後守忠久、去文治三年九月九日、以嶋

津庄日向大隅薩摩号奥三ヶ國、拜領之条、右大將家御下文以

下炳焉也、其後大宰筑後守先祖号武藤小次郎資頼、建久年中、筑

前豊前肥前号前三ヶ國、拜領之、大友刑部少輔貞親先祖齋院

次官親能、建久年中、豊後肥後筑後号後三ヶ國、拜領之、如

此無勝劣、自被充行九州於三人以來、面々守護職管領

無相違云々、就中、日向大隅薩摩三ヶ國者、為嶋津庄

内条、御下文明鏡也、下之、

康永元年四月十日略

70 「東鑑七」

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二四六号文書・「同前編」二九二号文書ト同一文書ナルベシ)

○文治三年九月九日丁未、比企尼家南庭白菊開敷、於外

未有此事、仍今日迎重陽、二品并御臺所、渡御彼所、

義澄・遠元以下宿老類候御共、御酒宴及終日、剩献御

贈物云々、

71

○下 嶋津庄

(◎花押アリ)

可早停止藤内遠景使入部、以庄目代忠久為押領使、

致沙汰事、

右、号惣追捕使遠景之下知、放入使者、冤凌庄家之由、

有其聞、事實者、甚以無道也、自今以後、停止遠景使

之入部、以彼忠久為押領使、可令致其沙汰之状如件、

以下、

文治三年九月九日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二二二号文書ト同一文書ナルベシ)

按元徳元年十月五日修理亮時英下知状云、文治五年遠

73 ○立券

景下文云、下薩摩國日置庄云云、日置庄者為彌勒寺

言上薩摩國寄郡内殿下新御庄四至事

庄事之由所見也、縱雖為吉利名文書、同三年停止遠

在 伊作郡加外小野定、

景使入部以忠久為押領使、可致沙汰之旨、預御下文

〔東限谷山境〕▽◎西限海△

訖、況遠景状、非論所事之間、難称真忠規模云云、

四至南限小桃崎并上毛夜木瀬任下塩道大牟禮

72 「下知状」

○文治三年三月日、重澄寄進状案云、相傳所領三箇所、

彌勒寺領

自余略之、

在薩摩國內伊作并日置北郷同南郷外小野、副進次第調

右、依平重澄寄進證文、被成下政所御下文并國司廳宣

度文書等、右件所領田畠等者、年来嶋津庄寄郡也、而

畢、隨任庄國施行等、宜立券言上如件、

百姓逃散之間、庄國兩方課役難勤仕之間、於今者寄進

文治四年十月 日 下司平在判

御庄領訖、下司・郡司・惣公文職者、以重澄子々孫々、

書生散位藤原代在判

不可有相違云云、(註、所、)

使 藤井在判

(本記事ハ「旧記雜錄前編」一一四号ヲ示スモノカ)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一一二六号文書ト同一文書ナルベシ)

右、伊作宗久法師代道慶所進云、見元徳元年十月五

74 ○嶋津御庄内薩摩方伊作庄雜掌法橋承信并下司高純謹言

日修理亮英時下知状云々、真忠者彌勒寺庄下司宗太

上、

郎真忠也、

欲早被与奪當庄本訴奉行入安富三郎貞泰方、被經御

75

「英時下知狀」

○文治四年十月日立券狀案云、薩摩國寄郡内殿下新御領
 四至事、右伊作郡日置北郷除彌勒寺庄、右依重澄寄進
 證文、被成下政所下文并國司廳宣訖、任庄國施行之旨、

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一二五七号文書ト同一文書ナルベシ)

一通 立券狀案文治四年十月 日
 右、當庄者、為 本家近衛殿、領家一乘院^{◎家}御領進止
 之地也、而隱岐三郎任雅意、打越往古之境、令押領之
 上者、早被与奪安富三郎方、被召上彼隱岐三郎、被經
 傍例御沙汰、為蒙御成敗、仍粗恐々言上如上件、
 文保三年六月 日

副進

沙汰、被召上同國阿多郡北方一分地頭隱岐三郎^{不知實名}、
 被究御沙汰淵底、任傍例蒙御成敗、當庄入來別府名
 内大牟^{◎礼} 并大野名内塩道上毛夜木瀬任、和田名内橋^{◎橋}
 牟礼狼野^{◎津}波牟礼以下所々、打越往古境、去正安三
 年以来令押領条、更不可遁所當罪科子細事、

76

※1 (頭注)

立券如件云云、^取要、又建永・嘉禎手継狀云、日置庄領
 與彌勒寺為各別云云、日置者嶋津庄也、其内彌勒寺者、
 八幡宮領也云々、

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一二七号文書ト同一文書ナルベシ)

「伊作日置御文書事

合

一 文治寄進狀案

「外ニ四ヶ条略」

已上五通者進之早、

一 立券庄号文書案

「外ニ三ヶ条略之」

已上四通、追可進之、

右、所進地頭御方也、

元亨四年八月廿一日

憲俊(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一四〇四号文書ト同一文書ナルベシ)

※2

▽季安按に△右ノ花押ハ左衛門尉憲俊なり、領家一乘院雜掌たりし事、正中二年七月十月下知状等に出たり、又元徳元年十月英時下知状にも此注文を引證せり」

※1

右に見ゑしやう公領にて、島津庄に寄郡たる地は、御庄方も國司方も、兩方ともに課役を勤けるものとおもわる、然あるに百姓逃散して、兩方に勤めるの難儀さに、時の郡司平重澄、その地を一圓近衛殿下に寄進し、子孫代々下司・郡司・惣公文職は相違なきやうにと、文治三年三月證文をとゞのへて、殿下に寄進いたしけるとおもわる、それゆへ御庄方よりハ、領家の政所より御下文を成し下され、國司方よりハ、廳宣を下され、庄國共に下文と廳宣との施行あるに任せて、翌四年の十月、下司と書生等、いよく新御庄に四至の境など立定たる立券の御届を斯く言上せしと見得たり、左あるによて、近衛殿下の一圓領となれり、本篇につばらに解おきたり、此例にて推せは、萬壽年中、平季基か主もなき荒野を

※2

開發して、宇治関白頼通公に寄進して、島津御庄と名号を立られし時も、大かた如此例にて立券ありしならん、左ありて、御庄方にのミ勤めれば、國司方の勤めは為たざるものにて、いと利得なるものゆへ（おき）此處も宇治殿の御領、彼處も宇治殿の御領とのミいひて、段々庄園諸國にミちて、國々國司方の勤め堪がたく成ゆくを、後三条帝聞し食し上られ、宣旨を國々に下され、諸人右やうに庄園々々といふて勤せぬ領地の文書を、記録所を立て、そこへ召し集めて吟味させられしとおもひ併せられぬ、然あれハ、愚管抄に庄園の文書とあるは、右に見得しそれ々々領家政所より下されし御下文と、國司の廳宣や立券状の類を改られしところ見ゆれ、大角大人の風土記なるべく所思おもひたりと分註せられしハ、淺陋の季安▽さへも△心得かたし、宜き便を得たらハ、問（おき）はましものをと▽斯くハ△此に評し「侍り」ぬ、

▽下卷△

77 ○前右大將家政所下 左兵衛尉惟宗忠久

可早為大隅薩摩兩國家人奉行人致沙汰條々事

一 可令催勤(○裏)內裡大番事

右、催彼國家人等、可(○令)勤仕矣、

一 可令停止賣買人事

右、件條、可禁遏之由、宣下稠疊、而邊境之輩、違

犯之由有其聞、早可停止、若有違背之輩者、可處重科矣、

一 可令停止殺害已下狼藉事

右、殺害狼藉禁制殊甚、宜守護國中、可令停止矣、

以前條々、所仰如件、抑忠久寄事於左右、不可免凌無咎之輩、而又家人等誇優恕之餘、不可對捍奉行人之下

知、惣不慮事出來之時、各可致勤節矣、以下、

建久八年十二月三日 案主清原

令大藏丞藤原(賴平)花押 知家事中原

別當前因幡守中原朝臣(大正広元)

散位藤原朝臣(二階堂行政) 花押

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」一七四号文書ト同一文書ナルベシ)

78 「酒勾貞阿御文書目錄」

○大隅薩摩兩國奉行 建久八年十二月三日

右、目六如件、

79 「藤野氏本」

○正八幡宮神輿事、所被下綸旨也(○依)、彼嶋津本庄役、可奉

動神輿之由、所司神人等結構云々、若有御入洛事者、

薩摩國守護地頭御家人等、可奉留之狀、依仰執達如件、

正應六年二月七日

(北条實時) 陸奥守在判
(北条實時) 相模守在判

下野(忠家)三郎左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」九六七号文書ト同一文書ナルベシ)

80 ○嶋津庄内知行分事、所被止領家一乘院所務也、於有限

佛神事用途并本家年貢者、任先例、可致沙汰之狀、依

仰執達如件、

永仁五年七月五日

(北条宣時)陸奥守在判
(北条貞時)相模守在判

嶋津式部丞跡

同下野彦(久長)三郎左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二〇〇九号文書ト同一文書ナルベシ)

81 「藤野氏藏本」 「ウラニ鎮西御下知 案文」

○鎮西御下知 正文者嶋津下野守帯之、

嶋津下野前司忠宗法師法名道義、今者死去、子息三郎兵衛尉實忠代

明舜、薩摩國伊集院郡司四郎兵衛尉時繼法師法名迎念、今者死去、

子息弥五郎宗繼法師法名、了導、河俣弥六郎道治法師法名等、

相論加徴以下得分事、

右訴陳三問答之上、於引付之座召決訖、彼是所申枝葉

雖多、所詮、中間略之、如遣嶋津庄三方地頭代之元久元年

五月四日關東御下知者、地頭得分事、本庄者段別壹斗、

寄郡者段別五升、任領家御注文、可徴納、用作田百町、

所免給也、日向方四拾町、薩摩方參拾町、大隅方參拾

町、段別壹石貳斗地子可徴納、三箇國郡司職者、自領

家所被付地頭、下文紙接離無之

※(頭注、㊦ナシ)

『朱カキ入』此元久元年五月四日ノ御下知ハ、下ノ比志島氏文書ニモ引

ケリ、併セ証スヘシ』

82 「比志島氏藏本」

○正六位上 平 秀忠

右、于嶋津左衛門尉殿、依奉成志深、所令書進如件、

建保五年五月廿九日 平秀忠在判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二四五号文書ト同一文書ナルベシ)

83 「全」

○和与 山門院地頭所務条々

一 地頭狩倉開發事

止兩方開發、可為本狩倉也、

一 藪等事

酒藤藪者、(㊦令)重安堵其身、於彼藪有限在家役(㊦并)地利物等

84 〔全〕

可令弁勤之、於源次郎蘭者、可為地頭之蘭、於高少野蘭者、半分者可為地頭進止、今半分者、居百姓可取在家役并〔下文紙接より無之〕

〔本文書ハ、「旧記雜錄前編」二四六・三三七号文書ト同一文書ナルベシ〕

一狩倉事

右、如兩方申状者、云領家分、云地頭分〔ⓐ役〕之被、分狩倉事勿論也云々、然則地頭分之外、不可妨領家分之狩倉矣、

※

以前条々、大略如此、抑當御庄地頭得分事、已去元久元年・承元・建曆下知先畢、而地頭代等各守彼状、可被沙汰之處、張行新儀非法之間、於事諱譚〔ⓐ為〕及庄務乱之由、雜掌所訴申也、地頭代等所行甚不隱便、自今以後者、停止自由非法、且守先下知之旨、且任當時成敗、可致沙汰之状、依鎌倉殿仰、下知如件、

嘉祿二年十二月八日

〔北条泰時〕

武藏守在御判

〔北条時房〕

相模守在御判

〔本文書ハ、「旧記雜錄前編」三三八号文書ト同一文書ナルベシ〕

※〔頭注〕

〔右〕見得し元久元年下知とは、藤野氏に藏めたる鎮西御下知といふ文書の内に、
〔上〕藤野氏文書ニ見エシ元久元年五月四日関東御下知ヲ指元久元年五月四日関東御下知とあることくおもひ知られたり、併せ考へしヌコト知ラル、
〔下〕

85 「比志島氏藏本」

○薩摩國豊後三郎左衛門尉忠義領荒野事、為地頭沙汰、

開發常々荒野、減斗代、可令弁勤年貢之由、所申請也、宜為公平欵、可被申達本所之状、依鎌倉殿仰、執達如件、

天福元年九月廿二日

〔北条泰時〕

武藏守

〔北条時房〕

相模守

〔北条重時〕

駿河守殿

〔北条時盛〕

掃部助殿

〔本文書ハ、「旧記雜錄前編」三七一号文書ト同一文書ナルベシ、尚ⓐニハナシ〕

※〔頭注、ⓐナシ〕

『上ノ正安二年七月二日下知狀ト併セミルヘシ、本所即本家ニ而與領家同シ、猶今世言領主』

○都之城郡元村之邊、都而往古者嶋津与申候処、御名字を遠慮仕嶋戸と改、當分ハ郡元与申候、忠久公御下向被遊候砌、御勸請被遊、古来より客殿棟真鍮ニ而十文字之御紋打付御座候、山田聖榮自記云、忠久公三ヶ國に御入部、薩州山門に御下り、夫より嶋津に御座候ことハ、三ヶ國を庄の内に懐きたる在所に依て也と相見得候、且又忠久公御誕生の時、産神稲荷を嶋津に御祝御申候、同秘事条々有、此内穴賢云々、不可他見者也と被記置候、旧記にも嶋津之稲荷之御遷宮、文明七年乙未八月廿一日、武久公御代官に、宮丸殿孫子之霧丸殿御へい取申され、穎娃諸事取なされ候と見得申候、天文十四乙未十一月、筑後先祖北郷讚岐忠相、右社頭修造仕候節之棟札ニも、忠久公御創建之旨相見得申候、

一右ニ付而、調被申出趣相違無之、鹿兒嶋稻荷大明神縁

記ニ、治承三年己亥、忠久公於撰州住吉夜雨頻に風烈し、一狐火を燃し衛護す、御成人之後、三ヶ國御安堵ニ而御下向、嶋津の庄島戸に、件之狐を稻荷大明神に御崇め、累世御氏神と定給ふ、命婦殿とて狐之社于今存せりと相見得申候、鹿兒嶋稻荷神社者、古代社壇依火災、御勸請之年月不詳候得共、右郡元稻荷大明神ハ古書付ニも右縁記にも相見得、無餘儀事ニ而別所同縁之神と相見得申候云々、

87 「名勝志(書)差出」

木面銘

○惣持院舜真(尊カ) 右折念者信心之大法(節脱カ) 小山寺奉寄進島津稻荷大明神、立願成就而已、殊大禮那和合諸人愛敬白如件、天文二年辛亥三月吉日

88 「名勝志(書)差出」

○上棟、謹奉再造日州島津御庄郡本稻荷九社大明神御

宝殿一字也、伏以當社者、北郷乃祖、藤原朝臣島津忠

久・^(自)京師輔佐来、以安置于此郡、号社稷之神、爾来

露往雨来、物換星移、棟撓臺破、于爰北郷後胤藤原朝

臣島津讚州太守忠相并左金吾尉忠親并次郎忠豊、欲企

修造之願力、以夜續日經之營之云云、于時天文十四年

龍集乙巳十一月二日、大檀那北郷主君藤原朝臣島津讚

州太守忠相并左金吾尉忠親并次郎忠豊、和田越中守匡

盛并宮内少輔匡隆、本願權律師宝藏坊重圓、座主少納

言、

○ 中之郷 郡元村

祝吉 ^{イハヒヨシ} 仮屋本より丑寅廿丁程

旧記ニ、此處 豊後守忠久公薩州御下向後、以島津庄

為履、初号姓島津、此其遺蹤也、^{御魁号祝吉}之御所云々、而此地初

曰島津、以為御名字、中改島戸、^{津与戸}音相通、亦改郡元、

按 忠久公御座于日州島津庄、事見島津家旧記、

同所同村佛閣 仮屋本ヨリ丑寅ノ間廿丁程

命婦山正寛院和光寺

旧記、開山權大僧都舜全、建久八年十一月、忠久公

御創草、此寺為稻荷坐主云々、

中之郷 安久村

屋形石 辰巳ノ間一里

一旧記ニ、自堀之内ニ幾程、有号建立寺地、有二

基石碕、其高五尺計、彫刻梵文、号屋形石、不

知三所謂如何一矣、

季安按、鹿屋玄兼自記云、平大檢殿在所都城与梅北間

原に屋形于今在、無隱候云々、また寛文六年、梅北正兵

衛か神柱記云、末基卿平家の世の末に成たるを見きりて、

箸野の本名の御所に隠居云々あり、「此等の址にも當る欵、

里人に訪へきなり」▽近ごろ邑宰津曲氏に問へば、今梅

北益貫村にいます春日社の華表より未申の方六町餘に屋

形ヶ原といふ地名あれど由緒詳ならず、此安久村の屋形

石は梅北より丑寅に當り、また都城は梅北より亥子に當

り、箸野は梅北に隣接せし末吉の内に今其地名あり、神

柱宮より未申に當れど、今その本名御所などいふ地名は

堀之内門

御所跡

一 忠久公御下向之初、南郷堀之内へ御所被召立、一往御
住居、旧跡于今有之、幣ヲ建、崇敬仕候、

90 「飭抄」

○毛車 執柄家家禮之人用檳榔毛、檳榔、前関白近衛
領鎮西志摩戸庄土産云々、仍所望用之云々、

右の飭抄ハ、嘉禎四年十二月、^年五十五にて薨ぜら
れし中院の元祖通方公の撰なり、さて毛車を用られ
しハ承元三年十一月、土御門帝の春日に詣給ふ時
になと見へけるとそ、それより四年まへ、近衛基通
公の御子家實公、摂政関白に為り給へれば、此に前
関白とあるハ基通公なるへし、左ありて通方も、承
元の其年ハ二十六の時に當れハ、承元の古帳もや抄
寫して、斯く^く載せられしならん、然あれハ、我か
得佛公既に島津の庄衙に入部まし^くての後にて、

91 「無名抄」

檳榔を御所望ありしも、必ず 公に所望し給ひつら
ん、島津庄一圓領の内[▽]にて[△]救仁院志布志の海上
二里許に、檳榔島とて[▽]蒲葵[△]多く茂生するあれハ、
是をいへるなるへし、

○つくしのしまと^{いふ}所に、かよふもの^事のつゐて
にかたり侍りしハ、つくしにとりて南のかた、大隅薩
摩のほと、いつれの國とかやわすれたり、おほきなる
みなど侍、そこには四五月にハ、あけくれ浪たちてし
つまるまもなし、四月にたつをうなみと「と」いひ、
五月にたつをさな^ミとなん申侍るといひき、う月さ月
といふゆ^ハへにや、いとけふある事也、

(本文書ハ「旧記雑録前編」一七三号文書ト同一文書ナルベシ)

右無名抄ハ、鴨の社人菊大夫長明入道蓮胤か著す書
にて、長明か建曆二年著ハせし方丈記に、我ハ六十
との文に據れハ、仁平三年うまれ^{しものにて}、

「應永記」

○抑當家ハ、忠久受関東讓、去建久三年壬子有下向、拜領三ヶ國、仍薩摩大隅日向孕御庄之間、嶋津の御庄三ヶ國と申也、然者代々の相續無別子細云々、

得佛公よりハ二十六▽ばかり△の長せ、同時の人(なるは明らけし)「なり」然ありて、此にしま戸にかよふものゝと云に據れハ、庄内の島戸を指すなるべし、(そこ)「それに」かよふ道の大きみなとハ、志布志のあたり欵、波見の川口など、今も波高き湊なり、又文明十一年、圓室公▽のとき△儒僧桂菴を召て、為めに▽寺を△魔府の海岸に「寺を」建おかれしころ、桂庵の▽作り△詩などに、海涯新居、あるハ海岸尺地、為暴風怒潮被墜敗によて、長亨元年には寺を海西(城)に移したる事とも▽島陰漁唱に△言へれば、その暴風怒潮ぞ、長明があけくれ浪たちてしつまるまもなきと書けるに當「り侍」れば、直に今の前濱に、岸岐築地の無き以前の汐ゆきを▽ばかくも△いへるならん、

「建治二年石築地賦」

右の應永記は、何人の著へすを知らず、元和二年長谷場越前か寫せしには、往言集と題して、原本は市来の竜雲寺に藏めたる赴を跋せり、因て考ふに、竜雲の開山心岩良信ハ、俗姓大寺氏にて、▽後ハ△福昌寺の主僧也、應永三年にうまれ、應仁二年に七十三にて遷化せし人なるに、往言集の開端、多く世々△の年号を數へて文安に止れり、文安は心岩年五十の時に「當れバ」、應永中「の事」は「親しく見聞せし赴なるべけれど」の「見聞せし」に出で、おほかたその著へす書にて、「其」寺に藏めつらんも謂あるに似たり、建久三年下向云々とハ、その年二月、公阿多宣澄か旧邑没官領の地頭を拜し給へる事を、惣地頭の事に傳へ誤れると見へたり、

○建久八年薩隅日三州圖田帳のおもむきは、「本篇くハレ、本編トにくハしく」のせたれハ▽斯に△略する也、

○島津御庄領家近衛殿
地頭尾張守殿

新庄七百五十丁七十五丈

深川院百五十丁十五丈

財部院百丁十丈

多祢島五百丁五十丈

寄郡七百五十丁八段一丈

〔下文略〕(于此)

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」一七七三号文書ト同一文書ナルベシ〕

按に、右にいへる近衛殿ハ家基(公の時に當る)、尾張守

トハ名越尾張守時章入道道鑿ならん、肝付氏の古文

書に、當郡地頭尾張前司入道々鑿と見へる、是なる

べし、此時我か 公室職に於て△は▽道忍公のお

ほん時に當り△守護職をもて惣地頭を▽も御先例に

て△兼帯し給ふべけれハ、▽その△内にはまた尾張

等守か如き地頭も置れしにや▽註して考をまつ耳△

○奉始鑄 薩州阿多郡金峯山洪鐘一口

右奉鑄志者、為(正朝) 正朝外朝天長地久 関白殿下関東武

家四海守護國土安穩諸人繁昌、勸化十方檀主所禱、仍

如件、

應長元年辛亥十一月 日 大勸進金剛弟子妙法敬白

大工 沙弥西願

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」一一四九号文書ト同一文書ナルベシ〕

▽亦た按に△應長は九十四主花園帝(の)年号に「し」て、

関白殿下ハ近衛(家にて)「の」家平公に當れり、武家ハ守邦

親王、▽また△守護は 道義公の時の事なりけり、

95 「比志島氏藏本」

○ 足利殿

伊勢國柳御厨泰家跡、尾張國玉江庄貞直跡、遠江國池田庄(跡)

〔家〕

〔此間國く略す〕

佐渡國六斗郷同

筑前國同

豊前國門司関同

肥後國健軍〇 日向國富庄〇
(寫字)
(國脱カ)

同嶋津庄守時

「下文〔もらす〕」

96 「建武三年二月日記」

〇島津庄大隅方寄郡田數七百十五町八段三丈

内寺社御奇附方〇

横川院三十九町五段二丈、安樂寺天満宮御奇附〇

「按ニ宰府の安樂寺なり」

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七七八二号文書ト同一文書ナルベシ)

97 「野田士人藤原武右衛門藏本」

〇新田右衛門佐義貞誅伐事、去年被下関東御教書訖、而

肝付八郎兼重以下輩、令同意義貞、於日向國所々舉旗、

既及合戦之由、當國守護代并嶋津庄惣政所等依馳申、

所差遣羽月四郎右衛門尉元真也、早相催一族、馳向彼

所、可被退治候、仍執達如件、

建武三年正月廿五日 大宰少貳(貞経)

廣武又次郎入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七七一号文書ト同一文書ナルベシ)

98 「日州諸縣郡大田原村新助藏本」

〇土持新兵衛尉宣榮、於日向國所々致軍忠次第夏、

一去年建武十二月十三日、世上鬪乱之由、依有其間、一

族相共欲令上洛之処、伊藤藤内左衛門尉祐廣新田右衛門・佐祇候人

同弥七・同弥八・益戸以下凶徒等、令乱入國富庄以下

所々、依致濫妨狼藉、國中平均相隨彼黨類之由、披露

之間、同廿七日、一族相共揚御旗、打出宿所候早、

一同廿九日、押寄伊東弥七・同弥八宿所堤、追落之燒拂

早、

一去年建武十二月廿四日、祐廣以下凶徒等、楯籠嶋津庄

穆佐院政所之間、同晦日、一族相共馳向彼城、致散々

合戦追落之時、祐廣親類若黨以下數十人討取之早、

「外ニ六ヶ条略之」

右、宣榮所々軍忠如件、以此旨、可有御披露候、恐惶

謹言、

建武三年二月七日 左兵衛尉宣榮

進上 嶋津庄惣政所殿

承了 左兵衛尉秀信在判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七七六号文書ト同一文書ナルベシ)

99 「樺山紹劔自記」

○抑愚老此地へ堪忍仕候事、御當家嶋津殿与申候ハ、右大将頼朝之三男忠久ヨリ忠義・久經・忠宗四代め也、

此御子七人有、貞久・忠氏・忠光・資久・資忠・久泰、

此等之儀也、二番忠氏ハ、二三代御座候而跡絶申候、

七男久泰ハ一代迄也、三佐多、四新納、五柅山、六北

郷ハ、于今有躰也、小身ニ而見苦敷候へ共、如此也、

去ハ忠宗法名道義、鎌倉江居住候而、時に随ふ習なれ

ハ、北条へ仰合せ候而、御子六人江知行を譲渡之状是

有、嫡子三郎左衛門分、貞久之事也、文保二年三月十

五日沙弥道義と有、田敷之目錄別紙ニ有、是ハ又為勲

功之賞所宛行也者、守先例可致沙汰之状如件、文保二

年三月廿三日、武藏守平朝臣泰時・相模守平朝臣時房、

嶋津入道殿嫡男上総介殿、忠宗のゆつり状、北条之添

状と合ての知行文也、文言同前也、右之書物、此四人

衆各々御嗜候覽、我々が家には是を虫にも積せしと格護

申候、嶋津入道殿五男安藝守殿与被書候、是ハ資久之

事ニ而候、其知行之地柅山・石寺・嶋津、此等百五十

町、北郷之内百町、曾井ニ有下川内ニ五十町、合て三

百町也、然者庄内之此地ニ八代迄者居住申候云々、△

100 ○下 嶋津下野四郎時久

可令早領知日向國新納院地頭職之事

右、為勲功之賞所宛行也、任先例、可領掌之状如件、

建武二年十二月十一日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七五三号文書ト同一文書ナルベシ)

101 ○將軍家御臺所御領日向國穆佐院嶋津庄事

嶋山修理亮・伊東八郎已下直冬与同凶徒等、構城塙蓋

妨^④間、可令退治之由、所被仰一色少輔太郎入道也、

可致合力之状如件、

觀應三年四月廿九日

▽⑤御判△

嶋津人と御中

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二四二二号文書ト同一文書ナルベシ)

102 ○被尋下候嶋山修理亮直頭并嶋津上総入道と鑿忠否間事、

匠作者令与同兵衛佐殿、於御臺御領穆佐院并嶋津近江

守時久所領新納院、已上日向國嶋津庄内度々及于合戦、致押領之

間、御敵段無子細候、次ハ道鑿^④、於御方致忠節候之

条、世以無其隱候、若此条偽申候者、可罷蒙八幡大菩

薩^④御罪候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和二年正月廿八日 沙弥昌連

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二四六三号文書ト同一文書ナルベシ)

103 ○將軍家御臺所御領日向國穆佐院并嶋津院事、度々被仰

之處、嶋山修理亮・伊東下野守等不承引之間、加退治、

可沙汰付下地於給主代若林彈正忠年秀之旨、所被仰下

守護人也、早馳向、可合力之状如件、

文和二年十月九日

(足利義隆)
花押

嶋津上総入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二四九四号文書ト同一文書ナルベシ)

此等の古文書を併せ考れハ、穆佐院嶋津庄と▽ある

△ハ穆佐院か即嶋津庄の意也、穆佐院并嶋津院と▽

ある△ハ、新納院と穆佐院ハ、日向^④嶋津庄の内

〔^{なれ}にてあれハ〕、新納院の政所をも嶋津院と書たるな

らん、庄内の島戸▽ちふ△と^は別なるべし、

104 ○日向國嶋津庄内穆佐院領家職^{南部一乗院領}半濟事、為兵糧料

所と預置也者、守先例、可致其沙汰之状如件、

應安六年十二月五日

(今川了俊)
沙弥(花押)

嶋津安藝入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二五九・二六〇号文書ト同一文書ナルベシ、尚二五九号ハ十一月五日ノ月日ナリ)

105 嶋津庄日向方隈野郷内十町分事、為本給間、任其旨所

宛行也、早守先例、可被領知状如件、

應永十七年二月十五日

(島津元久)
沙弥(花押)

椀山安藝守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二七九六号文書ト同一文書ナルベシ〕

106 ○日向國北郷嶋津内并薩摩國鹿兒嶋知覽見内所々賣得之

地事、不可有子細也、任早先例、可令知行者也、仍為

後日之状如件、

應永十八年潤十月廿五日 久豊（花押）

杣山殿（教宗）

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二八五〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

107 ○嶋津御庄日向方隈野郷内十町、同國大田郷之内十町、

同國薄壇事、為給分所宛行也、早任先例、可領知之状

如件、

應永十九年三月廿日 久豊（花押）

嶋津安藝守殿（教宗）

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二八七三号文書ト同一文書ナルベシ〕

108 ○日向國嶋津庄郡本四拾町、同山田三拾町、同薄壇五町、

合七拾五町、為忠節之賞宛行所也、早任先例、可有知

行之状如件、

明應四年六月廿一日 忠昌（花押）

樺山安藝守殿（長久）

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二一七三六号文書ト同一文書ナルベシ〕

109 ○杣山早水寺柱之内 北郷之内 嶋津之内買得所々知行

分現作四十六町 段錢十三貫八百文 目錢四百十七文

已上拾四貫二百十七文進上仕候、

土持太郎殿給分

嶋津之内福富須田別府之内 現作五町七反冊 段錢

一貫七百三十七文 目錢五十一文

以上一貫七百八十八文

永享十年段錢之分、次年十一年六月十五日、此日記末弘方へ遺候、

六月十五日 教久

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二一三三五号文書ト同一文書ナルベシ〕

110 「都城郡元村安養寺本尊（ノ鏡）抄」

○日向國島津院安養寺造立應永十五年戊子云々、

111 「安久村正應寺棟札」

今郡元村の内にて、早水境に堂山と云へる所に、安養寺門として百姓屋しき遺るとそ、左ありて本尊の阿彌陀ハ、「今」川東村大章氏の隣に移しあると也、

○日吉山王宮一字

右、奉為天長地久御「欠」殊者當郷守護藤原朝臣嶋津守遠江殿勝久并當別當權少僧都慈範、又助成、中文當略代官藤原五代右京助友春・藤原鬼塚久義 應仁二年戊子二月廿九日、大願主源連日敬白、

112 「▽都城△郡本村上之坊佛像甲(板の)銘」

右より三年め文明二年、山田聖榮の書おかれし古系圖▽をみるに△「十代」節山公の御舍弟遠江守勝久の件に、都城居住はつしんとあれハ、桂氏の別祖阿水和尚もその頃島津を領せられし(と見得たり)「にや」、

○大日本國日向州嶋津院圓福寺阿彌陀如来奉造立 文明

113 「島陰雜著」

十六年甲辰六月十五日 信心大願主
奉加 僧實秋 理性坊 南之坊 越前房
作者快扶 沙弥道 五郎太郎 孫左エ門「外六七人略ス」

○奉再興八幡大菩薩靈(祠)一字

夫以日州島津庄者、我高祖豊後守忠久領刺史於薩隅日三州、權輿之地也、然則當社亦基于我高祖者乎、文明乙巳夏、與薩摩守國久赴飫肥戰場之日、肅詣于祠下、積年不修、大敗難起、竊念我軍速獲凱旋、本祠豈不修復、於是神威所施、敵陣忽亡、可敬信哉、依是茲歲、與國久胥謀、新建一字之廟(貌)、以抽還願之丹誠、伏希、上棟之後、柱礎堅固、梁棟安全、神德増光、一門共熙、武功之弘大、仁政帰厚、三州長致民業之康寧者也、長亨三年己酉、願主薩摩守藤原國久、修理亮藤原忠廉、司役助工權大僧都宝壽坊快扶、

114 「郡本村八幡再興棟札」

○日州島津庄者、我高祖豊後守忠久於薩隅日三州權輿之地也、則文明乙巳夏、與薩摩守國久赴飢肥之戰場日、難起、竊鎌倉鶴岡八幡宮勸請之、願主前左衛門尉藤原數久、讚岐守義久、修理亮忠廉、薩摩守國久也、亦爰奉再興大且越藤原忠相并忠親、

115 「樺山玄佐日記」

○長久入道して宗榮と云しか、年六十三、鹿兒島江遂參上、令託言、我淺間敷生性ながら、忝も道義の末子道鑿の弟の流、いかてか嶋津の郡在名の柗山をハ國衆へ可渡、願くハ御奉行衆御分別の事、大望之由、數返難申上、太守忠兼様、御老中、薩摩の難及御手、樺山得心次第ト云々、

右、大永元年の五月ころ〔欵〕、樺山ハ今勝岡の村名とおほゆ、其頃まで〔尙〕彼あたりも島津院の内なり〔ける〕にや、▽院と郡のことは、前に詳なり△

116 「上井寛兼日記天正十一年癸未二月」

○廿六日、鹿兒島江參上之為打立候、田野へ着候、上之原之長藏坊〔房カ〕江宿仕候云々、一廿八日、早朝田野之宿を打立候、山之口と嶋戸之間ニて、肝付彈正忠殿宮崎迄音信之為使節被遣候ニ行逢候云々、

117 「全同年四月鹿兒島より〔棉悉〕」

一五日、敷根三五郎殿朝食振舞也、従夫休世斎茂宮崎へ越之由候間、同道ニ打立候、北郷殿へ御礼可申存候而、都城〔江〕へ未刻計越着候、本之原本別當古郷隆昌處へ宿仕候、休世斎ハ嶋戸迄通にて候云々、

118 「新納楚弓藏本」

○ 雖比與候、短尺書進之、

雖未申通候、由緒異于他事候間令啓候、抑一乱以來不※辨之儀、難盡紙上候、此時一段預合力候者可為祝着候、併芳情頼入候、猶九澤軒申含候、每事期後信候也、状

如件、

(天文五年)

卯月廿七日

(近衛尚徳)
(花押)

嶋津近江守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二二七六号文書・同附録一」二八〇号文書ト同一文書ナルベシ)

※(頭注 ㊦ナシ)

「近衛家代々花押、水戸ノ花押藪ニ漏遺モアレハ、考據ニ惑

多シ、第一京都 御殿ノ古證ヲ探得ザレバ考究カタシ、然

トモ此四通ハ古来御庄由緒ノ按據ト為ヘキモノ乎」

119 「全」

○雖未申付候、以事次令啓候、抑御家門御事、異于他御

由緒候處、御無音実背御本意候、定而聞召及候哉、

公方様御祝言之事被遂其節、既去三月 若公様御誕生

候、天下安全基、御家門殊御大慶候、自然相應之儀可

申入、随分不可存疎意候、然而依数年都鄙乱逆、御家

領等非分族押妨候、言語道断候、如今者可及御断絶候

条、口惜[㊦]次第[㊦]候、此砌以旧好之儀、被成御馳走被

扶助申候者、公私所仰候、此等趣態可被差下御使節之

由御有増候、不[㊦]案内之間延引之刻、九澤軒下國之由

候間、雖被致故障候、種々被仰被言傳御書候、并花月

五十首御筆、同從禪閣御書短冊十首御筆、乍御憚被下

候由、得其意可申旨候、猶彼軒可被演説之、可得御意

候、恐惶謹言、

(天文五年)
卯月廿七日 長美(花押)

謹上 嶋津近江守殿 御館

進藤筑後守

謹上 嶋津近江守殿 御館 長美

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二二七七号文書・同附録一」二八一号文書ト同一文書ナルベシ)

120 ▽右の事を、將軍家譜に稽れば、義輝は天文五年三月十

日誕生、母ハ近衛関白尚通女とあれば、去三月若公様

御誕生といふに相當り、また花押藪を按に、判形も

尚通公の花押に疑なけれバ、卯月廿七日とあるハ天文

五年の事にて、同二年四月より出家し給ひしかたなれ

〆禪閣ともミへたり、さあれ〆外に時の関白植家公よ
 り、御書并花月五十首の御筆も賜ひて、禪閣尚通公よ
 りも、右のごと新納八代の近江守忠勝に給ひたるとミ
 ゆ、此頃勝久公般若寺あたりに微行まし〆、忠勝の
 勢ひ強きゆへならん、其より同十四年三月、大中公
 中興の太守と仰かれ給ひしおりから、植家公より日野
 左大辨宰相資將を本藩に遣ハして、玉札及び守護の束
 帯など賜ひけれ〆、おり〆かたミにおほん消息あら
 せられ、同二十一年、日新公より伊集院忠朗をもて、
 古市長門守實清を種子島に召されて京師にゆき、植
 家公及び一色式部大輔に使用して、大中公の叙爵と
 世子又三郎君の御諱を幕府義輝公に請ハしむ、是にお
 ひて、其年六月十一日、大中公は修理大夫に任せざ
 せられ、世子は御諱字を賜にて、同二十七日、
 植家公より世子に御書もて其事を仰遣ハされ、日
 新公と樺山善久へも、を〆〆御書もて、公へは色紙
 三十六枚、善久には二十枚、染筆し賜ひけると見ゆ、
 七月、實清京を辞して齋回る左の如し、時き世子は

義久と名つき給ひしとなり、

121 ○雖未申通候、以事次令啓候、抑就由緒之儀、連〆〆作

へ令申候キ、可然之様被申談、合力候者可為本意候、
 仍雖左道之至候、扇三本進之、猶筑後守可申候之間、
 令省略候也、

八月廿八日

(近衛尚通)
(花押)

嶋津三郎左衛門尉殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二七〇九号文書・「同附録一」八三二・八三五号文書
ト同一文書ナルベシ)

122 ▽

右、花押藪に稽れ〆、近衛尚通公の花押とミゆ、尚
 通公は天文二年四月御出家、同十三年八月薨し給へ
 れ〆、御宛は貴久公にて、匠作とハ勝久公歟、
 さあれ〆筑後守とハ進藤長美ならん、島陰漁唱文集
 を按に、文明十三年十月、送大醫陳祖田詩序に、
 茲年文明辛丑之冬、陳公忝奉左相府嚴命、速飛使
 軺於薩陽邊地、太守忠昌非〆翅欽〆其鈞旨之重、兼
 知〆公之為〆人、相待盡〆禮盡〆敬者非〆一焉、とミへ、

123

〔最上氏蔵本〕

また文明十七年八月、送大醫竹田公歸京師詩序にも、忠昌公の疾給ふ時、馳使于京乞醫于官、於是勢州閣下、悉銜左相府鈞旨而命公とあり、按に此等の左相府は、皆政家公にて尚通公の御父なり、また乱道集に、豊州忠朝の上京を勧める詩と序にも、伏承昔分貴氏於藤太相國焉などありて、詩の起句に貴族曾從丞相一分と作るも尚道公の由緒をいへれば、右の書辭もおもひ合すべき也、

○好便之条馳筆候、家門事對其國旧好吳于他儀不坏候、連々無疎意馳走之段、執成頼入候、仍色紙三十枚、雖其憚多候、書進之候、委曲猶申含古市長門守候也、状如件、

(天文二十一年)

六月廿七日

〔花押〕
據最上氏
模本補乃
積家公也

日新軒

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二六七四号文書ト同一文書ナルベシ)

124

○去年上洛之由候処、不能對面候、背本意候、家門由緒之儀、早于他子細候、弥無疎意之様、連々對修理大夫執成肝要候、仍色紙二十枚、雖其憚多候、書進之候也、

(天文二十一年)

六月廿七日

(花押)

椀山安藝守どのへ

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二六七五号文書ト同一文書ナルベシ)

125

○雖未申通候、令啓候、抑武家御字之事、随分申調、義之字武家被染御筆候、後一家繁栄之基、尤珍重(二候)、仍太刀一腰、表祝儀計候、猶委細申含古市長門守候也、

状如件、

(天文二十一年)

六月廿七日

近衛種家御判

嶋津又三郎殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二六七七号文書ト同一文書ナルベシ)

126

○今度上洛、殊種々懇切之儀、本望候、委曲如申候、家門之事、弥可然之様以馳走、必々來年上洛待入計候、

執成肝要候也、かしく、

七月三日 (近衛權家)
(花押)

古市長門守どのへ (花押)

(本文書へ「旧記雜録前編」二二六八一号文書ト同一文書ナルベシ)

右の文書、長門が子孫、最上右近義隅家に傳へけるをバ、明曆中、史官平田純正遍く古書を徵す時、日新公あての御書などは摸寫せられ、萬治元年十月點檢ありし百六十九通の内にはミゆれども、右三十六枚の色紙は、はや其時より見得ずとなん、近ころ府士和田秋實、かの植家公の書給ひし色紙三十六枚を市に獲て、御書中に所謂色紙も此ならんと疑ひ、季安をして詳に其考を記さしめ、天保五年二月、伊集院兼誼が江戸にゆけるに託し事蹟を訂され、若や御用にも成なば獻納せんと請ひければ、四月兼誼抱て江戸に至り、二十四日岩下亘道朗に因て、

溪山公の英覽に備ふ、公特に珍玩せられ、直に皆召上られ、その三十六枚をやがて十八枚づゝ二幅の掛軸

に裱装せられ、御書中の色紙ぞ此ならめと、季安が考も副て寶愛し給ひけるとなり、さありて、其秋八月、道朗をして人の下るに齎らせ、明人錢穀が画ける古畫の御掛物と縞縮紵をバ秋實に賜ひて右の報となさしめ、且季安がかうかへも甚精し、史官の材と稱せられ、平素の事まで問ハせ給ひ、竟に此愚考四冊も呈上せよとの仰ことありて、同十二月、これを江戸に獻ず、六年正月、道朗もち出て英覽に備られければ、老公熟覽ましく、辱も御感浅からず、六月、道朗件の蜜旨^{「密」}を傳へて、季安に金十兩を賞賜せられ、別に新著もあらばまた呈せよとの内命を蒙れり、よて其頃竊に有司の意を承て、一向宗を禁ぜられし来由の考と、國老より琉球に預參せられしことの考など両三冊ありしを、閏七月、江戸に呈す、其冬、老公大磯に御持下り、こもまた熟覽ましく、いと御感ありて、七年八月、高鷲を發給ふ前日、また道朗をして蜜旨^{「密」}を傳へ、また季安に金五兩を賜ひ、七冊共に副稿とミ^{「抄」}へれば、更に淨寫し獻「せ」よとて、此美濃紙一束を添賜ひぬ、然

「都城藏本」

あるおりから、五代秀堯、愚考の事を傳聞、再撰方に御用あるとて長く史局に徴し留けるゆへ、「表」いまだ淨寫に成らざる中、寔に

老公も薨ぜられ、道朗も歿し、斯く淨寫せしも獻るに路なし、その為に賜ひたる紙なれども、後の時運をまち、粗其事をかき附て、季安が子孫に貽し、堅く他に際すを禁ぜしめ、幼きより玩古の癖ありて、圖らずもかゝる恩恵を蒙れるあらましを、永く吾家に知らしめんが為め、かくハ記おくなり、
△

○近衛事、嶋津分領之内へ被遣候、然者日向之内あやより、人足百人・乗懸馬拾三疋、則奉行已下申付、嶋津修理入道居城迄可送届候、嶋津又四郎かたへも被仰遣候、可成其意候、猶幽齋可申候也、

(文應三年)

卯月十三日 朱印

北郷(時久)左衛門入道

(本文書ハ、「旧記雜錄後編二」二二九七号文書ト同一文書ナルベシ)

○大日本史、一百八十、列傳第一百七、將軍二、

源頼朝下、云、三子、頼家・實朝、自有傳、庶子僧

貞曉、頼朝患政子妒婢、潜附仁和尚僧隆曉、為三弟

子住高野山、明月記、東鑑、尊卑分祿、頼朝子僧能寬、為權能直、並為頼朝子、島津家傳曰、比企能員妹丹波局、寵于頼朝

有娠、避政子妒、潜赴西國、過在吉社、産子、即忠久也、為惟宗廣言塚、冒姓惟宗、大友家譜曰、大友經家女利根局、為頼朝妾、

有孕、賜之齋院次官藤原親能、生能直、冒親能姓、為藤原、以外祖氏稱大友、東鑑相載、二人事撰、而不言、為頼朝子、果無確據乎、抑有所忌而然乎、據吉見系圖、則忠久廣言之子、而非頼朝之子也、未知孰是、附以備攷、一女、長適志水冠者義高、次三幡、稱二

乙姫、幼蒙二女御命、未及入内而卒、東鑑、

○紺珠荒井君美著

近衛殿御家礼之事、進藤兵少輔物語りに、伊達家之儀者、世上も一通りいふごとくニ、山陰中納言の後なれば、藤氏の長者なる故ニ近衛殿江礼あり、かミニ應山公御幼少之時ニ無双美少年なりし故ニ、政宗并藤堂泉州、柳生丹州等、常ニ上洛之時ハ御心安く出入ありし、政宗杯も少壯之礼を以てや交り給ひけん、限なくむつまじくなりて昵近候事なり、今ニ御家礼被申候な

り、藤堂此前之亭を造營してまいらせられしとなり、
近衛「此款」の火事に焼ぬ、それほどの御事なり、殊に藤堂家
ハ、歳暮に 禁中ニ黄金と鴈とを献ず、近衛殿より御
取次なり、長橋より奉書の月日をバ、近衛殿ニてかへ
給ふて下し給ふ例也、又嶋津家之事ハ、近衛殿の家ニ
仕へし豊後之局といふ女、関東へ下りて頼朝に仕へし、
二位殿妬ニ而、梶原をして由比の濱へ沈むべしとなり、
梶原引て出し時に、局云、我京都に有し時、近衛殿の
御あはれミを受けて既ニ懐妊仕候ぬ、我身いかにも成な
らん、此子迄をむなしくなさんの悲しさと申せバ、梶
原も佐殿のおもひ給はん事を恐れ、殊に懐妊の事、憐
ニ覚へしかバ、沈め申せしと披露して、ひそかに落し
申たるに、摂津國難波のほとりの石上ニ座して男子を
うめり、此よし近衛殿に申たりしかバ、男子をいつく
しミそたて給ふて成長の後、関東へ此よし聞へしかバ、
頼朝呼むかへ給ふて、おりふし薩州之嶋津ニ継子なか
りしかバ、此子をたふ、依之嶋津者頼朝之御子共申せど
も、實ハ近衛殿の御子なりし也、彼出生の時の石の邊

りニ、一社之産土之神をいはひて、今も嶋津家の上下
共々、往來の度毎に參詣有なり、殊ニ慶長関か原之役
ニ、嶋津家之人々、近衛殿竊に家ニ歸し給ふ、土蔵を
近くまで嶋津蔵とて侍りし、今ハ燒失仕りぬ云々、△

131 附録の跋「此は淨寫せぬまへの文なれとも英覽に備
奉りし稿にも載たれば、本の如く置なり」

管ツグをもて天を覩ミるてふよりも、なほ（おこ）をろかななる季安が、
久しく世に埋ウツれし朽クざへにて、いと似合ぬ遠トホつ世の事な
ど窺ウツふとも、いかでかよく胸に糊ウツひく疑ひの雲をはらさ
んや、まして此御さうの址どもハ、所謂三『』國の總
名にて、そこにあつかれる殘文斷句もまた古今に驅カけわた
り、ミツ國に散チり墜ツちて、往々傳りのこれは、遽ツによ
く輯め考ふべきわざにしもあらず、然ツはあれど、そも
くしたしく島津の御國に生まれ、島津の 君のおほん
いつくしみをバ世々飽アまで浴アきつゝ、朝な夕なわらバ
への時よりくちにすし心に尊む島津の御名氏なから、そ
の由緒を訪ウれてハ、いかなるわけだも辨へ知らざるは、
いと本意なくおもひ侍りて、年月こゝろをつけてゐる

に従ひ聞くにつれ、あとさきをわかかつのいとまもなく、只筆のまに／＼かき集めおけるを、近ごろ新納久仰君とその旁族伯剛等と勧め給へる言の葉の、いとせちなるにいなひかたく、はかりの関のはゝかりをもうちわすれて、さきの月、はや愚考三巻を著はしたり、さりて此右に撫へる文ともハ、おほかたその筆を下すとき、詞の援け、事の證しにも引たれハ、来哲の幸ひ、是を階として、なほたしかに併せかうがへて、浅陋の季安が妄りに誤り述るふし／＼をハ、更によく正し給ふかたもありなんと、聊かその助にもなれがしと、斯く寫し附おきぬ、およそ三まきに引る諸／＼の書ともハ、何そ是のミに限らんや、くさ／＼なほ多なれど、つゝはてなかりけれハ、此冊はまづ紙も盡ぬるまゝ、今とし癸巳の卯月十まり八日といへる〔に〕、平の季安、潜隠の窓に筆を搦り、かくなんしるべして、冊子たりけり、こもまた天保四とせの事なりき、

(本文書ノルビハ朱書ナリ)

▽管窺愚考附録 大尾△

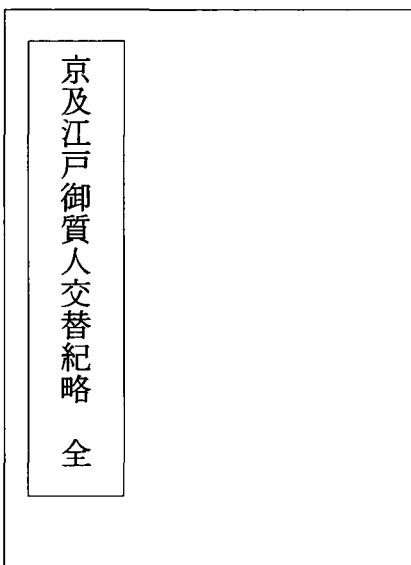
『共四冊』

伊地知氏』

- (1) 清安、稱二郎左衛門、長皇朝學、
- (2) 是月無聞、大日本史係二十月、
- (3) 愚管抄ノ文蔵本ヲモテ校正ス、
- (4) 風土記ノ事季安ノ考下ニ在リ、
- (5) 三部共ニ蔵本ニアリ、
- (6) 此季安ノ考、當レリ、篤胤ノ説アシ、
- (7) 寛、恐覚、
- (8) 此二字系圖不見、
- (9) 此字不用欵、
- (10) 少將餘リナゴリ惜クシテ、
- (11) 此考ハ別冊ニ在リ、
- (12) 蔵本如左、筑前守、後イ
- (13) 承曆ヲ永曆ニ作ル、
- (14) 時久「脱欵」、

京及江戸御質人交替紀略

(表紙)



(中表紙)

元治二年乙丑正月
起稿廿八日甲子
粗成冊了

豊太閤至
當將軍家
京及江戸御質人交替紀略

1 忠慶君表藁跋

右一軸者、余九世祖考、(喜入忠政・忠統)忠慶府君所管撰述、先世勲閥之表藁也、今茲春、余告如食邑、(伊地知季安)請伊子辭、(オイト)徧搜下邑中所藏古籍、則有二書在焉、而前篇獲諸有川氏、後篇獲諸伊集院氏、皆以眎余、余取而讀、則前後皆君筆蹟、而翻々所手草也、惜哉、鉛槧未終、散落既久、幸拾其錯簡乎殘缺之餘、靈喰特多、或事異於隻行、或語斷於單辭、自非能通當時事者、不可得而讀焉、乃命工棧稍、使子靜菴稽事詞以接續之、寶軸一新、原文稍綴、義趣頗通、昔萬治中、邑臣伊集院久豊、采輯舊聞、述吾先古事、今與之儼校、雖不無無三厥益、亦惟大抵、祖述剽竊此篇焉已、然則先世勲閥、精覈詳審、莫善於此、當必珍襲以永備世鑑者也、子靜亦曰、何翅君獨享拱壁、想當於大史氏、亦見採取、若(義久)貫明公始謁豊公時事、未嘗親如斯詳密者、僕之回自邑也、人多問下有奇聞否、僕每對輒必先及之、嗜古之徒、往々聞而匪下畜珍、愛其真蹟、亦咸莫不喜獲緊要實說於其將湮滅云、於是乎、余之喜

可_レ知也、因加_二裝潢_一、記_二其由於末簡_一、併以貽_二子孫_一、
使_レ知_レ所_二敬護_一、以什襲傳_中諸無窮_云、天保十一年庚子仲
冬穀旦

鹿籠邑主喜入久通謹跋

『喜入撰津守忠政家状稿』

一 父存生之内、從京都 太閤様差下被成候、其故者、
『季久』
龍伯様數年御弓箭之以御粉骨、九州不殘御手ニ入候処、
豊後之大友殿・日向之伊東殿兩人懇望ニより、以多勢
御下故、九州内六ヶ國之衆者皆太閤へ相加、河内泰平
寺迄御下候、其時分 龍伯様者日州表江 太閤之御舍
弟美濃守殿江御指合、高城表根白ニて御一戰候処、無
事之御談合ニ成候間、都於郡へ御逗留_①へ 大閤様川
内へ御下事聞召、俄ニ於御前御談合取_レ刻、御一家
衆北郷一雲齋・伊集院下野入道抱節・鎌田出雲守・本
田下野入道三清・我等父弓託なと人_レ存分不殘一大
事之御談合と申、北郷一雲者、是非共我等在所庄内江
龍伯様御越候へ、一戰仕、御家之御運を開可申由、遮

而被申上たると聞候、弓託・出雲守・三清なとハ、如
薩摩日夜御帰宅可然と被申上たると申候、穎娃_{久慈}左馬頭
父鎌田出雲守ハ、其比都於郡之地頭ニて候故、別而萬
事内外共精を入、才覚忠節由聞得候、父弓託申上候ハ、
川内迄下向候大勢鹿兒嶋へ打入可申候、今夜中御帰宅
候て、大閤之前にて御切腹可然候半与申上候、其曉
御立御切腹_②に究たると申候、一雲者野尻迄御供ニ而、
是非庄内江御越之由被申上候得共被仰分、後日之事と
御内談被遊候つる欵、一雲ハ庄内江、龍伯様者 霧
嶋越御帰着、一雲無比類申上候と取汰候、一雲者北郷
佐渡守祖父ニて候、其後御無事相調刻、一雲ハ大隅宮
内へ被指出、石田治部少殿以參會相濟、弓託案内者申
たる由候、

一 山田民部少輔父山田越前入道利安ハ、久_レ日向高城
之地頭ニ而候、先年豊後之大友衆下向申時も籠城ニ而、
運を開忠節候、又竹原勢取巻、中_レ大敵候得共城を
持こたへ、其後御無事ニ成、民部少輔者弥九郎ニ而、
未若年ながら從城 美濃守殿へしち人ニ被罷出候、拙

者兄式部(久道)太輔籠城申候間、右同前しち人ニ罷出候、利安ハ兩度之忠節に候、然者如右 龍伯様従日州御帰被成、即川内へ御指出候へハ、皆く外城く江罷越、御供衆無之わつか歴々七十人計、御一家ニ弓託、地頭ニ抱節、老中ニ町田出羽入道存松、右三人迄候、伊集院之雪窓院にて 龍伯様御入道被遊、如川内御越候、雪窓院者 龍伯様御懷様御寺にて候、然処御こしかき申候夫丸以下方々江走失候間、伊集院之衆中八人申合、御輿をかき被申候、其躰故中く可申上様無之候、然処思召外 大閣様より御参候へと御承、於泰平寺御礼候、御供之衆ハ二王堂にて御番衆被留候、御太刀持にて川上因幡守親左近將監一人、是非と申罷通、又弓託・存松・抱節三人ハ、以御下知被罷通由候、大閣様御機嫌よく御禮相濟、御腰物大小・御小袖御拜領、又三人之衆へも御小袖老重宛被下候、其時於泰平寺御人しちニ(龜壽)御料人様御指出被成候、御國事、薩摩 龍伯様、大隅 惟新様(義弘)、諸縣一郡 又一郎様(久保)と御朱印御給と申候、於泰平寺父弓託御前へ度々被召出、大閣様御手

202

前ニ而御茶被下被仰候者、弓託者 龍伯此度腹をきらは供ニ可切与存たる欵、龍伯あれニ目をよく懸よ、我者左様之時腹可切者一人も無之とて殊外 御感候、龍伯様連々彼者ハ其心懸之者と御申上候、誠忝奉存候と、後々子共江茂申聞候、従日向御帰國之事も申上、川内江も御供申、忠節無其紛候、龍伯様者 大閣之御供被遊、頓而御上洛候キ、惟新様ハ霧田にて御禮御申候、

(本記事ハ「旧記雜録後編」二二七五・二七六号ト同文ナリ)

右通、喜入撰津守忠政親父撰津守季久入道弓託ノ直咄ヲ記サレシ實録也、他書ヲ参考スレハ、時供奉セシハ、島津圖書頭忠長入道紹益・喜入季久・町田出羽守久倍入道存松・伊集院右エ門大夫忠棟入道幸侃・伊集院下野守久治入道抱節・平田美濃守光宗入道舜蘆・本田下野守親貞入道三省、兵道野村兵部少輔良綱、御陣僧長壽院盛淳、右筆八木越後守昌信入道嘉竺等、五月六日公ノ御剃髪ニ入道シテ御供ナラン、伊集院士ノ御輿ヲ

昇キシハ安藤左近・春田某・春口土佐・中馬十郎左エ門・市来豊前入道・大迫佐渡入道・上村宮内左エ門・河添千介・小田原但馬及子源太兵衛等ナリ、左アリテ、八日 公黒衣ヲ召サレ、山田昌岩(慶)ノ時年十歳千代太郎ト云ヘル侍童一人ヲ召列ラレ、泰平寺ノ白洲ニ御拜伏有ケレハ、大閤懇ニ是ヘノ御意ニヨリ、縁頬マテ御進ノ時、義久慰勸ナリ、腰ノ廻リ淋敷ソトテ、御自身ニ帶シ玉フ備前包平・三条宗近ノ御大小ヲ腰間ヨリ拔取テ、公ノ御前ニ投賜フ、公謹テ御頂戴遊セシト也、時御盃立テ銚子出ケレハ、公御胸ニ此酒ハト少シ御念ノ浮フニ、大閤疾ク悟テ、盃事ハ何ソ盛ル及ハストノ 御意ナレハ、彼此御感腹ニテ、是迄ノ御敵對ヲ御後悔ナサレシトナリ、此等ノコトトモハ(通題)得能氏ノ譚藪筆録カニ見覺タリ、公ノ泰平寺ニ入ル也、番衆供ノ人ヲ通サス、川上左近將監久辰許ハ御太刀ヲ持テ是非ト閑通リシト也、又蒲池伊賀入道甫心ハ、十三歳ノ時ヨリ 日新公(忠長)ヨリ 竜伯公ニ召附ラレ、八十餘歳迄奉公セシモノニテ、此時後レテ獨リ跡ヨリ至

リ、京兵ニ拒カレ、自殺セントセシヲ親テ内レケルト其家状ニ見ユ、山田昌岩侍童ニテ御供シ、薩广山邊マテ京勢途ノ左右ニ必至ト出張タル中ヲ通リシ時ノ耻カシサハ今ニ忘レスト、長命ニテ追々語ラレケルトナリ、御質人ノ事ハ左ノ通、

3の1 『御姫様御上落日帳』

天正拾五年九州之防戦成立候事、 関白様大友家之為加勢大軍を引卒し、 関之戸ヲ被成渡、 因茲豊肥筑之士卒京勢ニ悉成合候故、 芦北表迄 関白様被成乱入、 然者薩隅日之衆於日肥両口雖勳戦功無其甲斐、 日州之捨諸城被引退、 されハ薩广守殿歴然之雖為御好、 一言之無御理、 京勢ニ被成傾間、 不及是非、 太守様五月六日覺嶋ヲ被成御打立、 同八日 関白様御陳所川内太平寺ニ被成御差出、 御前之任合事能、 先以薩摩一國之御安堵にて、 自他國之寛不過之、 臆而伊集院迄御帰鞍也、 就夫質人之儀稠被仰懸間、 御料人様可被成御差出相定、 同十五日未刻ニ、 御料人様從吉田覺嶋へ被成御帰、 不

移時刻即如伊集院御打立、御案内之京衆佐々孫十郎・平塚三郎兵衛兩人、石田治部少輔以分別被仰付、路次被成御急、大内田之渡より夜ニ入、されハ清藤より始大迫城麓迄者道ヲ中ニせき、肥後六ヶ國之張陳也、此夜者伊十院内城ニ被成御宿、町田出羽守犬之馬場御迎ニ被參、内城江者京衆之番候故御供衆断、伊地知右京亮・原田伊豆守・蓑輪丹波守・古市善左衛門・田尻仲左衛門尉、此衆計御番也、伊作之慶正庵麿嶋へ被成參直ニ御供也、然者女子衆同前ニ内城へ御番也、其外ハ皆々從城戸追帰候也、此夜之御調京衆之分別也、御供之女房衆九人、殿原中間十二人、與二丁、女騎夫丸等鹿兒嶋・吉田・蒲生より被仕立、御與寄川上治部少輔父子、御局之與寄野村狩野介・同姓川内迄ニ被通、一十七日、 関白様へ被成御差出、その砌はけのすゝし一被成御給、同女房衆豊子・たゝ木・すゑ三人江御帷三被給、此日從 関白様伊地知右京亮・蓑輪丹波守・原田伊豆守・長谷場筑後守・古市善左衛門右五人江御ふくの帷一充銘々被下、御使木下半介殿、此日本田下

302

野入道・平野丹後入道・吉田之御供衆即刻御暇被申、伊地知右京亮・原田伊豆守・蓑輪丹波守・長谷場筑後守此四人ハ 関白様被加御意、大坂迄之御供相定、居残申候也、依俄儀各迷惑之由申事候、此四人朝夕之調木下半介殿分別也、
『此ヶ條見伊地知越右子門藏本』
 一 太守様より今度俄ニ御供被仰付、無吳儀勤申、一段神妙ニ被思召通、染川源之允にて、右京亮・伊豆守・丹波守・筑後守右四人御禮蒙仰候、ヶ様ニ被 思召出候事、誠忝由各感涙を流申候也、
 一 十九日、新納越後守江山口早左衛門使ニ而、俄之儀ニ而諸事不如意千萬、就中器物之類無之由候之間、即相調行器一對に對之故実等相調、其外種々器物など取合被持せ、此日古市善左衛門為使、 関白様御陣易之御祝儀石田弥三殿・木下半介殿迄被申入、御丁寧之御返事在之、此日井尻七兵衛殿從鹿兒嶋始而之御使也、即御前ニ被罷出、

右者、天正十五年 関白秀吉公征西之後、為 御家

質 義久公之第三之御姫様御上洛ニ付、川東善左衛門(時弘)

門殿御供ニ而候、其時之日帳へ御名有之所書写進入

申候、

刁十一月廿四日

伊地知助右衛門(重英)

4

〔天正十五年亥ノ三月、大關様薩州へ一先年、太閤様當國御出馬之時、

御家御一大事ニ及候

處、御變罷成、御質人として、御料人様川内まで被

成御指出候ニ相定、同とし五月十五日鹿兒嶋を被成御

打立候、御供衆本田下野入道殿ヲ始、上下百人餘之御

供ニ而御座候ツ、然処、御質様直ニ御上洛与被仰出候、

左候得者、三清老事吉田之仕置被仰付候与候而被成帰

宅候、就夫平野丹後入道殿其外御供之多人衆、川内よ

り皆々被罷帰候故、漸上下廿八人ニ而、御料人様河内

より被成御出船、肥前之内千(千栗)りく、与申所江被成御着候、

従其被成御立候処ニ、筑紫之領内藤生野与申於町御警

固之京衆狼藉被申候ニ付、所之者共一揆ヲ起、大勢奇

懸及御迷惑ニ候間、不及是非、何も御供之衆仕はまり

可申と仕候處、漸浅野弾正殿手之衆被成續合、變ニ罷

成、其場を被成御延、其夜ハ秋月ニ被成御一宿候、従

其小倉江御着ニ而候処、龍伯様御上洛、下之関にて

御たひめん被成、それより御上洛にて候、上方之御仕

合事能、同十六年之十月十四日ニ、龍伯様御同心ニ而

被成御帰國候、其時、御りう人さま御いとま出申さず

候時、龍伯様御哥被遊、いふさ(細川國素)ひ老へ御遣被成候、

其趣、大かう様へ言上候故御いとま出候、御うた

二世とはちきらぬ物を親と子の

わかれんのちのあはれをもしれ

此御哥故、御いとま出、御同心にて御下向、又其後天

正廿年辰ノ三月廿六日ニ、御料人様被成御上洛候、其

刻ハ吾等事夫婦御供申、在京九年仕、子年九月廿一日

に関ケ原一乱之刻、惟新様、御料人様、宰相様御供

申罷下候、其時大坂籠城に罷成候処、佐土原之中務少

輔殿御姉様大坂之城を忍ひ被成御出候、然時ハ、御質

様、宰相様も城をしのひ御出可有之由、桂太郎兵衛殿・

平田太郎左衛門尉殿・吉田美作守殿・相良日向守殿・

弟子丸越後守殿・伊東肥後守殿・有川大炊左衛門殿・

宅間与八左衛門殿、此衆打合談合ニ而候ツ、雖然一大事成儀ニ候間、先々心見ニ誰ニ而も可出之由候ニ付、我等か娘に女男を相付、先出シ可見申候、定而番之衆何方之屋形より欵と可被尋候、左様ニ候共、屋形を曾不申、縦如何様成噯ニ相候共、其時まで之儀ニ仕候得与申付、女二人男三人ニ拙者娘を相添、城を出シ申候時、何篇鎌田安房介江堅申付出候処ニ、案中番衆あやしめ、何方の屋形より欵与尋被申候得共、何方共不申候処ニ、女二人をは門よりそとにおひ出し、男三人と我等かむすめを城内之やうにおひかへされ候間、別口より罷出、はや夜ニ入候ニ付、方々ニ罷成うるたへ申候処を、堺ノ密田可卜行合申、以分別女共ニ尋合、夜中に堺之様ニ召烈為被参由候、左様成様子御屋形江者知不申候条、不及是非、其分ニ捨置申候処ニ、御質様 宰相様五三日めに御出船なされ候、我等娘事御跡より参候ニ、漸豊後之ほとにて追付申候、就夫申上候、大田筑前守殿御料人おまつ事、御質様城を御出可被成候条、御跡ニ三日被罷居候、左候ハ、四日めには

吉田美作守・相良日向守其外歴々、殊更筑前守ニも被罷居候条、其衆おまつ事も同前ニ可被罷下之由候、然共其儀相違仕、おまつ事も御供ニ而被罷下候、乍去初御跡ニ罷居候事御意次第と被申上候、其忠節とシテ知行式百四拾石御給にて候、然時ハ我等事も筑前守殿同前之御奉公之儀候間、右次之御手ヲ被付候て可被下候、右之證據吉田美作守殿・相良日向入道殿・弟子丸越後守殿・伊東肥前守殿・大田筑前守殿・勝部加賀入道殿遠歴為被存儀候、如此御奉公之一筋御侘申上度存候處ニ、其刻ハ京乱ニ付、御國元も御繁多にて候、以時分御侘申上へきと存候処、拙子事関ヶ原一乱之後在大坂被仰付、平田大炊助殿と同前ニ罷上、二年相詰、三年日ニ罷下候、其後又々大坂御番番被仰付、鎌田加賀守殿替候而、税所弥右衛門殿と一年罷居、亦弥右衛門殿替に本田甲斐守殿被上候、拙者事ハ直ニ甲斐守殿と同番仕、二年相詰、三年めに罷下候、其後在江戸被仰付罷上候、彼是取紛御侘申後候事、

一近年 御妹様御質人として御在江戸之刻、上井次郎左

衛門殿被成御供、六七ヶ年之在江戸にて被成御奉公候
ニ付、知行式百石御給之様ニ承候、勿論賦銀飯米出候
事、然者右申上候様ニ、國分御上様 御質人として被
成 御在京候刻、我等事妻子召烈御供申、九ヶ年在京
申、剩妻子共ニ上方ニ而相果申躰ニ候、殊ニ其刻者御
賦銀なども一圓ニ無御座候、漸飯米計を被下、其外之
儀者万事ヲ自身迄ニて在京仕候、然時ハ右次郎左衛門
殿次之御手をも被付候て可被下事ニ奉存候事、

〔寛永四年〕

卯ノ 九月十六日

(川東陸弘)
北条土佐守

(重備)
三原左衛門佐殿

右通、天正十五年丁亥四月、豊太閤秀吉親將ニ大軍ニ入
寇ニ薩藩、導ニ出水忠辰、廿五日陣ニ太平寺、廿八日使ニ諸
將攻ニ平佐、城主桂神祇忠助堅拒不降、 義久公傳ニ命
降レ城、五月六日 公發ニ魔府ニ抵ニ伊集院、剃ニ髮於雪窓
院ニ更稱ニ龍伯、八日趨如ニ川内ニ謁ニ 太閤於太平寺、
太閤乃脱ニ所帶兩刀、手親賜レ公、九日令レ安ニ堵薩摩

一國、而皈ニ府宅、命速出質、 公乃使下本田下野入道
等率ニ百餘人ニ送ニ翁主龜壽君ニ趨ニ于川内、十五日發ニ魔
府、抵ニ伊集院ニ泊ニ于内城、伊地知右京亮・原田伊豆守・
養輪丹波守・古市善左エ門(義時・川東陸弘)・田尻仲左エ門(義時・川東陸弘)從衛ニ内城、
京兵佐々孫十郎・平塚三郎兵衛亦護ニ送其路、十七日
龜壽君謁ニ 太閤於太平寺、女房豊子・太々木・壽衛及
伊地知右京亮・養輪丹波守・原田伊豆守・長谷場筑後守・
古市善左エ門陪從取レ謁、 太閤乃使下木下半介賜ニ女房
三人御帷各一、從士五人帷各一、從抵ニ大坂、其他從士
皆令ニ別還、六月十五日 公發ニ魔府、廿四日抵ニ筑前岩
屋、細川幽齋・石田三成招レ公抵ニ于博多、廿九日 公
因ニ三成等謁ニ 太閤、此日渡ニ下関ニ時 龜壽君及又一
郎久保公・又四郎彰久等質子船亦同著ニ焉、 太閤聞ニ質
人等食乏而困ニ于京、賜ニ米五千石、十六年戊子七月五日、
朱璽賜ニ一萬石於攝播地、資ニ在京糧、此年 義弘公始
朝ニ大坂、八月 太閤召見賜ニ 龍伯公告、迨ニ其將レ辭
不レ忍與レ娘別、詠跡ニ幽齋、々々以聞ニ 太閤、 太閤
大感、乃命令ニ俱得レ還、

龍伯

二世とはちきらぬものを親と子の

わかれん袖のあはれおもしれ

幽齋

馴くし身をハはなたし玉手箱

二世とかけぬ中にハありとも

九月三日辞京、十月十四日坂麿島、聞者感莫不感悦焉、

人質番組 此外 北郷讚岐守質人實子

伊集院幸侃質人

新納武蔵〔守〕質人

此三人ハ常詰也、

一番

嶋津左衛門入道殿

孫子可有御上候、

肝付中將

親類年寄之子二人

新納武蔵入道

次郎四郎左京可被相替候、

二番

嶋津又四郎殿

實子可有御上候、

種子嶋左近太夫

親類并年寄[◎]子二人

入来院又六

親類年より[◎]の[◎]子二人

三番

嶋津圖書頭殿

實子御上有[◎]へ[◎]候、

根占七郎

親類年よりの子二人

喜入式部太輔

實子可有御上候

已上[◎]

右三組之内へ本田下野入道・町田出羽守・平田左近將監、

此三人も相加、老組[◎]四人宛にて候、雖然此三人〔ハ〕

御役人ニ付而、時に至而御用之仁、この内一人宛京都に

被召置衆〔之〕[◎]由、色々御理之儀候条、如此〔候、〕[◎]別

ニ書付申候、縦雖為御供三組之内之可為質人候、義久・

義弘・久保御在國之時者、如最前〔之〕[◎]一人宛三組へ相

加、可有御在京候、右替之日限者、七ヶ月宛ニ相定上者、

私之為談合被相替事[◎]可為停止候、已上、

天正十九

拾二[◎]月二日

石治少

三成判

義久様

義弘様

参人々御中

(本文書ハ「旧記雜錄後編」二七八九・七九〇号文書ト同一文書ナルベシ)

6 「大隅朱印」

急度被仰遣候、其方事鉄炮以下令用意、此方ニ所務等申付候として、相残奉公人共相改、悉召連、無御渡海已前、来春高麗江可罷渡候、最前雖相改申付候、▽◎可罷立者、不寄大小残居候者、猶以可被成御成敗候間、成其意、堅可申付候△留主ニ居候へて不叶者ハ書立候て可申上候、
 随而 兵庫頭、又一郎妻子、其外留主仕候者之妻子をも、
 同前ニ早々至于大坂可差上候、然者御扶持方可被下候間、上着次第、於大坂師法印・松浦讀岐守兩人ニ申付、
 人数等書付、右兩人墨付取候て可申上候、御帰朝少之間之事候条、能々可申付候、猶浅野彈正少弼・石田左頭・木下半介可申候也、

一天正十九年

十二月十四日 御朱印

嶋津修理大夫とのへ

(本文書ハ「旧記雜錄後編」二七九三号文書ト同一文書ナルベシ)

7 「全」

先度如被仰遣候、来三月高麗へ被成御渡海、御仕置被仰付、可御帰朝候、

一 義久事渡海候而可然候、早速用意候て、浅野彈正渡海之刻、同前ニ可被罷渡候、

一 新納武藏事、妻子を京都へ差上、其身者義久召連可被罷渡事、

一 大隅・薩广・日向残置候留守居共、妻子之儀も入念相改、京都へ可上置事、

一 高麗在陣者、此方留守居帳面載可被上候、其外侍共不相渡付て者、急度可被成御成敗候条、相改可有言上事、

一 従高麗用所とし候船共、其船主兵粮其外雜物已下、積候ニ付てハ可相渡候、積物無之付てハ、御兵粮可被遣候間、早々名護屋江可差越候、為其被遣候

御奉行ハ、不可有油断候也、

一天正十九年
 十二月廿八日 御朱印

義久

幽齋

(本文書ハ「旧記雜錄後編二」七九七号文書ト同一文書ナルベシ)

8 『忠恒公自朝鮮所賜』

下國以後者不通候、無何事令着陣、武庫様懸御目、多年之本望此事情、龍伯様御無事御座候哉、且暮御床敷奉存候、抑兩人事就、奥方別而頼置候、定可為辛勞候、心よハク遠慮など候て、緩なる儀共於在之者、後日至兩人稠可令其沙汰候、女方之儀者、平生法度たゞしき家中も、人間の迷にて不可然儀共出合、外聞悪儀毎事在之事情、況御家内ノ儀者ゆるかしき由、兼而承及候間、いさゝかもうつけたる儀共見及聞およひ、切々不寄男女可申聞候、誰にて候へ、りくつたてなといひ候はん仁ハ、以付可申越候、龍伯様御座候間、達不及申候へ共、帰朝之刻留主^(御候)跡之様可相尋候間、兼而如此候、不可有油断候、恐々謹言、

「文禄三年」
霜月十六日

「御十九」
忠恒御判

平田豊前守とのへ^(宗感)

川東善左衛門とのへ

(本文書ハ「旧記雜錄後編二」一四二二号文書ト同一文書ナルベシ)

9 「高麗御日記ニ」

文禄三年拾月三十日

一 高麗唐嶋江亥之刻御着船被成候、御船を初として拾七艘之船無何事罷着候、一御本陣江直ニ又八様御参被成候、御太刀一腰・青銅三百足但馬代、武庫様江御進被成候、

(本記事ハ「旧記雜錄後編二」一四四〇号ノ抄ナリ)

10 『正文御自筆ト押札アリ』

猶々 『宰相君』
さいしやうとのへ御心へ候て、おほせられへく候、たのみ存候、

追而令申候、拙者息女か事、當家人しちとして十三ヶ年在京いたし候、此程我ら申付候間ハ三清夫婦、其後ハ存^{「町田出羽久倍」}松夫婦つけ置申候、さして用ニハたゞぬやく候つれ共、見かけハよく候キ、今程ハ平田豊入如此ニ候、いちゞ駿

河なと被下候、川東善さへもん・猿渡九郎左衛門尉まで

にてハ、外聞実儀しかるへからず候、又八郎殿御置目頼
母數からず存候、本六なとさへしかく、とハ不知仰置
候欵、殊ニかの者[○]モ此比△は罷下候やうニ承及候、

いかゝ候哉、こゝよりハ何と被仰付候らん、無心元存候、

又八郎殿へモ此理り同前ニ申候、さてハこゝよりハしち

ヲハ別ニ御分別なされ候て、むもしか事ハ下向させられ、
なかくニめしをき候へかすと存候、我[○]ハ世ノ時こ

そしちにて候へ、今程ハ公儀ニモのくましきかと存候、

又八郎殿へ御談合尤ニ候、兼又又八郎殿何事モ神妙ニ見
へ申候、目出度候、酒過候ハぬやうニ細々可被仰候、又

たゝれさうニモなき座ヲたゝれ候事、なをし度候、然共
我[○]ハむかしかたきハ當世ニ不合候条、不及是非ニ候、

恐々謹言、

『慶長四年』

八月拾日

竜伯

武庫入道殿

龍伯より

(本文書ハ一旧記雜錄後編三・八四八・八四九号文書ト同一文書ナルベシ)

慶長七年壬寅、先^レ是石田三成之起^レ兵也、惟新公亦

屬^ニ西軍、西軍既敗還^リ自^レ関原、時山口直友等承^ニ神

祖旨、飛^レ檄勸^ニ竜伯公等和降、當^ニ是時、加藤清正

亦致^ニ圖書忠長書^一令^ニ以和解^ニ焉、

11 以上

其後者不申通候、仍今度拙者罷下砌、從内府公被仰出者、

其表御侘言之筋目在之条、堺目等之儀、可成其意之旨候、

如何被調候哉、就其去朔日ニ御侘言相濟、此表人質可被

差上由、其方堺目之番衆より預案内之由、水俣より申越

候、然共其以後様子不相聞候、如何相滯候哉、無心元存

候、御侘言筋目ニ付而、貴所御上洛之由候、此邊於御通

者、以面可申承候、自然滯儀候ハ、相應之馳走可申候

間、不被置御心可被仰越候、公儀少も疑數儀無之候間、

其心得候て、聊無御疑心、御侘言之筋目可被仰調事肝要

候、若又御侘言於被相捨者、上意次第堺目等之儀、可

成[○]スレ、猶追而可申述候、恐々謹言、

加主計

「スレ」
五月廿三日

〔⑩清正〕
「スレ」

嶋津圖書頭殿

▽⑩御宿所△

〔本文書ハ「旧記雜錄後編三」一五〇六・一六三五号文書ト同一文書ナルベシ〕

12 「在島津内膳久兵」

今度為関東之質人、其方妹上國候、誠々感悦之至、難述
禮詞儀候、為此等之忠賞、於阿多之内知行令宛行候、全

可有領地候、恐々謹言、

「慶長十年」

三月十九日

〔島津久賀〕

藤次郎殿

忠恒御花押

〔本文書ハ「旧記雜錄後編四」二三号文書ト同一文書ナルベシ〕

慶長十一年丙午六月、龍伯公及 惟新公相議、命_二島

津圖書入道紹益嫡子河内忠倍_一代_二藤次郎久賀妹_一、質_中于

伏見、十九日、忠倍乃發_二魔府_一赴_レ焉、

13 先年 貴久公被任陸奥守、予亦号修理大夫義久刻、
〔⑩本〕 光〔定〕

〔利義輝〕
源院様御取次之方迄遣使之儀、最上長門_{〔⑩〕}被仰付、京
都之旨趣申調早、剩善左衛門尉事、近年息女依在京、為
〔実情〕
警固之者被召列、兩度辛勞之至、于今条々無忘却者也、
仍状如斯、

慶長十二年十月廿四日 龍伯御判

最上善左衛門尉とのへ
〔義時・川東時弘〕

〔本文書ハ「旧記雜錄後編四」四〇三号文書ト同一文書ナルベシ〕

十四年己酉、遣_二又四郎忠仍男島津菊袈裟_一、〔久敏〕
〔七歳〕、質_二于江
戸、十五年庚戌十二月、遣_二北郷讚岐守忠能_一代_二菊袈裟_一、
質_二于江戸、於是二十六日、菊袈裟賜_レ告_二版_一、

14 ▽ ◎ 以上 △

嶋津菊袈裟殿為御替、北郷讚岐守殿御越候間、其趣披露
仕候処、遠路御造作御苦勞之由被思召、御前之御仕合
残所無御座▽ ◎ 候而△ 則菊袈裟殿_{〔⑩〕}、御暇被遣、只今帰路
被成候、爰許_{〔⑩〕}之_{〔⑩〕}、妹委曲宿老中可被申上候、将又貴公御
事御なつかしき由、将軍様節々被仰出候、兼又其地御
〔⑩此〕

屋敷御普（請）以下、如何（も）ニ候丈夫ニ被仰付候儀、御造作御苦勞共之由 御説被成（候）〔彼〕 彼是以御懇成御事書中ニ難申盡候、何共面拜（候）ニ積苦（候事）可奉得貴意候条、不能（二）一（一）候、恐々謹言、

「慶長十七年」
十二月廿六日

本多佐渡守
正信判

羽柴陸奥守様

貴報

（本文書ハ「旧記雜錄後編四」九七九号文書ト同一文書ナルベシ）

十六年辛亥二月、遣ニ加賀守三久男北郷千世鶴、代ニ忠能ニ質ニ于江戸、十七年壬子正月、遣ニ敷根中務少輔立頼、代ニ千世鶴（時年七歳）、質ニ于江戸、以レ故賜レ告千世鶴（時年七歳）販レ國、十八年癸丑六月、先レ是幕府秀忠公命ニ諸侯ニ各出ニ質人、於レ是 惟新公議ニ 家久公、遣ニ息女（御下）・孫（千代）千女ニ質ニ于江戸、皆為ニ國家ニ善拜ニ其命、乃廿三日、 家久公裁ニ倭字感贖（一）以褒ニ美之、

15 『在島津勘解由久當』

たうけのしちとして、くわんとふへまいるへきよし申（候）つるところに、すこしもしたひなく、すなはちりやうしやう、ことにおやこともに、はるかなるむさしの江戸までこされ候事、ちうかうこれにすくましく候、まことにたうけ三十代にをよひ候へとも、かやうなるためし御入候ハす候、一身をなけうたれ、よろつこゝろつかひははかりなき事にて候へとも、後の代までのめいよ、かんし入候、申まてなき事ながら、御おやこの事ゆくすゑふさたなく心をそへ候へんまゝ、めてたくこゝろにまかせらるへく候、いくたひ申てもちうせつの禮ハ申つくしかた

慶長十八年六月廿三日

いゑ久御判

いもと
まいらせ候

（本文書ハ「旧記雜錄後編四」一〇三号文書ト同一文書ナルベシ）

16 慶長十八年丑六月廿三日加治木御打立
御質様御供衆賦銀渡方帳
慶ノ十九年十二月限之つもり帳究申候、

「口略ス」

一 銀三貫七百五十七匁六リ

一米三十石一斗四升

新納次郎九郎殿

主従十二人

一 銀三貫三百十二匁九分一リ

一米廿六石四斗

江田藤右衛門入道殿

主従十二人

「右外略于此」

廿三日或廿四日途于加治木一、行宿蒲生一、廿五日抵于

川内一宿二大小路、廿六日到二久見崎一、駕レ船候二風潮、七

月十九日開帆川口一、十一月十六日至江戸一、上井次郎

左エ門里兼・蒲池備中守・南郷淡路守・新納次郎九郎・

曾木五兵衛尉・上床藤右エ門等扈從焉、

17 一めしつれらるゝねうはう衆、上藤 つほね 大式 新

太夫 おふち おちやう おいま おいと まつなミ

五位 あちやくくぬひ 右衛門のから あこ ちよ

ほ あやゝ はりま ひせん 竹かわ 野分 さゝな

ミをとめ こてふ せきや あさち もゝ さゝ

此外上井二郎さへもんのせう かまちひつちうのかミ

そふゑん なんかうあはちのかミ そ木五ひやうへの

せうをはしめ、このたひの御供しんらうのいたり、中

く申もおろかに候云々、

一つほね江之御状ニ、万つるこさしく御とも申候よし、

一たんしかるへく候云々、

一しん大夫江之御状ニ、母并妹・善二郎一たんさかしく

云々、

〔島津御狂考叙〕アリ、錯簡カ、省略ス

十九年甲寅正月、家久公遣使如江戸一、賀令妹等新

一年、因賜北郷忠能及上井二郎左エ門里兼・上床藤右

エ門入道・曾木五兵衛・蒲池備中守書一、又致山口勘

兵衛書一、皆詫質人事也、

18 【御案文】

新年之慶賀珍重々々、仍其地江長々逗留、一段辛勞之儀

20 『全』

共候、然者其方替之儀、今度兵部少輔於其許承合、様子

可申下〔候〕^{①ナシ}間、其注進次第可申付覚悟候、太儀候へ共、

今少可被相詰事肝心候、將又度々如申越候、諸事無緩控

量尤候、猶期後音不詳^{②候}、

『慶長十九』 正月二日

『家久』

北郷讚岐守殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一〇七七号文書ト同一文書ナルベシ)

19 『全』

江戸妹之所江年始之使者候て、此者差越候間、乍次用一

翰候、▽◎度々△田舎者迄召置心遣存候間、▽◎如申入

△遠方之儀^{③ニ}候へ共、可被添御心事所仰候、猶委曲者期

後音候、▽◎恐惶△

『全』 正月二日

山口殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一〇七八号文書ト同一文書ナルベシ)

於其地妹輒下着、致満足候、路次中之儀も、別而精を入

候由、神妙之儀共候、弥諸事無緩様控量肝心候、女房共

へも辛勞之通相心得候へく候、〔此者可申達候、〕^{④ナシ}謹言、

上床藤右衛門入道殿

曾木五兵衛^{⑤對}殿

上井次郎左衛門尉殿

蒲池備中守殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一〇七九号文書ト同一文書ナルベシ)

21 『在島津久當』

さてもくそことのすまぬ、氣をつくされ候はん事、

すこしもわすれをかす候へとも、とをつ國ゆへ、しけ

く人なとまいらせ候事、心にまかせず、存なからふさ

たにうちす候、まことにくかやうにしんらういゑ國

のため、しよ人の心やすさ、この御れいいくたひ申て^{⑥く}

つきすましく候、さそくふへんなる事のミと思ひやり

候、しかればちきやう二千こくあまりまいらせ候、もく

覚

(本文書ハ「旧記雜録後編四」一一五九号文書ト同一文書ナルベシ)

慶長十九年
八月廿八日
千つるとの
家久御判

高二千二百四拾石^{目録在別紙}
右知行、乍少分進之^候者也、

槻野村
日州諸縣郡志布志之内

(本文書ハ「旧記雜録後編四」一一五八号文書ト同一文書ナルベシ)

千つるとの
まいらせ候
いゑ久御判

ろく持せ候まゝ、御らんあるへく候、はつかなる心さし
をあらはず計候、さためてくハしくハ、いしんさまより
おほせらるへく候、かしく、

『慶長十九』
八月廿八日

一大閣様御下向之刻、國府御か^{「持明君」}ミ様御人質ニ御上洛にて

候、御褒美として高老萬斛御一代無公役ニ御給候事、

一関ヶ原一乱之後、御國本之儀もいかゝ候する哉と、御

念遣候砌、我か息女人質ニ召上せ被成候而、直ニ御

家之御為と候て 松平河内守殿江^⑩御縁組候、人質迄之

儀^⑪候ハ、妹へ替り候て可罷下處ニ無其儀、上

方にて相果候、御家之御奉公如此候、右之様子ニ付

知行之事、此中申度存候へとも、江戸之上下毎年被成

御辛勞候處ニ、我身無公役ニ千石被下置候間、當時^⑫

堪忍さへ調候ハ、一者御奉公と存、菟角不申候、然

処ニ寶壽院殿養子^⑬可申之由、^⑭黄門様より御意にて

候、左候へ者今之知行にてハ以来御奉公續ましく候間、

申候事、

一^{「御下」}妹事も為人質江戸江^⑮相詰候、其褒美として高三千石無

公役ニ給候事、

右先例有之儀候間、宝壽院殿江も知行御給候様ニ申

度^⑯、是を我に給候へと申事にてハ無之候、此由具ニ

披露候て可預候、我か娘計御手付なき事迷惑ニ候、可

然様ニ可有申候、

『惟新公長女』帖佐

〔寛永十三年〕
子拾月十四日
〔島津豊後守
朝久後室〕屋地

穎娃長左衛門尉殿

渋谷四郎左衛門尉殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編四」一八六〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

寛永元年甲子、家久公嘗感^ニ神祖以来特恩、無^レ路^レ將^レ報、方今天下稍治、而諸侯皆出^ニ貢^ニ江戸、各還^ニ封國、非^ニ泰平術、於^レ是公意、吾率^ニ我妻子、恒仕^ニ江府、足^レ報^ニ萬一、乃使^ニ伊勢兵部少輔貞昌^レ銜旨、說^ニ閻老土井大炊頭利勝、有^ニ密所^レ請、利勝以聞^ニ秀忠公、公大感喜曰、實泰平基莫^レ過^ニ乎此、家久誠忠豈可^レ忘乎、乃十一月、家久率^ニ夫人及世子又三郎忠元^{〔光久〕}・岩松丸^{〔久直〕}・萬千代丸^{〔忠起〕}、發^ニ魔島^レ赴^ニ江戸、時貞昌亦率^ニ妻子^レ從^ニ之、十二月十日開^ニ帆^レ瀬之浦^{〔出水〕}、二年乙丑二月二日著^ニ船大坂、三月十八日發^ニ伏見、時秀忠公感^ニ公精忠、豫命^ニ五十三驛^レ給^ニ馬丁、唯隨^ニ其用^レ勿^レ有^レ所^レ限、而四月十三

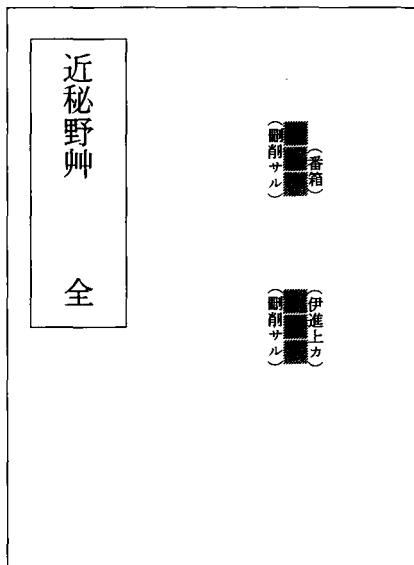
日抵^ニ江戸、入^ニ櫻田邸、遣^ニ使就^ニ閻老^レ告^ニ參府、十四日上使勞^レ之、廿三日家久及又三郎・岩松丸俱造^ニ大府、各獻^レ贊進見^ニ幕府、幕府曰、家久以^ニ幼息等^レ遙來^ニ江戸、寔是大義、他多^ニ懇言、家臣貞昌等亦多取^レ謁焉、先^ニ是男又八郎忠平^{〔忠朗〕}、元和五年質^ニ于江戸、^{〔時年四歲〕}至^レ是居凡七年、賜^レ告販^ニ國、家光公特賜^ニ忠平駿馬一疋、

24 右通、寛永元年 御前様江戸御參府之後者、御質人交替之御沙汰無之、追々泰平ニ而享保中ニ相成、却而從將軍家 淨岸院様 ^{〔維豐〕}有邦公江戸御入輿有之、御守殿被相立格別之御由緒柄ニ被為成、其御縁ニ而 ^{〔重孝〕}大信公初之御夫人慈照院様御事茂徳川刑部卿宗尹公御娘ニ而、乍御早世其御甥 家齊將軍之 御臺様ニ者 大信公御娘 廣大院様御事、近衛經熙公御養女ニ而被為立、又其御縁を以 ^{〔奇彬〕}順聖公御夫人芳樹院様御事ハ、家齊將軍御實弟徳川民部卿齊敷公御娘ニ而、御重縁被為結、連々無御據御續柄ニ御座候処、廣大院様御逝去後、無何与御疎遠ニ被為成行、折柄英國人琉球滯留漸々根深、其上年々夷船海

岸漂来ニ付、何方茂軍備第一御手當之世態ニ成立、訖度御國威不被為失様不被成置候而難被為叶御砌、琉球之事共者嫌疑之雜説等有之哉ニ乍被為聞、旁ニ付何れ 將軍家御親シミ第一被成置度、 順聖公御賢慮之御砌、 近衛家又者 大奥等より、 家定將軍御再縁之御望被為聞、就而者先年初而御下向之節、 溪山公御七男因(忠剛)輦殿奥方女子誕生、其時 御祖父溪山公も御下國被為入、御名茂於一と被為附、 廣大院様正敷御甥之御娘ニ而、御續茂第一御近く、其御十九ニ被為當御比ニ而御年齢茂御相應ニ付、 近衛家且 公邊迄茂御内熟之上、 順聖公御娘之御届被仰上、 家定將軍之 御臺様ニ被為立、即今之天章院様ニ而、 順聖公御賢慮之通只今ニ相成、無此上茂 御質人様ニ被為成候御事与乍恐奉存次第ニ御座候、此末茂夷舶攘禦之御軍備者、何れ可被為備置儀、 皇國當然之御勤御坐候得共、 御前様方御出府之御費者無益之至、為御吟味乱世涯 御質人之事共書拔、大抵右次第御座候、以上、

近
秘
野
艸

(表紙)



(中表紙)

他見極秘勿

漫示人、

近秘野艸

大信院公以来
御系圖

1

『御系圖者奉行之内ニ茂訖与掛り被仰付、何篇奉得御差圖候上、編集被任もの哉ニ承及、如此任筆野艸共可仕物ニ無御座、誠ニ恐惶千萬御座候得共、御側勤之人日記多年借入置拔写仕度折柄、去ル七日任御沙汰拔書候へハ、長文紙ハ相少ク、只紙勘略之為計ニ、如此任筆極之内分ニ書綴、近年上様方之大底心得申も一切外見ニ出候物ニ決而無御座候間、其御考ニ而御早覽奉頼候、以上、

十月廿六日』

大信公

諱重豪 初諱久方 又改忠洪 小字善次郎 冠稱兵庫 又改又三郎 又稱薩摩守 轉任從四位下左近衛少将 從四位上中將 老改上總介 陸從三位 號榮翁、

○延享二年乙丑十一月六日生於薩府、母島津備前貴

傳老母 靜山、之女名於登美、翌七日卒、年十九、葬于花城長年寺、法名正覺院殿貞範妙雅大姉、其葬權城以圓徳

公時為郷主故也、迨大信公立紹封爵、始附其主於福昌寺祖廟、而祭式亦以諸侯命也、

○寶曆三年癸酉、初〔島津重年〕圓德公為兵庫久季後、至〔宗〕慈

德公〔德〕薨無子可嗣、圓德公入襲封爵、命大信公

嗣久季後、於是十二月十五日、圓德公手加之冠、

令新納內藏久品理髮、乃名久方稱兵庫、前此圓

德公還自江戶未有他子、故以元配子既告大府、

假為儲嗣、〔稱島津善次郎〕所謂假養子也、

○四年甲戌閏二月、圓德公上請隨儲嗣朝于江戶、

閻老松平右近將監武元聽之、表稱善次郎因前請也、

於是五月十一日、從圓德公發府城、七月二十二

日至芝邸、八月四日立為世子、更名忠洪、稱松平

又三郎、亦稟松平武元得命也、

○五年乙亥七月二十七日、閻老承旨、會于西尾隱岐

守忠尚第、徵旁族久柄〔島津淡路守〕以命世子襲封爵、是

為大信公、八月十五日、久柄為公造朝、獻

大家〔家重〕公御太刀一腰〔御刀一腰力〕、縮緬廿卷、白銀百枚、

御馬二疋、儲君〔家治〕公御太刀一腰、御刀一腰〔三原正家〕、

白銀百枚、御馬一疋、御簾中白銀十枚、縮緬十

卷、進見兩公於白書院以謝襲封恩、時不親朝以

尚幼故也、九月九日、島津圖書久亮為御家老、樺

山左京久智・鎌田隼人〔正考〕為大目附、凡幼主享封、必

遣使莅監其國例也、於是二十二日、命公諭告遣御

使番京極兵部高主、御書院番青山七右衛門成親莅

監封國、亦幼故也、十一月五日、高橋縫殿〔繼〕種為

御家老、十二月二十八日、免大目附小笠原郷左〔給之〕門終終身百苞、

○六年丙子正月二十二日、祢寢孫左〔門〕為若年寄改

称式部、二十五日、招宴兩使於芝邸餞之也、有〔繼〕

邦公饋之杉盒〔組〕、四月五日兩使發行、公使留守

居・使番等偕導之國、途次寵待尤篤矣、五月二十

三日兩使至麿府、公使使番饋兩使太刀各一腰、

馬代各金一枚、二種各千匹、有邦公亦使馬廻饋

紗綾各三卷、二種各五百疋以勞之、六月十一日、

兩使臨府城、乃進膳羞〔三汁八菜〕、備中貴壽接伴、十六

日、先公小祥于福昌寺、兩使遣家老進香、十七日

謁南泉廟、此日佐土原侯久柄亦遣使、贈兩使太刀、

馬代等、七月三日巡抵谷山、十一日還于客館、八

月十二日、巡城南觀士街路、至南林寺洲崎、二十

五日訪周防第、九月三日訪筑後第、四日過妙谷寺、

十一日訪備中第、十五日訪出雲第、二十一日訪主

殿宅、二十六日渡海櫻島、十月九日訪主鈴宅、其

他圖書・縫殿等及福昌・南泉・南林・興國・淨光

諸利莫不訪問、皆招宴也、十六日、兩使辭府城、

既而發回籠送如初、十一月八日、御家老織部久

卒、十二月四日、樺山左京久智為御家老、菱刈孫

兵衛實(詮)為大目附、○七年丁丑十月朔日、桂太郎(久中)

兵衛為大目附、○八年戊寅四月十九日、公尚幼、

借松平越中守造朝、公獻 大家家重御太刀一

腰・白銀二十枚・縮緬十卷・御馬一匹、儲君

公家治御太刀一腰・白銀二十枚・御馬一疋、進見

二公於黒書院、時家臣九名亦各執贄陪謁見如例、

五月二十五日、大家賜 公內書、賀端午節後始

賜、六月十三日、公造朝謁 兩公於黒書院、

大家家重召 公於前、手加元服、賜御諱字、令叙

從四位下、任左近衛少將、乃改重豪、稱薩摩守、

獻 大家御太刀一腰・御刀備前一腰・巻物二十・

白銀三十枚・御馬一疋、儲君家治御太刀一腰・

御刀備前一腰・白銀三十枚・御馬一匹以拜恩、

大家亦親觴之、賜 公御看及寶刀以為賀如例、七

月四日短袖、二十三日、大家使人齎雲雀賜 公

於邸、所使鷹捉者也、受封後始賜焉、二十八日、川田伊

織國(福)為若年寄、島津權左(智)門久 為大目附、賜

名仲、十二月五日復賜 公鶴、亦鷹所捉者也、○

九年己卯三月二十一日、免島津(久睦力)李職上于政府、四

月十六日領增上寺鎮火事、六月二十一日、菱刈藤

馬實(詮)為御家老、島津小平太(久金)為若年寄、名越(時次)左源

太為大目附、七月十八日、義岡相馬久中賜名彈正、

九月十一日、招宴閣老、享封例也、二十八日粟刺

額髮、於是 公年十五矣、十一月十四日、大家

使閣老西尾忠尚召 公造朝、許娶徳川刑部卿宗尹

之女保姫君、旁族久柄為 公趨朝拜 命、十二月

二十三日結納一橋宮、○十年庚辰五月九日、命島

津若狹久暢上于政府、六月四日、河野八郎左工門

為 大目附、七月三日、鎌田藏人政^(芳) 為家老、九

月六日、免義岡彈正久中職悌旨也、此月 儲君

家治 拜將軍、○十一年辛巳正月十八日、 大家^{家治} 公

使使齋鶴賜 公於邸、亦鷹所捉也、二月朔日、命

島津備中貴備上于政府、令坐上席與聞国事、十八

日、 公饗閣老於芝邸、賀宣下也、四月十三日首

途芝邸、謁護摩所、將西故也、十六日、 大家使

秋元但馬守齋紗綾卅卷・黄金百枚來邸賜 公令還

國、 大御所^{家重} 公亦使松平右京大夫就賜物件、十

八日造 朝拜辭、 大家面命懇諭、賜 公寶刀一

腰・御馬一疋、十九日 公呈誓表、就井上河内守

以上之、二十日、致鎮火事、得代^{仙臺} 也、二十二

日發芝邸、御家老島津奎久^(辭力) 島津主鈴木久品、御側

御用人福山平太夫安都、表御用人赤松甚右衛門則

(正) 御近習役関山新左^(金陣) 門

行、御納戸奉行村上彦八^(籠村) 篠崎藏太左^(繁) 門

御使番本田六左衛門^(親次力) 四元庄藏^(龜安) 等從、

五月十一日至伏見邸、十二日、 公往訪諸司代及

近衛殿、十三日、殿下遣使 公自為對、此日召見

市人及桂女、十五日抵大坂邸、十八日又見市人、

十九日發船大坂、六月十九日始入出水、觀士踊躍、

二十日舍阿久根、觀市農踊、二十二日舍苗代川、

觀鶴龜舞、二十三日至府城、乃遣島津又七郎久^(芳)

如江戶献物件謝恩、七月二十七日、免樺山左京久

智・鎌田典膳政昌御家老職、皆允所請、特賜政昌

田祿百石令終身食、嘉多年勞也、八月四日、進島

津奎久峯席坐於島津圖書久亮上、以島津若狹久暢・

島津小平太久金為御家老、賜久金名改左中、五日、

御使番四本庄藏為御近習役、御側御小姓高橋七郎

右衛門為物頭、二十一日、召國頭按司等^{五十} 觀前

栽、而觀琉球踊、此日、命御記錄方添役山田喜三

右衛門有^(雄) 上于御近習番、九月九日、閣老奉 旨

檄 公驛致賜鷹所捉鶴、二十二日放鷹谷山、二十

三日、舟游洲崎射水离也、歸停駕於久品宅及垂水

第、二十七日、飫肥侯遣使來聘、此日放鷹伊敷、

暫憩于久暢別荘、還臨久峯宅、二十九日狩于吉野、

十月三日狩于櫻島、六日訪築地館嶺松君請饗焉、

此日御納戸奉行有川勇馬為江戶御留守居、篠崎藏

太左衛門為大坂御留守居、御小納戸長谷場伊角為

御納戸奉行、七日臨于武館、還過禰寢清香宅及垂

水第、九日復狩于吉野、二十三日復狩于吉野、二

十五日訪西田館、信解君饗也、二十六日、召國頭

按司等於大儀館、復觀琉璃踊、二十七日訪山下館、

妙心君饗也、二十八日復狩吉野、十一月朔日秋侯

遣使來聘、二日、郊行河添臨于貴備別莊、三日、

謁稻荷廟觀鏑流馬、四日、賜公族以下諸有司食觀

散樂焉、五日謁華尾廟、六日狩于荒平、七日、私

如柁城謁長年寺、此日末川七之進將親卒、乃貴備

庶子而 公母舅也、故居喪十日矣、二十日臨于櫻

島、二十二日還自櫻島、二十五日諸士獻食奏散樂

焉、二十六日復狩吉野、十二月十日、如如世田為

謁 日新廟也、十三日還、十九日、仁禮仲右三門

為御側御用人、是年 大家賜 公親翰、令領封國

如先例、二十一日 公拜受焉、此日延岡侯遣使來

聘、二十三日首途、謁諏訪臨于安養院、主僧獻食、

自祇園洲舟行還自築地、從隊如初陸行、二十九日、

吉利彦十郎將容卒、年十亦貴備庶子而 公母舅、

出為吉利左右衛門久置嗣子、故降喪五日矣、○十

二年壬午正月元旦至三日不受賀正、居喪故也、四

日散樂親舞羽衣、六日放鷹尾畔、九日狩于荒平、

十三日狩于吉野、十八日觀上土踊、二十二日狩于

吉野井手、出自寅剋、御家老島津久亮、御近習役

関山新左衛門金暉・四元庄藏(兼左)、御小納戸菱刈

軍太等服鎧、從者三十人許、其他如常、薄暮回駕、

二十三日廿一日雨故也、觀下土踊、二十五日觀上下町踊、

皆古例也、二十六日以袖判令於有司、二月四日發

府城、御家老島津左中久金・島津主鈴久品、御側

御用人福山平太夫安都・赤松甚右衛門則(正)、伊地

知新太夫季周、御近習役四元庄藏、御納戸奉行長

谷場伊角・村上彦八、御使番本田六左三門・三原

善兵衛等從、是月十五日江戶火、十六日延及芝邸、
(竹垣・雜糞雜室)
淨岸君避高輪邸、三月朔日、抵津和港津會報火難、

乃二日、遣村上彦八馳如江戶、哨守宮起居、又遣木脇賀太郎・鎌田六郎太夫等先急還國、六日公泊宮島、閤老承旨檄公哨火及邸、七日拜讀、又檄公令恣還國、九日拜之、乃皈自宮島、二十七日至府城、公不莅朝、從土朝服如首途、後命也、五月六日復發府城、自阿久根舟行、九日、島津求馬久(禊)為若年寄、七月十八日至芝邸、時淨岸君尚在高輪、故先謁君而後至邸、二十一日、大家使松平右近將監勞之、二十八日、命川田伊織國(福)以原職上于府城、前此給事有邦公於四駝館、公薨故請致職、至是有此命、八月十五日行朝覲禮、二十一日移徙芝邸、午尅出自西門入自表門、十月朔日、淨岸君自高輪邸還移芝邸、十一月朔日結納一橋、二十(長能)五日移徙新輿、十二月三日、大家使市橋大膳齋鶴來賜公、亦鷹所捉也、四日行婚姻禮、巳尅出輿一橋、午尅入自東門、松平(兼孝)主計頭為輿迎、松平大藏大輔為輿添焉、六日、大家及御臺君遣使來賀新輿、十八日、淨岸君臨于新輿、○十三年癸

未正月六日、召寶生大夫親受翁舞、七日、御家老島津求馬急病、自政府退卒、是月大家念邸罹火、假金二萬兩宜歲還納四千兩、允所請也、二月公患水痘、四月十三日首途、謁護摩所、此日、大家使松平右京大夫齋物件(米)賜公令還國、西丸亦使松平周防守賜公、十五日朝謁悉如例、二十八日發芝邸、御家老島津左久峯・島津左中久金、御側御用人福山平太夫安都・赤松甚右工門則(正)・伊地知新太夫季周、御近習役四元庄藏、御納戸奉行長谷場伊角・藤野休左工門、御使番三原善兵衛・伊集院四郎等從、此行島津久隣以十三人俸從還、五月十三日抵伏見邸、十五日抵大坂邸、十七日舟謁住吉、十八日發自大坂、六月四日入小倉路、此行豫就小倉・福岡・久留米・柳川・熊本之五侯請放鷹于途、以過列國皆聽之故或步行、十四日、抵出水尚行放鷹、乃使御目附令于途次遇御鷹於道趨、而避傍下馬脱笠宜以敬踞、二十一日至府城、二十三日臨于尾畔、此日、遷長谷場伊角於飯島地頭、以御小納戸上村藤

之丞為御納戶奉行、相良四郎兵衛為御船奉行、二十四日、謁先廟於淨光・福昌兩寺、二十五日、訪妙心・嶺松・信解三君於山下・築地・西田三館、二十七日放鷹谷山、七月六日、表御用人山岡齋宮為御側御用人、九日復放鷹于伊集院、構布屋于梅岳寺谷、十九日、公召島津實備於前、念其老益勞多務、免上政府賞賜腰刀、且許隨意狩獵郊野特恩也、二十日、舟如柁城、二十一日・二十二日、皆放鷹于旭原及本道原、二十三日還自柁城、二十八日、島津大藏久(道也)為若年寄、八月三日、令近寺士勿爭弓炮嫌貪勝也、二十七日、臨「舌」唐饌且催琉踊、九月十一日、賜御記錄奉行兒玉早之丞實門宅地一區、二十三日舟釣于磯、二十六日圖書久亮卒、十月朔日、玉川王子・豐見城王子獻 公盛膳、公親觴之、三日、召王子等於大磯館觀琉球踊、五日賜琉人食、十一日、川田伊織國福為御家老、十四日、臨于貴備河添別莊、二十五日訪西田館、信解君請也、此月築地新亭成、二十七日移徙、公臨焉、

十一月十八日、臨上射圃觀諸士射、十二月十八日臨今泉濱亭、二十三日、散樂親為井筒及天狗舞、年忘宴也、

○十四年(丙申)正月元日 公束帶謁于五社、公襲封始受賀正故也、二日規式、三日臨于外朝受賀、竣臨書院及座間皆如例、北鄉權五郎久口為年男、薄暮復臨外朝、所謂御松囃子也、二十七日、慈照夫人登柳營、謁 大家家治及御臺・儲君・萬壽君等賀正且也、恩賚有差、二月、先是 公將命 公秋以琉人朝于江戶、然有寒疾故、具疏請乘春暖、先已朝如琉人、追使家臣等偕候秋來朝、閤老許之、於是十三日 公先首途如例、舊臘 大家使閤老檄公驛致賜鶴、亦鷹所捉也、至是十五日、公迎外朝拜其賜、乃遣島津(黃澄)玄蕃如江戶謝恩、十八日放鷹谷山、十九日臨于尾畔、兩王子等趨召陪焉、此日罷名越(恒壽)左源太目附、有過失也、二十七日、宴嶺松君為催散樂親舞加茂、二十八日訪西田館餞也、三月九日謁華尾廟、二十一日、訪山下築地告別也、

二十二日發府城、此行亦途或放鷹、二十六日發出水、途謁嘉志久利、四月二十四日抵大坂邸、二十七日抵伏見邸、此月二十九日家老鎌田藏人卒、五月十三日至芝邸、二十二日、慈照夫人及悟姬君燕于御休息所、岡元可助侍奏瑤琴命也、六月十三日改元明和、七月朔日行朝觀禮如例、二日謁先廟於大圓寺、八月三日、大家使御使番齋雲雀來賜公於邸、亦鷹所擊也、公拜其賜、乃託松平本次郎謝恩、九月二十七日、公招有馬中務太輔・酒井備前守・上杉大炊頭・伊達遠江守於芝邸同奏散樂焉、十月五日、及南部大膳大夫・信濃守散樂于邸、是歲中山王尚穆使讀谷山王子・湧川親方為正副使、入貢江都賀 大家承統、八月二十三日、國老川田國福等監護發覺府命也、十月二十一日、樺山左京久智為國老、十一月九日琉使至芝邸、十三日、公轉任從四位上中將、又使池田筑後守賜廩米二仟苞先例也、十五日琉使獻 公盛膳、公親觴王子・親方、此日琉人奏樂及踊於大御書院、以

備 公覽、十八日、公賜琉人食於大御書院、亦觴王子等、且催囃子於表書院令以觀焉、十九日、私召王子等寓目外庭茶亭景物、二十一日、公以琉使朝謁、大家行聘賀禮、二十五日復以朝謁、奏樂備覽宴賚如例、十二月三日琉人復獻 公食、且為奏樂、四日、公試散樂召琉人觀焉、五日、復賜琉人食令見散樂、六日、淨岸君命催操於外庭茶亭^{馬場}、召琉人亦觀焉、九日、復召茶亭餞之也、十一日、使國福等監護發覺邸、是月二十二日、徳川宗尹卿薨于一橋第、慈照夫人居喪如令^{五十日、十三日}、○二年乙酉正月二日朝賀 大家、二十一日 大家賜鶴如例、二月四日琉使至覺府、十九日島津大藏賜稱靱負、二十五日、免家老島津山城久^(輝高) 職、允所請也、三月四日、招宴閣老松平右京大夫、西丸御附阿部伊豫守、若御年寄島居伊賀守等於芝邸^(正石)、賀儲君生也、六日、復招松平出羽守等十八^(宗位) 大御書院、賀儲君生也、四月五日、招酒井雅樂頭・有馬中務太輔・上杉大

炊頭・有馬上総介(頼實)・伊達遠江守・松平采女正等於芝邸同散樂焉、十三日、 大家使松平周防守康福齋物件來賜 公於邸令還之國、十五日朝謁拜恩、恩賚如例、二十一日、首途謁不動於護摩所、二十五日、招請 淨岸君及眞含君(術能・維忠)為奏散樂轉陞宴也、五月四日發芝邸、十九日抵伏見邸、二十日微行京及宇治、二十一日抵大坂邸、二十四日發邸、六月二十二日至府城、七月朔日、訪山下・西田・築地三館、還臨垂水邸、三日、謁大雄・玉龍・松峯之廟、五日臨築地亭觀華火、貴備・忠紀・貴澄三公子陪從、十五日、謁先廟於松峯・玉龍岡山、十九日復觀花火、二十一日、島津仲久健為御家老、桂織部久(中)為大御目附、関山新左衛門金暉・二階堂葎行且為御側御用人、二十五日、請招山下・西田・築地三君為散樂宴、任官至城故也、八月十九日、免國老島津鞞負職、賜廩米百苞、令終身食、允所請也、九月六日、免島津奎上於政府、自後朝班宜列國老上 命也、二十九日、河野八郎左工門通(古)

為若年寄、島津十太右工門久起為大御目附、十月九日通口改稱外記、久起後改大進、十一月二十六日夜如市來、為放鷹也、二十七日寅尅抵湊、卯尅唐船漂繫羽島、卯尅發港、往而觀之、及還市來、二十八日、發自市來舍于伊集院、二十九日丑尅發館、偃于横井、暮入尾畔、寅尅還府城、十二月三日、首途謁諏訪及祇園如例、四日試散樂、始于卯尅訖于翌卯尅、凡能二十番、狂言十番、二十五日狩于荒平、○三年丙戌正月二十三日發府城經大路、二十四日途觀金山、二十六日出于佐敷、二月二十二日、自兵庫微行、觀布引瀧詣摩耶山、二十三日抵大坂邸、二十四日召見市人等、二十五日、命竹田近江來線於書院許從士窺焉、二十六日召觀芝居、二十八日抵伏見邸、二十九日微行觀京、三月朔日復觀桃園至萬福寺、二日發邸、十九日抵芝邸、四月二十二日朝謁如例、八月二日、 大家使御使番安部平吉齋雲雀來賜 公於邸、亦鷹所捉也、二十五日、招松平安藝守・伊達遠江守・松平式部

太輔・伊井兵部太輔・松平内藏頭・松平大學頭於芝邸、同散樂焉、十月五日、徳川民部卿臨于芝邸、至甲、十一月五日、招林大學頭・深見新兵衛・島津又吉郎・橋隆庵・小川元達・吉田元長等於茶亭、設卓子小燕焉、相良可助長興・兒玉早之丞實門吹半笙彈瑤琴、資其輿命也、○四年丁亥正月元日、臨御座間謁廟於寺、三日、臨御座間及大御書院受賀正如例、十日謁増上寺及上野、十三日雨雪、始講散樂 公親舞翁、松山侯為小鼓焉、十五日造朝、三月十日降雹、重七分、前夜夫人流産、女子云、十八日首途、謁護摩所如例、四月三日、関山金暉承旨、使相良長興購四書五經・新刻蒙求・楚辭箋註・通俗忠儀水滸傳・小学・孝經大儀殆一百冊矣、十六日、大家使松平右近將監齋物件來賜、公於邸、令還之國、西丸亦使松平周防守同賜、公、十八日朝謁拜 恩、大家懇諭賜馬如例、二十一日發芝邸、是月三日、桂織部久中為國老、十三日、新納四郎久蓋為大目附、賜稱波門、五月七日、經

木曾路抵伏見邸、十日抵大坂邸、十三日發邸舟行、二十五日着船細島、六月六日、自國分着船築地至府城、乃使小松仙十郎清宗如江戶謝恩、十二日謁南泉府、十五日臨朝、二十三日、謁稻荷福迫・護摩所不動靈府表御看經所、七月十五日、謁淨光・福昌・惠燈三刹、二十七日、召伊地知新太夫季周・相良彌一兵衛長主・上村笑之丞行 竹下辰阿彌・白石幾阿弥・前田嘉仙・同氏順達・東郷典澤・園田元的・上原玄與・林玄達・圖師長乙・脇田曾中等所嘗嗜者俱奏散樂、時皆晚齡、前世所無 公愀然矣、九月六日如櫻島、十四日回棹、閏月朔日、舟如兒水、於綾君陸行、皆為温泉也、十月二日還自兒水、十一月三日於綾君觀鎬流馬、二十四日 公及綾君臨垂水邸、十二月四日、臨島津鉄熊宅聽詰罪人、六日訪西田館、十七日謁大雄山、還臨築地亭戲為燕飲、以島津貴備・仁禮仲右衛門・二階堂部・宮之原甚五太夫・新納次郎・川上瀧衛為賓客、使鎌田愛太夫・田中七左衛門及侍醫服布衣為之給

仕、又使島津文蕃・入来院大和為御庖丁人頭、使町田監物・山岡齋宮(久遠)為御庖丁人、其他充職、各誦盛衰記五章、丑尅還城、十八日訪築地館、綾君亦從嶺松君為餞也、十九日首途、謁諏訪臨安養院、又謁祇園、舟回築地如例、二十一日訪山下館、妙心君餞也、二十四日散樂于磯、二十五日、不圖臨于高橋此面宅、○五年戊子正月元日不受賀正、既首途也、臨御坐間、見公族及三官、謁外庭稻荷、十三日謁護摩所・福迫稻荷、二十日謁大雄・松峯・玉龍、驛致賜鷹所捉鶴、十八日 公拜其賜、二月六日發府城、御家老川田伊織國福・島津仲久健、御側御用人山岡齋宮久(遠)・伊地知新太夫季周・関山新左衛門・二階堂部、御納戸奉行上村笑之丞・藤野休左衛門良記、御使番三原善兵衛・喜入休右衛門等從此行、自大里海行取坂越公駕住吉丸、其他從士乘新田丸、音羽丸、春日丸、宮内丸、小早等二十四艘及水傳馬、或鯨舟三艘使舟十艘都計三十九艘、御船奉行佐多休左衛門所掌也。三月二日抵大坂邸、六日抵伏見邸、二十九日至芝邸、四月朔日、大家使人來于守宮、賀朝觀也、二日、

遍訪閣老各第、還謁不動於護摩所、七日、命関山金暉使兒玉主左衛門利容購千字文・唐詩選・唐詩礎・明詩礎・通商考・字林集、相良彌千母長興・本田七右衛門親存購草菴・蒙求・和歌類題・古今集・濱真砂・天狗藝術論・田舎莊子、皆備 親覽也、八日、近衛公遣諸大夫來賀新正、十三日、大家使閣老就第勞之、十五日行朝觀禮、十六日謁大圓寺、二十三日謁五社於高輪、二十四日謁増上寺、皆告至也、二十九日訪一橋第、六月朔日、退自朝訪酒井雅樂頭第、時近侍臣高崎崎納右工門(衍之)・有川勇四郎・伊東得之進・山田彦八明遠・林文達・相良弥千母・柏百幾亦陪席、應召也、七月十九日、大家遣使齋雲雀來賜(衍之) 公於邸、乃鷹所捉也、十五日、免御家老高橋此面種壽職、忤旨故也、十二月十六日、大家使御使番興津左京齋鶴來賜公於邸、時 公少疾、託相良近江守迎拜之、亦鷹所捉也、是年冬、命新作福昌寺、至明年秋告成、○六年己丑正月元旦、謁御庭三社訪守宮、二日東帶造朝

賀正、三日臨御坐間、御家老手獻太刀、公親觴之、臨大書院、大野多宮久(憲)手獻太刀、又新納次郎四郎久(兼)手獻太刀、皆親觴之、其他諸地頭皆如例、四月二十七日賜告如例、二十八日造朝拜恩、賜馬如例、頃日 公有小疾、請候八月以發行 大閣許之、八月十三日守宮餞 公、十九日夫人亦餞、二十五日發芝邸、九月十三日、国老菱刈藤馬實詮卒于江戸、下旬彗星見東、至十月十月十七日至府城、自出水十九日、慈照夫人訃至自江戸、遺讓使公居喪旬、二十二日令弓炮勿貪勝、二十五日、召備前・玄蕃・柰及御三役於牡丹間、口親諭令、又召與頭・番頭於御座間、亦親諭令、此日御使番三原善兵衛為御納戸奉行、御小納戸鎌田愛太夫為御納戸奉行、伊東間(マ)為物頭、御目附伊集院彌平左(明遠)門俊 為御使番、御記錄稽古山田司(符之)為御小納戸、又使三雲之兵衛奉御本尊授御看經山伏、晦日、謁福昌・惠燈・淨光三寺、弔慈照夫人、此日、使赤松甚右エ門令於近侍、凡 公告至不論江鹿宜服不

洗物 命也、本月下旬、彗星復見西、至十一月十一月三日訪山下・築地、西田未接見也、六日如柅城泊于櫻島、横山別館、七日、至柅城謁 皇妣主於長年寺、實廿五回忌也、此日帰船、万歳丸、御近習役関山新左エ門・御小納戸山田司・二階堂新十郎等從、前此大家命閤老檄 公△十二日謁南泉廟、十四日觀諸役署、十五日種子島雲治為物頭、二十一日召諸有司令觀散樂焉、十二月朔日、喜入主馬久福・小松帶刀清香石為御家老、新納波門為若御年寄、山岡齋宮職祿二・島津矢柄久(兼)・祿三為大御目附、十六日謁玉龍・松峯二廟、十七日、賜御側御小姓相良彌千母四書五經各一部、二十七日首途、謁諏訪・祇園如例、二十八日、謁上稻荷・福迫諏訪・護摩所・稻荷靈府・表御看經所、召大御目附以上令觀前栽、二十九日、謁大雄宮及南泉廟、○七年庚寅正月元旦、不受朝賀、既首途也、三日謁先廟於玉松兩山、四日福引、六日始催散樂、召諸有司令觀焉、十日、前此使御小姓預參御道具事、

易服、服紗物、而訪佐竹侯還、四日、大家使老麻上下女來于守宮、賀端午節、公服熨斗、五日造兩營賀節、服染帷子、還謁守宮、易半、十日、公夜召赤松甚長御上下、右衛門則正・二階堂蔀行且・關山軍兵衛金暉・島津登久連・新納次郎四郎久儔・兒玉早之丞實門・柏百鬼伯眞・丸目元養道貞・相良彌千母長與闢辨香焉、十一日、大家命 公許再娶甘露寺氏為夫人、乃松前主馬齋策來邸、公迎諸御座間而拜命、水色帷子、允所請也、二十六日、命御小納戶、凡正五九月值正覺君・慈照君諱辰宜遣一員、齋活華一桶及官香撰進之、於大圓寺著為例矣、六月六日、前此甘露寺君賜於綾君改多千姬君、至是令以稱之、十三日訪一橋宮、熨斗縮御帷、此觀始也、十七日夫人至邸、公服熨斗縮、芭蕉御上下、二十一日結納婚禮于御中輿、公服花色御帷子、嘉珍長御上下、而御近習役以上亦皆準之、但半上下、其他不必然云、竣謁守宮、易半、時甘露寺君使雜掌藤木玄蕃來聘于邸、亦花色御帷子、召見之表御書院、二十五日、嘉珍半御上下、公及夫人獻守宮饌為奏歡樂、新婚故也、閏六月、閏月七日、

謁正覺夫人主於御座間、服芭蕉上下、因令定式、凡每月值吉慶淨國公、雜恩有邦公、宗德慈徳公、重年圓徳公、智光夫人 正覺夫人諱辰親謁進香、如 慈照夫人及照雲君惟值正辰親進、其他期此因進皆芭蕉、著為例矣、十一日、臨于赤松則正・島津久連・島津久金客舍、十八日、大家使老女來于守宮賀新婚、公迎拜之、熨斗縮御帷、子麻御上下、二十八日、擢赤松甚右衛門則正・二階堂蔀行且陞大御目附格、賜職祿各二百斛、皆進其爵世列寄合、奉職如故、特恩也、七月四日、大家使人賜 公雲雀、時 公少疾、招松平隱岐守撰迎拜恩、此月、改御茶道頭曰御同朋頭命也、九月二十六日、謁 慈照夫人主於大圓寺、小祥忌也、凡 先君法事 公謁服長御上下為例矣、而今服御熨斗目半御上下、以夫人故也、十月二十日、命國老樺山左京・島津左中領御側事令交聽之、先是江戶西藩國老輪番領御側事、至是革焉、十二月十六日謁大圓寺、服御熨斗、目御半切、先是近侍先番服熨斗目、至是改不洗物 命也、十八日、大家遣使賜

鷹所擊鶴如例、公服 同上、晦日除夜、熨斗目 長御襦、

○八年辛卯二月二十五日、島津采女為若御年寄、新

納次郎四郎久儔為大御目附賜稱內藏、四月十六日、

大家使松平周防守齋物件來賜、公於邸、令還之國、

西丸亦使阿部豐後守賜物如例、十九日、造朝拜恩、

大家懇諭、賜馬如例、公服 同上、二十一日、閣老承旨、

使人率馬來授之於邸、公迎玄闕拜而敬對、二十

六日定服章制、凡諸公子惟限、世子用十字章、至

如翁主宜亦用之、其他公子宜皆用桐若牡丹、二十

七日、國老樺山左京為、公首途于邸、命也、初

公嘗聞、家治公善畫、欲得眞筆而為寶久矣、家

治公聞之、乃寫二幅以傳一橋、於是二十九日、民

部卿使田沼能登守齋來賜、公於邸、公乃迎拜諸

御座間、又趨一橋謝恩、一說此時使老女松島齋傳一橋以 致賜公、而其太太公望、其一

傳說圖云、但為六月 十五日事疑月日誤也、五月三日、遍訪閣老謝賜画、且

訪三家告別也、二十八日發芝邸、六月十五日坐伏

見邸、二十一日抵大坂邸、是月八日、信解君卒于

西田館、至是二十二日訃告達邸、乃遣中村早太先

往進香、二十七日發自大坂、七月朔日至坂越、乃

駕御船海行如登、八日至于大里、此行途如長崎、

十六日抵長崎邸、十七日、擢今村政十郎為無役中

通、十八日、訪奉行所候、大家起居也、公服熨斗縹 御帷子麻御

上下、隨四 本御道具、十九日、臨林市兵衛宅觀御陣所也、此日

召見市人、二十日、過福濟寺及聖王寺、竝四本御羽 具、但御羽

織襦二十一日、臨鉅鹿太左衛門宅觀前栽、又臨福

田十郎右衛門宅、二十二日臨唐人館、二十四日謁

于聖堂、臨向井齋宮宅、聖堂 預也、又過興福寺及宗福

寺、二十五日觀出島館、駕小鷹丸、自行由丸御橋

乘紅毛船、少間觀焉、二十七日臨平野善次右衛門

茶亭、亦四本 御道具、二十八日臨今村源右衛門茶亭上、紅

毛人趨召焉、八月九日、駕船於大波戶出帆長崎、

居之凡 廿八日、十四日着于大島、在阿 久根、十五日、抵阿久根

復狩大島、十八日至府城、乃使末川織衛久中如江

戶謝恩、二十一日、山岡齋宮久容為御家老、九月

二十一日、免家老桂織部久中職、因有疾也、尚賜

命曰、齡未老憊埃癒復焉、十月十日、謁、淨國公

主於松峯山、服長、二十五年諱辰也、十三日臨臨(符)于尾畔、十五日還、十一月、先是御近習役并叙御使番下、至是進格、置御近習役次席、給職祿九十石命、○九年壬辰正月、前此 大家命閏老嫩 公、驛致賜鷹所捉鶴、至是二十二日達拜府城、二十五日發府城、三月廿五日至芝邸、四月二十三日領增上寺鎮火事、七月十九日、大家遣使賜 公雲雀、亦鷹所捉也、八月二十二日、命島津太郎次郎久微 準 公令弟、為柁城後嗣改稱兵庫、十一月十三日、種子島十郎太夫為御用人、上村笑之丞為町奉行、二十五日改元安永京都也、十二月、免鎮火事代久留米侯、以守宮疾也、五日 淨岸君薨于守宮、二十日發棺江戸、 大家使御留守居番織田圖書護送(信方)來國、於是撤守宮、給事職悉廢矣、○二年癸巳二月十九日入福昌寺、二十四日葬于寺內、是月、創建聖廟於府下始起功焉、三月朔日、令賀(松力)宜飾繁焉、四日圖書發還、二十二日、以山本傳藏常行為御記錄方添役、児玉早之丞實門為御使番、行御

記錄奉事如故、初守宮之疾也、 公盡孝敬、 大家嘉之、二十七日、使老女松島齋御羽織來賜 公於邸、令服以行、閏月二十五日、 公至自江戸、乃遣島津助之丞如江戸謝恩、五月六日訪山下・筑(樂)地兩館、七日謁南泉・福昌兩寺、十五日、命備前貴備召于前、亦必佩脇刀、特寵異也、此日、命國老島津久金・山岡久容令務變俗嚮繁華、二十一日臨兵庫第、此月、林大学頭信言為府學記、 公使児玉早之丞實門請之故也、七月始置道奉行、隸表方列 物奉 行下、八月二日如櫻島、八日回舟、十三日臨久連宅、十四日臨久微宅、二十一日、臨于礮館召中城王子等八十餘人、二十四日臨伊勢兵部宅、是月聖堂落成、二十九日、奠先聖肖及配位像、始獻釋菜、公臨講堂、半御上下、親觀其禮、 竣 公親束帶拜謁聖廟、 公族以下諸有司亦各拜謁、是月、副史知學事山本正誼為講堂記、九月朔日 公復臨聖堂、二日復臨、十月 命創建醫學院、有司起功、十一月十八日、中城王子獻 公盛膳、奏琉唐樂以備 英

覽、公服紗
麻半切、二十一日、讀谷山王子亦獻盛膳奏樂

如前、二十七日賜王子等食、令觀散樂焉、十二月

五日、謁 淨岸君主於福昌寺、小祥忌也、又謁淨

光廟、歲杪也、七日臨林玄達宅、八日復臨林玄長

宅、九日、賜與聖堂事國老島津左中及島津筑後・

島津因幡・島津左内等時服有差、十三日 公臨琉

館、時曰
假屋、是年、命建下馬碑於城下、而置立番焉、

○安永三年甲午二月朔日、公族兵庫久徵撰位首途、

二日、公謁玉松二山賀正、且告別也、十八日発

府城、四月朔日至芝邸、十八日領増上寺鎮火事、

是年撤芝邸護摩所、○四年乙未、公患疱瘡、此

年始遣目附、二年交承上於三都、四月二十一日發

芝邸、六月四日至府城、十六日、謁玉松二山告至

也、十八日訪兩館山下、
築地、二十日謁南泉廟、二十一

日臨垂水第、二十二日臨于尾畔、二十四日臨柁城

第、七月十五日謁玉松兩廟、二十七日免御家老河

野外記職、賜粟米百苞令終身食之、二十八日赤松

造酒則正為御家老、二十九日免御家老川田伊織國

福職、賜祿百石令終身食焉、八月六日放鷹于伊集

院、九日・十五日放鷹伊敷、十八日臨山間久遊
市正宅、二

十九日臨兵庫茶亭、十一月十三日、臨演武館觀大

追物、初自恤畜令惟講書傳、廢技久矣、於是 公

命復興遂致可觀、實中興也、

2

『今日者此処まで編述仕掛申時分御使命御坐候ニ付、

先此儘御移りも不被成管候へ共、如此引くびり、極

蜜奉入 高覽候、尤拔書片手ニ作候文ニ而、不通之

事耳、其意可删除事茂御坐候、旁左様思召可被下候

旨、宜被仰上可被下候、以上、

西十月廿六日

久仰雅君

執事

返々御秘言奉頼候、

」

『日記之儘書載候へハ餘り實録過ぎ、御不徳ニ成候事
共有之申候而者、別而非本意ニ成、左様之処ハ削可

麟趾野艸

3 『去ル七日為被遣御一冊、又ハ私方へ写留候物共取合、

如此書綴置候、大信公御側勤之人日記共借入置候のも御坐候間、書抜片手此向ニ紙ハ少ク、外ニ作文仕、やうく安永四年迄三拾枚計書掛候へとも、何分ニも奉行達ニ訖与被仰付、伺之上編集被仕候もの、由御坐候得者、如此任筆申事の千萬恐多、他見極々御心遣候間、先此分極内分差上申候ニ付、返々御秘覽、早々御返可被下旨、宜被仰上可被下候、尤大信公御代ニハ、久品君・久儔君杯も御見得候事も御坐候得共、旁恐多、且ハ未半篇も不相成難差上、此冊御推讀も難被遊管とハ乍存、此中より御待遠被思召候半と、甚鹿艸其儘差上候旨、萬々宜御披露奉頼候、他見ハ幾重ニも御勘弁頼上候旨奉頼候、以上、

十月廿六日

季安邦

久仰君

御執事衆

(本文書ハ「隣野卿」中表紙ニ記サル)

女子

悟姬

○寶曆十三年癸未十月十三日生于芝邸、母徳川刑

部卿贈中納言宗尹吉宗公之三男女名曰保姫、母猪飼氏、名曰千賀、五郎左工門之女

和六年己丑九月二十六日卒于江戸、葬大圓寺、法名慈照院殿圓應靈珠大姉、七年庚寅三月十日、歸埋遺毛于福昌寺

大家及御臺君使人齎物件 賜 公及 浄岸君、

以慶賀之、

○明和元年甲申六月二十七日、公及夫人進 浄

岸君盛膳、慶誕故也、七月二十七日申天亡、法

名照雲院殿桂巖慧月大禪童女、安主于 惠燈院、

女子

敬姫

豊前中津侯(藩力)子
奥平大膳大夫(昌男) 縁女

○明和七年庚寅八月二十一日生于府城、母

(市田書)

内貞行女

名於登世、安永五年八月二十二日以茂姫君許嫁、故賜千六百石、令稱御内證様、天明三年五月令準御前様、寛政元年八月六日令称御部屋様、享和元年辛酉十月晦日卒于高輪邸、葬大圓寺、法名慈光院殿佛心惠證大姉、安

牌于浄

光明寺、○八年辛卯十一月十八日謁福ヶ迫、九年壬辰二月十三日首途、二十一日發府城、五月

十七日至芝邸、六月 公命夫人甘露寺氏為養女、故

改敬姫、安永五年丙申十一月二十七日許嫁奥平

九八郎昌男大膳太夫、○天明六年丙午八月奥平昌男

卒、未及結納、俱以報官、八年戊申四月二十日

卒于芝邸、年十九、葬大圓寺、法名浄信院殿本

因即妙大姉、十月十二日、歸埋遺毛于福昌寺、

安主于惠燈院、附 銀二十枚供弔祭事、

女子

於篤

茂姫

大樹家齊公御臺所

○安永二年癸巳六月十七日生于府城、母市田氏、

○三年甲午三月朔日、發府城如江戸、○五年丙申

七月十九日、大家追念浄岸君所嘗請、命 公許

嫁徳川豊千代君、即家齊公、一橋治濟卿 長子、而慈照夫人甥也、乃使使來

一橋賜名茂姬、且賜日傘・袴、時生四歲矣、

○天明元年辛丑五月九日、豐千代君立儲君入西丸、

十九日、茂姬亦入一橋宮、自是稱御緣女様、九月二十三

日自一橋入柳營、又移西丸、官女花川從、○七

年丁未十一月十五日、閣老水野出羽守承（忠友）旨傳

公、近衛經熙公養茂姬為所子、賜名躰子、稱茂

姬君、酉二月四日婚為、大樹家齊公御臺所、八

年戌申八月、近衛公使佐竹紀伊守來賀結納、○

寬政元年己酉二月四日婚禮、二十一日、復使齋

藤若狹守來賀婚禮、九年丁巳三月二日叙從三位、

○文政五年壬午三月 日叙從二位、

太公

初名忠堯 後名齊宣 小字虎壽丸 稱又三郎

又稱豊後守 又稱薩摩守 轉任從四位下侍從

左近衛少將 從四位上中將 後改修理大夫

又號溪山、

○安永二年癸巳十二月六日生于芝邸、母堤前中納

言代長女名於千萬、來仕 淨岸君於守宮、君逝去後遂得

女幸生虎壽君、故稱於千萬殿、五年丙申正月廿二

日移居本丸大奧、寬政元年己酉八月六日令稱御内證様、寬政五年正月年饋堤前宰相銀百枚終身賑乏命也、文化八年辛未六月十三日卒于江戸、葬大圓寺、法名春光院殿心月清涼大姉、安主于福昌寺、

○三年甲午年甫二矣、五月二十九日告以六歲、

以明和六年己丑八月六日為生、且慈照夫人之在世也、欲養為子故併告之也、○四年乙未三月

朔日謁芝神明宮、所謂宮詣也、十一月二十日齋

髮、五年丙申十一月二十七日、許娶筑後久留米有馬上総介

頼貴女、名於恒、由是稱縁女、寬政元年九月廿六日

卒、○六年丁酉十一月十五日着袴、皆開慶宴、

○天明二年壬寅二月朔日臨御坐間、受國老以下

拜、九月三日痘瘡、十二月六日、公以親翰賜

三萬斛、世子料也、○四年甲辰九月二十七日、

公召世子於大御書院手親加冠、令島津伊賀久金

理髮、名曰忠堯、稱又三郎、太祖例也、十二

月二十七日始服甲冑、前此既冠、至是同催慶宴、

○六年丙午七月二十八日世子造朝、獻 家治公

御太刀一腰・縮緬十卷・白銀二十枚・御馬黒栗毛

隅州末一疋、儲君 家齊公御太刀一腰・白銀黒栗毛

吉敷二十枚・御馬黒栗毛、薩一疋、始見 二公於白書

院、十二月七日、家齊公召世子於黒書院手親加冠、賜御諱字取名齊宣、稱薩摩守、叙從四位下、任侍從、又親觴之賜寶刀一文一腰、世子亦獻御太刀一腰・御刀備前一腰・縮緬十卷・白銀三十枚・御馬脊裸一疋以拜恩、十三日、大家使閻老松平周防守康福召命世子、凡朝謁宜五節句就白書院、如月次就黒書院、皆坐 公次以行其禮、且朔望朝亦就休息所於大廊下之下、於是十五日、始造朝行禮如命、○七年丁未正月十八日 称侍從様、二十九日世子享封、 公告老也、二月七日、口宣旨自京達 公受焉、十五日 公造朝、獻御太刀一腰・御刀澁州一腰・縮緬二十卷・白銀百枚・御馬脊裸二疋、謁 大家家齊拜襲封恩、且家臣九名、島津兵庫久微・島津伊賀久金・市田勘解由盛常・島津登久 献卷物各五・御馬代銀、大島休左工門久阜・松崎次左工門貞儻・岸喜右工門章彬・郡山權藏長矩・谷村孫右工門(マ) 献卷物各三・御馬代銀、陪謁 大家、

恩寶如例、十九日 公始短袖、三月十八日任左近衛少将位階如故、四月朔日 公朝謝恩、二十二日、造朝慶賀 大家宣下、松平周防守導 公着坐於白書院右、 大家出御、尾張宰相(宗睦)・紀伊中將(重倫)進謁、 公繼謁就坐行礼退、二十五日 大家散樂、公亦朝着坐於三家次令觀之、 大家出御大廣間三家謁、竣 公繼此謁、賜宴盃于菊班、周防守出曰、 御臺君所觴、 公拜飲之、進又謁謝宴寶、二十九日造朝就櫻班拜恩、五月三日、朝謁 大家於御座間、慶賀短袖、口命懇到、五日、大家始謁 公内書、二十三日、使水野壹岐守齋了日向縮約二十卷、来邸賜 公、以宣下竣也、六月六日、口宣旨自京達、 公受焉、二十五賜内書、端午賀也、丁未七月二十八日、閻老奉書命 公領增上寺鎮火事、十二月、 大家念近年有疏使事、特免鎮火事、代細川越(齊慈)中守也、

○八年戊申正月二日 公束帶朝、着坐于白書院、候三家竣自献太刀以賀歲且着坐、乃賜御盃及時

服如老公時、二十一日稟除額髮、晦日皇城火、

二月二十二日、(定弘)大家使竹中主水齋鶴來邸賜

公、乃所使鷹捉者也、三月十九日、大家親翰

賜 公領國如先例、所謂御判物也、七月二十一日、復

使川崎縫殿齋雲雀(川勝廣長力)八四來邸賜 公、亦所使鷹捉

者也、○寛政元年己酉二月二十九日、〔日改元寛政〕大家使

御使番小笠原主膳、(長知)御書院與土屋忠次郎小笠原忠次郎組、

竹田吉十郎西丸御書院番、島津式部少輔組、此日発江戸如西國、

六月二十日至城下、二十一日如喜入、小笠原主

膳卒于喜入、四月、前此 公凡朝五節句・八朔

就白書院、如朔望等就黒書院以行禮命也、至是

十五日 公朝禮竣、乃列相奉 旨、使松平伊豆

守信明命 公、自今後宜着坐其席、以行拜禮、

二十一日、大家使鳥居丹波守齋物件來賜 公

之國如例、二十八日發邸、閏六月朔日至府城、

乃遣北郷作左衛門久珉如江戸謝恩、八月六日、

閩老承 旨驛致傳 公鮭十尺、九月三日 公拜

其賜、始就封故也、十月九日如市來温泉、二十

一日反自温泉、十二月朔日如田布施、謁日新寺

觀郷士踊、十六日、御臺君使原田半兵衛齋于

鯛一筐來邸賜 公、賀歲抄也、○二年庚戌二月

二十一日觀上武士踊躍于下馬、二十五日復觀下

武士踊躍、二十七日又觀上下市人踊躍、二十八

日觀犬追物、皆佳例也、三月三日、大家念

公始就封、驛送賜 公鶴、亦所使鷹捉者也、三

月十八日如市來、四月朔日觀諸役座、是歲、中

山王尚穆使宜野灣王子入貢江戸、賀 家齊公承

大統、於是八月、王子既來、三朝謁 公於府

城、四日復朝、六日上食、十五日、公以琉使

首途府城、鉦鼓儀仗以扈從、十七日琉使謁南泉

廟、二十二日召賜宴樂、九月六日 公發府城、

琉使扈從如首途時、自向田 公如陸路、琉使舟

行、會赤間關為例、此行 公命定期會于大坂、

九月二十一日、許娶佐竹右京大夫義教出羽久保田

八百妹幸姬、十一月二十一日、公以琉使至芝

邸、(乘完)大家遣松平和泉守就邸勞之、二十五日、

行朝觀禮、二十七日、大家使松平伊豆守信明進 公官位、叙從四位上、任左近衛中將、另使山田肥後守賜廩米二千俵、十二月朔日、公造朝、拜轉陞恩、二日以琉使朝謁、大家行聘賀禮、五日復以朝謁、令奏方樂宴賀如例、既而遣還、十五日 公朝謁、大家於黒書院（縁松平石和）京亮贊之、而 公坐闕内方、因閣老拜如前命、二十三日、大家内書賜 公時服三十・鯛一匣、賀歲抄也、○三年辛亥二月二十七日、結納佐竹氏行婚姻礼、三月九日、口宣宣旨自京達 公受焉、二十一日、久留島帶刀為_ニ公造朝、献物件謝婚姻恩、四月十五日、使戸田采女正齋卷物三十・白銀百枚來賜 公之國、十八日造朝、拜辭 大家口命賜馬如例、五月一日發邸、六月二十五日至府城、十一月、大家念率琉人勞、特命 公、宜明年述職於七月 特恩也、此月九日如国分謁正宮、十二月十四日、如加久藤放鷹、歷柁城謁長年寺、二十七日反自柁城、○四年壬

「四一」

子二月八日如入來温泉、三月九日還自入來、四月二十一日首途、五月二十八日發府城、經歷木曾（路）、八月朔日至芝邸、十二日、大家使松平和泉守就邸勞之、十五日行朝觀禮、十一月、前此新作 皇城、公上請輸金二十萬兩、（年輪五年兩凡四年終、以助工料、至是十一月、大家賜 公御刀一腰（青江恒次）、御時服五十、賞其功也、又賜預事家老島津伊賀久金・菱刈大炊降邑銀各五十枚・時服各六、側用人矢野男吏清香・岩下佐次右工門方恭銀各三十枚・時服各三、側用人面高善右工門俊・北郷八右工門・本城源七郎輝承・伊集院弥平左工門俊村・橋口与三次銀各二十枚・時服各三、亦嘉其勞也、○五年癸丑正月五日、大家使松平伊豆守信明命 公、若菜節亦宜朝賀、乃徧訪閣老宅拜恩、七日朝賀如例、四月二十三日、使本多彈正大弼來賜 公告恩賚如例、儲君所賜亦如之、二十五日拜辭、賜馬恩諭如例、五月四日發邸、國老菱刈大炊降邑從、六月二十

〔七〕
五日至府城、乃遣川田伊織往謝恩、十月朔日如

揖宿温泉、經過山川・穎娃・知覽・田布施至加

世田、十一月謁日新寺、五日觀郷土踊躍、又歷

吉利・永吉、狩于日置・郡山、二十二日反自郡

山、

○六年甲寅正月二十一日首途府城、二月四日發行、

三月廿七日至芝邸、四月領上野鎮火事、○文化

元年甲子九月十三日改称薩摩守、○六年己巳六

月十七日、請命傳事于 世子齊興 自告老也、十

八日改修理大夫、七月九日、有馬肥前守一純為

大公造朝、獻御太刀一腰・御馬代 黃金十兩・縮緬十

卷、見 大家公齊 拜致仕也、○十四年丁丑十二

月九日總髮改號溪山、

女子

於厚

○安永五年丙申三月十五日生于芝邸、母市田氏、

○七年戊戌六月十三日夭亡、法名翠黛院殿松屋

惠吟大禪童女、安主于惠燈院、

女子

於克

○安永五年丙申十月十日生于府城、母堤氏、

○七年戊戌五月三日夭亡、法名蓮心院殿清質妙香

大禪童女、安牌同上、

女子

於陽 牧姬

○安永七年戊戌正月十四日生于芝邸、母市田氏、

○天明四年甲辰七月二十六日夭亡芝邸、法名芙蓉

院殿牧憲智玉大禪童女、十月十四日、歸埋遺毛于福昌安主於惠燈院、

女子

明姬 雅姬 島津淡路守忠持夫人

○安永三年甲午十二月二十七日生于麿府、父島津

兵庫久徵、母島津采女久芳女、天明元年辛丑閏

五月、大信公養為己子、十五日納府城、二十

八日、令于国称明姬様、七年八月二十一日首途、

九月三日發府城、十一月三日至江戸、八年戊申

二月廿一日、適三田邸得命也、三月十三日帰(母方)

寛政元年己酉六月二十七日結納婚姻、

○文化九年壬申正月十一日文政四年四月命以八日為讞辰、卒、法名

英祥院殿香譽清薫履操大姉、

二男
昌高

富之進 九八郎 大膳大夫 從五位下 從四

位下 侍從 左衛門尉

○天明元年辛丑十一月四日生于芝邸、母市田氏、

實鈴木彌藤次藤賢女、松平大膳大夫治親私乞子之、名富之進、

因是私冒毛利氏、

○六年丙午三月二十八日、告大家以二男、置御抱

守、八月二日昌男疾病、仰請于官有庶女在乞富

公子以妻之、而三日昌男卒、四日、大家命公

子服昌男喪忌五十日服十三日、於是此日、入潮留邸居喪

如令、九月二十日、遂命為奧平大膳大夫昌男後

嗣、令娶其女、有所請故也、○寛政三年辛亥、

改稱九八郎、

○六年甲寅十二月十六日叙從五位下、任大膳大夫、

○文化七年庚午十二月十六日叙從四位下、

○十四年丁丑三月十七日為溜詰格、四月六日任侍

從、九月朔日為溜詰、文政八年乙酉五月、告老

傳事於男昌暢大膳大夫也、

男子

○天明二年壬寅三月十八日生于府城、母堤氏、二

十三日夭亡、法名青林院殿幻質靈苗大禪童子、

四年十月十四日、婦埋遺毛于福昌寺、安主于惠燈院、

三男
忠厚

初名久邦 雄五郎 因幡 安藝 市正 老号

山松

○天明二年壬寅五月十九日生于薩府、母島津式部

少輔久般女實島津兵庫久微之男、公為己子以告大家云、七年丁未六月九日、

令于國中為己所生、七月九日、置御抱守御小姓

令給事之、十三日告朝三男、八年申二月十二日、

入橋本阿波守門、三月朔日、入村松四郎兵衛門

學馬術、四月九日、入柳生但馬守門、

○寛政五年正月六日命剃前髮、八月十六日未尅以

後覽諸御役坐、十一年己未九月六日、出為島津
因幡忠温後嗣、

龜五郎

○天明四年甲辰二月二十八日生于芝邸、母石井新

六正純龜并能登、稱於豐方、又改於房、守矩貞臣、女方、又改於富貴方、

○此年七月二十九日夭亡、法名香樹院殿秋露幻清

大禪童子(マツ)、安主于惠燈院、

感之介カシ

○天明五年乙巳八月十七日生于芝邸、母同上、

○六年丙午四月十一日夭亡、法名義光院殿天真祐

明大禪童子、八月二日、婦埋遺毛、于福昌寺、安主同上、

四男
久暉

初名一純 又改久亮アサキ、後為上名時之丞 諸

之丞 藏人 肥前守 左近

○寛政元年己酉六月十九日生於芝邸、母石井氏

於富貴方、二年十月六日告朝四男、十一月六

日齋髮謁神明、

○五年癸丑十一月十五日着袴、

○享和三年癸亥 月 日改諸之丞、

○文化元年甲子四月十日、出為有馬左兵衛佐馨シ

純越前丸岡、五萬石嗣子娶其女、得所請也、二十七日

入有馬邸、改稱藏人、十二月十六日叙諸大夫

為肥前守、○文政二年己卯二月十七日去有馬

氏、一純患疳請以辭回得命故也、二十二日改

稱左近、名曰久亮、○五年壬午改名久呢、○

天保五年甲午五月二十三日命以二十六日為諱辰申冠卒于

田浦、葬福昌寺、法諡本光院殿瑞巖永祥大居士、

安主于惠燈院、附白銀二十枚於寺僧、永供祭事、而每諱辰、公及大公世子使當番頭各進香、且、公別遣

御小納戸進官香一把、活花半桶著為例云、

善次郎

○文政六年癸未正月十一日、生于高輪邸、母尾張屋新藏女、

太守公養為己子、

○此年二月十一日夭亡、法名寶珠院殿浮光幻影大

禪童子、

為次郎

○寛政二年庚戌十二月二十一日生于芝邸、母市田

氏、實有川十右衛門貞寛養女而松元盛右衛門之妹、名於里江、寛政三年辛亥三月進御年寄格、列於房方下、九月

五日卒于芝邸、年二十六、葬大圓寺、法名清貌院殿正月麗光大姉、

○八年丙辰七月五日、文政三年命以、夭亡、法號麗珠院

殿本光慧明大禪童子、安主于惠燈院、

乘之助

○寛政七年乙卯六月二十九日生于芝邸、母杉浦作

兵衛政信女、名於曾美、為年寄上席、文化十一年甲戌五月

卒、法名柏壽院殿貞節如純大姉、今用

○九年丁巳三月七日、文政四年有命、夭亡、法名天苗

院殿玉質潤光大禪童子、同上、

蓬之進

○寛政十年戊午六月二十一日生于高輪邸、母同上、

○十一年己未七月二十日夭亡、法号蓬窓院殿恵旭

秀光大禪童子、安牌同上、

豹治郎

享和二年壬戌十一月二十八日生于高輪邸、母同

上、○文化元年甲子三月三日、二十一年有命以、夭亡、

法號寶臺院殿瑤琴幻調大禪童子、同上、

女子

富姫

○文化五年戊辰十月六日生于高輪邸、母谷周右衛

門政相女、

○八年辛未正月八日夭亡、法名麗岱院殿紅露雪顏

大禪童女、安牌同上、

女子

壽姫 孝姫 勢州桑名城主十一萬石、松平近江守定和越中守定永嫡男、夫

人、

○文化六年己巳十一月二十一日生于高輪邸、母同

上、

○十二年乙亥十二月改名孝姫、十五年戊寅正月、

許嫁松平永太郎主、○文政四年辛巳十二月朔日

適松平氏、○十年丁亥二月六日婚禮、

齊溥

桃次郎 官兵衛 長溥 美濃守

○文化八年辛未三月朔日生于高輪邸、母谷氏、

○文政五年壬午十二月二十一日、為松平備前守齊

清嗣子娶其女、得所請也、因稱黑田氏、○六年

癸未四月改稱官兵衛、○七年甲申六月二十七日

入霞ヶ関邸、○八年乙酉二月稱美濃守、○天保

元年庚寅十二月、叙任從四位侍從、五年甲午十

一月襲封、筑前福岡五、拾二萬石餘、

久命、

虎之助 篤之丞

○文化十年癸酉正月六日生于高輪邸、母杉浦政信

女、

○天保六年未八月改名篤之丞、

女子

種姫

親姫

濃州大垣城主一萬石

戸田伊賀守氏正采女正氏庸嫡子夫人、

○文化十一年甲戌八月六日生於高輪、母関金藏有

富女、

○文政十二年己丑二月九日嫁戸田氏、○天保三年

壬辰十一月改名親姫、

女子

定姫 豐姫 和州郡山城主十五萬二千二百八十八石 淑姫 松平造酒正保興夫人

○文化十二年乙亥十二月三日生于高輪邸、母田上

莊司則照女、

○十五年戊寅正月、許嫁松平喜代丸 甲斐守保泰嫡子、改久菊丸

改名豐姫、○文政六年癸未十二月又改淑姫、

○七年甲申正月、前此久菊丸卒、故稟擇婿、至是

得命、許嫁松平璆之助 即造酒正而久菊丸之弟也、○天保四年癸

巳七月二十七日遂適婚禮、

女子

貢姫

出羽新庄城主六万八千二百石 戸澤能登守正令夫人

○文化十三年丙子 實十四年丁丑 三月十六日生于高輪邸、

母同上、

○文政五年壬午正月、許嫁戸澤千代鶴 大和正胤嫡子、即能登守正令

○天保三年壬辰二月二十五日適戸沢氏、八月二

十八日結納、(婿)

女子

於並 立姫 上總鶴城城主一萬五千石、初名伊織

水野壹岐守忠實 或甲斐守 夫人

○享和元年辛酉三月二十三日生于江戸、父島津市

公

初名忠温 後名齊興 小字憲之助 又改虎壽

女子

正忠厚、母市田出雲盛常女、文化十三年丙子十二月十二日、大信公命為養女、二十二日入府城、○十四年丁丑三月二十七日、許嫁水野伊織后改壹城守、實酒井左五門尉忠器弟也、○十五年戊寅二月三日發府、四月三日至江戶、六月朔日適濱町邸、十五日婚禮、○文政三年庚辰七月十二日卒、法号了源院殿靜譽慧光貞珠大姉、

於壽 ハチハチ 壽姬 ハチハチ 内藤丹波守政優夫人 參州學母城主三万石

○文化十一年甲戌九月十九日生於江戶、父脇坂中務大輔安董、母津守玄菴直厚養女、芝口邸五万、千八十九石、文政二年己卯二月十五日乞為養女、○天保五年甲午十二月十二日許嫁政優、有所請也、○六年乙未十一月九日稟入藩邸、二十六日、三田四国町邸適内藤氏私行婚儀、○七年甲申八月十五日婚禮、

丸 又稱又三郎 又稱豊後守 又改大隅守

轉任從四位下侍從 左近衛少將 從四位上左

近衛中將 正四位下宰相

○寛政三年辛亥十一月六日生於府城、母佐竹右京大夫義和以妹、實母鈴木甚五郎勝直女於八百方、文化四年八月、命加殿字、文政二年正月、大信公命進其爵、稱御内證様、

○五年癸丑十二月六日始蓄髮、

○七年乙卯四月、改稱虎壽丸、○九年丁巳正月晦

日、發府城如江戶、時生七歲、國老名越右膳盛晨等從、四月十三日至芝邸、○十三年辛酉正月、許娶松平相摸侯齊邦之妹、名曰弥姫、○享和二年壬

戌十一月九日、齊宣公召加元服、名曰忠温、稱又三郎、市田出雲盛常理髮、時 世子十二歲

矣、○文化元年甲子六月朔日 世子造朝、獻御太刀一腰・縮緬十卷・白銀二十枚・御馬一匹、

始見大家家齊公於白書院、十月四日、及 公造朝、公就大廳下御休息所、世子就大廣間四之間、大家家齊 召 世子於黑

書院、手自加冠賜御諱字取名齊興、稱豊後守、

乃命叙從四位下、任侍從、且親觴之賜御着及寶

刀濃州一腰以為賀、世子亦獻家齊公御太刀

一腰大和正長・縮緬十卷・白銀三十枚・御馬一疋、

儲君家慶公御太刀備中重次一腰・白銀三十枚・御馬

一疋以謝恩、公別獻物件拜之如例、○六年己

巳四月二十八日行婚禮、自是稱御縁女樣
奉稱若御前樣六月十七

日 世子襲封、公告老允所請也、七月九日

公造朝、獻大家御太刀一腰・御刀濃州兼常一腰・

縮緬二十卷・白銀百枚・御馬二疋、儲君御太

刀一腰・御刀越中國房一腰・白銀百枚・御馬一疋、

進見 二公謝襲封恩、時家臣九名亦獻物件、陪

得謁見、恩賚如例、十二月十六日任左近衛少將、

位階
如故、

○文政元年戊寅五月四日首途、二十五日發府城、

七月十三日至芝邸、廿五日、大家使水野出羽

守忠成就邸勞之、二十八日行朝覲禮、十二月十

六日、叙任從四位上左近衛中將、○三年庚辰十

月十五日 公朝謁、此日閤老水野出羽守忠成等

承 旨列坐、使大監察水野主殿頭留 公將退、

造於白書院黑鷲杉
戶涯、出羽守以命 公、凡自後朝

宣年首・五節句・八朔就白書院、於月次就黑書

院以行其禮、如朔望亦宜就休息所於大廊下、曰

御臺君嘗為深請故有是命、公謝恩退、○五年

壬午四月二十日、領東叡山鎮火事、代松平阿波

侯也、○六年癸未三月十三日、大家使松平和

泉守乘寬來邸、賜 公旨、恩賚如例、儲君亦

使酒井若狹守賜 公物件亦如之、十五日朝謁拜

恩、大家面命懇到賜馬如例、此日 公又致東

叡山鎮火事、得代松平上
總介故也、二十一日發芝邸、

五月五日至府城、○七年甲申正月廿一日發、如

江戶、二月十一日、閤老奉 旨簡 公驛致賜鶴

所使鷹捉者也、二十一日、公遇伏見而拜受焉、

三月五日至芝邸、十三日、大家使青山下野守

忠裕就邸勞之、十五日、公使家臣齋輪物件、

述朝覲禮、不親朝、風邪也、四月二十八日 公

朝謁、此日閤老青山下野守忠裕等承捌旨列坐、

使大監察松浦伊勢守留 公將退、召黑書院溜、下野守忠裕以策命 公曰、所既命五節句・八朔就白書院、於月次就黑書院、自今以後行其禮亦猶宜着坐、非但由國爵、只以外戚故特命之、公拜恩退、○是年七月八日、白帆異船大和琉球小櫓船來于寶島、泊可半里、乃遣七異人棹一小舟長可四五尺餘進入前籠地名在番等迎接、變語不通、搖手指牛情似欲乞、在番亦對以手、示不能界、乃棹小舟、還附異船、時橫目吉村九助亦莅監島、九助等議、令出斥候望船所往、九日、復泊可半里、遣十四人棹二小舟亦入前籠、九助及在番等、相俱迎接、高帽異人、示番字劄及燒酒・菓餅・金銀・衣服等、以手指牛、亦似欲以交易、九助棹頭、示不肯意、悉却其物、至如米及野菜、宜其給之、異人頗悅、以手示情、無憂米穀、願多賜菜、九助乃令授唐薯等、既而揖去、未幾、又遣二十餘人棹三小舟發銃進來、復入前籠、分隊喊進、異船亦發大煩、助其兵威、一向番鎮、發銃如蝗、

一獵廣原、射豕一牛、追搦二牛、悉載諸舟、前此、九助及在番等、計議以為、發出欲闕、兵器不足、與徒死傷、莫如俟其必寇村中一舉擊之、乃磨島衆、俱成鎮門、此云番所木戸口、逐臣本田助之丞亦請與之、異賊三人、持銃馳向、多遁匿者、九助挺身執鳥銃四分、從容堅守、島人平田平六・橫目中村理兵衛等、從守鎮門、助之丞欲覆寺河山以橫擊之、乃取島人平田藤助所持鳥銃、徑赴寺河、藤助・理兵衛亦續焉、異賊三人、喊聲登鎮門阪、升自九助自若、以鳥銃、候其先登逼可三四步、發豕一人、由是、餘皆辟易、一人發銃、遁自上徑、一人逃自本路、大叫聚衆、叫舟津諜喧、助之丞乃率藤助等二人、馳抵鎮門、異人既死、令藤助取其鳥銃、時九助等、屯鎮上壇、助之丞等見舟稍遠、迹謁九助、於是、僅十二三人、乃九助遣藤助等如丘陵望船所去、皆收小舟、載之異船、(A、B)△

阻可半里、頻發大煩、向午天暮、九助等議、完

聚分隊、以備復寇、十日、海行阻可二里、十一日、阻七八里、向東南去、不知其所往、於是、九助等、鹽異人屍、収其佩具、各自具狀、託在番得代還、以報本府、八月報達、時 公在江戶、國老町田監物久視、乃遣物頭島津權五郎久(命)帥一隊兵與力六人、足輕三十人、其佗書役醫師等、發二十餘艘往鎮戍之、別遣人以飛報長崎及江戶、九月、公以聞 大家、閤老青山下野守忠裕嘉九助功、命 公報可、久視又遣喜入多門監護異人致諸長崎、○八年乙酉二月十一日、 大家使水野出羽守忠成賜 公物件之國、 內府公亦使松平能登守賜 公、皆如先例、十五日朝謁拜恩、 大家口自懇命賜馬亦例也、二十一日發芝邸、四月八日至府城、啓公子從、九月朔日、 公命久視賞寶島功、命島津權五郎、為當番頭俸二百石領御用人事、特嘉其勞、賜吉村九助歲俸五十石、令終身食、以賞其功、移本田助之丞於種子島、嘉其善從九助、有與成功、特赦其罪、 命種子島伊勢輔時、令以安置

之、又命御船奉行以傳 旨、賜平田平六・中村理兵衛米各五斛、平田藤助米貳斛、亦嘉平六善從吉村、藤助善從本田、皆守其令、理兵衛亦同為防、各著其操也、十月、又擢九助為郡奉行、勳職如故、亦賞寶功、初、異人所持鉄炮、亦久視等命、同雜佩、護送長崎、但於鉄炮、仰于奉行、有所私請、凡若異物、皆収官庫、為國典矣、故奉行亦聞于江戶、特允其請、遣還授之、於是、命授九助、令貽子孫、永以勿朽澀焉、○九年丙戌正月二十五日 公發府城、三月十四日至芝邸、二十九日、 大家使青山下野守忠裕來邸勞之、四月朔日朝謁如例、○十年丁亥三月二十九日、 大家使松平和泉守乘寬恩賚 公之國、 內府公亦使酒井若狹守賜 公如例、四月朔日朝謁謝恩、口親懇諭賜馬如例、十五日發芝邸、前此 大家任太政大臣、 內府公叙從(二)位、由是二十二日、皆遣使賜 公及 兩大公物件各有差、六月六日至府城、○天保三年壬辰五月十八日改稱大隅守、

○是歲、中山王尚育使豐見城王子為正使、澤紙(紙力)

親方為副使入貢江戶、謝承襲恩、九月朔日、

公以琉使發府城、自向田分道、公直取陸、別使

國老島津但馬久風等監護舟行、候潮擺崎、王子

疾漸、十六日遂卒、初其辭國也、尚育照例、命

讚議官宇治原親雲上實王子弟普天間親雲上即此、學正使禮豫備

不虞、於是、副使乃將王命以宇治原親雲上為豐

見城王子、更召小祿親雲上時上府官實改字治原氏為小祿耳、為讚

議官、既而十七日開帆擺崎、十月、公抵海田

市聞其訃告、乃具狀馳使以報江戶、十二日、國

老猪飼央使半田嘉藤次齋、就松平周防守康任第

以進呈之、十一月 日 公以琉使至芝邸、

閏月二日叙正四位下、頃歲琉球荐荒國疲、而

公能賑以聘使朝、大府嘉之、特進位階有是命、

(表紙)

古籍

采緝補綴

采摭

寶傳

近麟趾野錄

艸

大信公

重豪 初名久方 忠洪 善次郎 兵庫 又三

郎 薩摩守 從四位下左近衛少將 從四位上

中將 上總介 從三位 榮翁

○延享二年乙丑十一月六日生於柁城第、母島津備

前貴備

老号 静山 女 名於登美、翌七日卒、年十九、葬于柁城長年寺、法名正覺院殿貞範妙雅大姉、安主於

福昌寺

○寶曆三年癸酉、初圓德公(重年)為兵庫久季後、迨(宗)慈

德公(德)薨無子可嗣、命公為久季後、至是十二月十五日、圓德公手加公冠、令新納內藏久品理髮、名久方稱兵庫、

○四年甲戌、前此圓德公之回国也、稟為假養子、閏二月、復請以隨江戸、故復稱善次郎、

五月十一日從圓德公發覺府、七月二十二日至芝邸、八月四日、立為世子更名忠洪(忠)、稱松平又三郎、稟事於松平右近將監武元得命也、

○五年乙亥、二月二十二日、世子觀備立於田町、

是園田与藤次所立也、七月二十七日、御老中會于西尾隱岐守忠尚第、徵島津淡路守久柄傳命公襲封爵、八月十五日、久柄為公造朝、獻

大家家重公御太刀一腰(世)・縮緬二十卷・白銀百枚・御馬二疋、儲君家治公御太刀一腰・御刀

一腰(三原)・白銀百枚・御馬一疋、御簾中白銀十枚・縮緬十卷、進見家重公家治公於白書院、謝襲封恩、《年幼故也》、《九月二十二日、

命公遣御使番京極兵部高主・御書院番青山七

右工門成親莅監封內、以尚幼故也、六年丙子正月二十五日、招宴兩使於芝邸餞別也、(兼豐)有邦公

亦饋杉重一組、四月五日兩使發江戸、公使留守居・使番・目附等從偕之國、途次寵待尤篤、

五月二十三日至鹿府、公使使番贈兩使太刀各一腰・馬代金各一枚・二種各千匹、有邦公亦

使馬廻饋兩使紗綾各三卷・二種各五百疋勞之、六月十一日、兩使莅觀府城、乃進膳羞(三汁)・島

津備中貴備接伴、十六日先公小祥、兩使遣家老進香、十七日、兩使謁南泉廟、佐土原侯久柄亦

獻兩使太刀馬代等、七月三日巡至谷山、十一日還客屋、八月十二日、巡下土街至南林寺洲崎、

二十五日招周防宅、九月三日招筑後宅、四日招妙谷寺、十一日招備中宅、十五日招出雲宅、二

十一日招主殿宅、二十六日巡櫻島、十月九日招主鈴宅、其他縫殿宅・函書宅・福昌・南泉・南

林・興國・淨光等、亦皆多招饗焉、十六日、兩

使登城為辭、既而発回、《家臣九名取謁如例》、〇八年戊寅四月十九日、公《借松平越中守ト》造朝、公獻 家重公御太刀一腰・白銀二十枚・縮緬十卷・御馬一疋、家治公御太刀一腰・白銀二十枚・御馬一疋、進見 二公於黒書院、時家臣九人亦随拜謁如例、《五月廿五日、大家賜 公内書、受封始值端午也》、六月十三日、公朝見 家重公 家治公於黒書院、家重公召 公於前、手加元服、賜御諱字、令叙從四位下、任左近衛少将、乃改重豪、称薩摩守、獻 家重公御太刀一腰・御刀備前康光一腰・卷物二十・白銀三十枚・御馬一疋、家治公御太刀一腰・御刀備前家助一腰・白銀三十枚・御馬一疋、家重公亦親觴 公、賜之御着及御腰物如先例、《七月四日、短袖、二十三日、大家賜 公雲雀、所使鷹捉者、賀襲封也》、〔卯年イニ〕十二月五日、大家「復」賜 公鶴、令鷹捉者也、〇九年己卯《四月十六日領増上寺鎮火事》、〔十年トモイ〕九月十一日、

招請老中、享封故也、二十八日稟除額髮、《十一月十四日、大家使西尾忠尚召 公許娶徳川刑部卿女保姫君、島津久柄為趨拜 命、十二月二十三日結納一橋、

〇十一年辛巳《正月十八日、大家使人賜 公鶴、亦鷹所捉者也》、《二月十八日招請老中、有宣下故也》、四月《十三日首途、謁護厂所》、十六日、大家使秋元但馬守齋紗綾三十卷・黄金百枚、来邸賜 公之國、大御所家重使松平右京大夫亦賜腰刀一腰・御馬一匹、十八日造朝拜恩、《十九日寅尅、就井上河内守第上誓表也、二十日致鎮火事、代松平陸奥守也》、二十三日発芝邸、《五月十一日至伏見、十二日、訪諸司代及近衛殿、十三日、近衛公使問 公見為對、又見市人及桂女、十五日〔大阪〕至》、《十八日召見市人、十九日発舟》、六月《十九日入出水、觀土踊、二十日宿于莫根、觀市人農人踊、廿〔三カ〕日宿苗〔代〕川、觀鶴龜舞》、二十三日至府城、《始就封也、乃遣

島津又七郎如武謝恩、九月九日、大家家治公

賜公御肴、老中奉書驛致覺城、十月十八日

公拜其賜、賀始就封也、《十二月判物拜受》○

十二年壬午《正月十八日觀上土踊、廿一日雨、

二十三日觀下土踊、二十五日觀上下土踊、二

月四日發府城、十五日江府火、《十六日》及芝

邸、《淨岸君避高輪邸、》大家特命還自道、三

月《朔日》、到津和港豫州會以報告、《二日、遣村

上彦八、問守宮起居、》《六日泊宮島、》七日拜

奉書問之、《九日奉書反問、》乃二十七日歸府

城、五月六日、復發《自阿久根舟行、》七月十

八日、《至高輪謁淨岸君、而》至芝邸、《二十一

日、使松平右近將監勞之、八月十五日朝謁、二

十一日行移徙礼、午尅出自西御門、入自表門、行礼于書院休息所、九月十三

日守宮門始開通、十月朔日、淨岸君遷移芝邸、

十一月朔日結納一橋、十一月廿五日移徙新

奧、《十二月《三日、大家使一橋大膳賜公鶴如

例、》四日行婚姻禮、御輿迎松平主計頭(一、二)添同

大藏太輔、《六日、大家御臺遣人賀之、》

○十三年癸未《正月、大家假金二万兩今年還四

千兩、罹火故也、》《六日、召宝生太夫傳受翁能、

二月十四日患水痘、》四月《十三日首途、》十三

日、大府使松平右京大夫齋物件、《西(丸)松平

周防守》來賜公之國、《十五日朝謁》如例、

二十八日發邸、六月二十一日至國、冬大家賜

公鶴、閤老奉旨驛致府城、○十四年甲申《正

月二十七日、慈眼夫人登賀正、謁見家治公及

御臺君 儲君 万壽君、有恩賚退、》二月十五

日 公拜其賜、乃鷹所捉者也、《於是使島津玄

蕃如江戶謝賜鶴恩、》三月《九日謁花尾廟、》二

十二日發府城、五月十三日至邸、《六月十三日

改元明和、》是歲、中山王尚穆使讀谷山王子・

湧川親方為正副使、入貢江都賀 家治公襲大統、

八月二十三日、國老川田伊織國福等監護發府下、

《十月廿一日左京國老、》十一月九日至芝邸、

十三日、轉任從四位上中將、又使池田筑後守賜

君疾故也、七月十九日拜賜雲雀、十一月廿五日改元安永、《十二月五日淨岸夫人薨、二十日發棺江戸、大家使織田図書護送、安永二年二月十九日入福昌寺、此年建下馬札于城下、》○安永二年《三月二十七日、大家使老女松島賜公葵章羽織、曰淨岸夫人疾 公盡愛故令賜服、途次以□^(山)本正誼為教授焉、詳見林氏碑、》《五月十五日、命左中・齊宮務繁榮置立番于城下、》《七月置道奉行、》 公命創建造士館・演武館等於府下、

《安永三年甲午二月十八日 公發府城、四月朔日至邸、此年除護所、四月十八日領増上寺鎮火事、四年乙未 公患瘡、遣目附上江戸・京・大坂二年交承、四月二十一日發邸、六月四日至城、五年丙申四月二十一日發城、六月五日至邸、七月十七日、下令停日傘宜皆着笠、六年丁酉四月二十一日發邸、六月六日至城、十一日、始置聖堂奉行及講堂字頭、七年戊戌正月二十一日發

城、三月二日至邸、此年置御鳥見頭、八年己亥五月十五日發邸、六月二十八日至城、九月二十九日地震、十月朔日櫻島大震火、此年置明時館、

○四年乙未十一月十三日、公觀犬追物於演武館、自恤畜令惟講書傳、廢技久矣、故 公命復講習、至是得始備覽、實可謂弓馬之中興也、《六年丁酉十一月四日謁長年寺、》《八年己亥創明時館、九年辛丑^(マ)正月九日發城、十一日、公拜^(九トモ)致所賜鶴於備前片岡^(上カ)、二月十八日至邸、庚子八月、先是十二月獻櫻島蜜柑、至是請更獻炙鮎、閤老聽之、島震火也、十一月十四日賜鶴捉鷹、》《三月十三日改元天明、置郡奉行見習、□^(木)月廿一日發城、七月□^(廿カ)七日至邸、》○天明《元年辛丑十月朔日造二丸、謁緣女君^{即茂姫君}獻物件、君亦宴賚、二年壬寅二月七日、置御鑪奉行・御弓奉行・御鉄炮奉行・御小納戸頭取、二十一日復造二丸、獻物件謁緣女君賀正宴賚、此年造建東御殿、十

二月十八日 公移居焉、三年癸卯二月四日、造二丸謁見賀正如前年、四月南林寺火、八月二十八日發邸、十月十三日至城、〽三年癸卯三月十五日、賜 公大鷹鶴捉雁捉各一居、十二月如田布施放鷹、乃所賜者也、〽四年〽正月七日、大家馭送賜 公鶴、十六日受之江州高宮、正月十三日發城、二月朔日至邸、三月十五日、遷大中公主於福昌寺、府士悉從隸奠庭次、〽甲辰九月十五日、閣老牧野越中守貞長奉 大家旨、使久松筑前守定愷召 公、造大廣間而傳命、宜朔望朝就大廊下休息所進以謁見、於歲首及五節句如故、〽十七日、令城下土改曰大番、〽二十三日、復命歲首・五節句亦宜遵前例、〽此月置御作事奉行、〽十月朔日造二丸、謁綠女君、銅門開扉、十一月朔日置尾畔奉行、〽十二月二十八日朝賀歲杪、行禮如命、此日 大家使閤老田沼主殿頭意次命 公、凡朝宜於歲首・五節・八朔就白書院、如月朔就黒書院以行其禮、 公造

白書院黒鷲衫戸前也、拜 命、〽又造西丸、謁鳥居丹波守於白書院緑類、賀歲未退、五年乙巳二月、凡望朝西丸、自後易朔命也、四月二十一日、大家使人賜 公大鷹鶴捉雁捉各一居、八月廿九日、大家使閤老水野出羽守假 公米一萬石・金一萬兩、所因琉島饑荒有以仰請故也、此年置御側詰、十一月九日許滯府、痛也、十九日置詰衆、〽〇六年丙午〽二月置御右筆頭、二十六日優許嘉拜朝、三月置御抱守、給事富公子、〔七〕月置儀奉行、〽九月浚明廟奠、十月〽置御小姓頭取・御側目附、〽二十六日、使太田備後守資愛齋短刀備前清眞、長一腰、來邸賜 公頒遺物也、〽十一月二日、公服直垂造朝、鳥居丹波守令公着坐于白書院、大家出御、繼紀伊中將賀承大統、口自懇命 公、亦敬對獻物如例、此月命小番隸若年寄、新番隸大番頭、〽〇七年丁未正月二十九日、請命傳事於世子、乞骸骨也、〽置御附御茶道頭、〽二月十五日、獻 大家家齊御太刀一

腰・御馬代^{黄金}・縮緬十卷、拜老隱恩、《二十

一日、賜 公内書、 大家承統始值歲抄也、》

晦日改稱上総介、《三月、請還国温泉且輔聽政

事、二十日許之、十三日賜羽織、十五日発邸、

四月十五日謁伊勢、》《五月二十三日、 大家使

水野壹岐守賜 老公縮緬十卷、宣下礼竣故

也、》《六月三日至城、^{下レテヨリス}八月三日謁華尾

山、七日謁長年寺、九日首途、》《八年戊申二月

二十三日、 大家使永井伊織賜 老公亦所使鷹

捉者、致仕後始拜之、七月二十一日、復使川崎

縫殿賜 老公鷹所捉雲雀、寛政元年己酉七月三

日、 大家使行人大久保忠兵衛賜 老公鷹擊雲

雀、十二月十一日、 御臺君使大塚兵九郎賜

老公干鯛一匣、以賀歲抄、二年庚戌正月二十八

日、 大家使大河内善兵衛賜 老公鷹擊鶴、七

月十九日、復使人賜雲雀、十二月二十三日、

御臺君使御廣敷番頭賜 老公物件、賀歲末如件、

三年辛亥八月十一日、 大家使木原与三郎賜鷹

擊雲雀三十、》○寛政八年丙辰三月十三日、自

芝邸移居高輪邸、○十二年庚申十一月十四日、

裏總髮更號榮翁、○文化元年甲子五月二日剃髮、

○天保二年辛卯正月十九日叙従三位、○四年癸

巳二月三日^{以正月二十日為諱辰}逝于高輪邸、年八十九、歸

葬覺府福昌寺、法諡大信院殿榮翁如證大居士、

—女子

悟姫

○寶曆十三年癸未十月十三日生于芝邸、母徳川刑

部卿《贈中納言》宗尹、《大家吉宗 女名曰保姫、《母

門之女、名曰千賀、明和《四年丁亥三月九日流産》六年己

丑九月二十六日卒于江戸、葬大圓寺、法名慈照、院殿圓應靈珠

大姉、七年庚寅三月十日、掃埋遺毛于福昌寺、 《大家及御臺君使人齋賜公

及浄岸君物件、賀誕生也、》○明和元年甲申

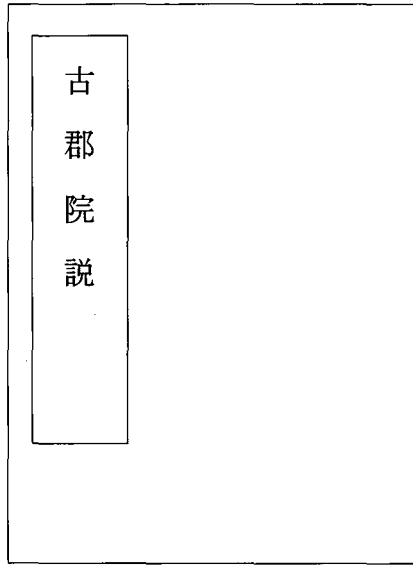
《六月二十七日、公及夫人進浄岸君饌、祝誕生

也、》七月二十六日^申夭亡、法名照雲院殿桂庵

慧月大禅童女^{安主于 惠燈院、}

古郡院說

(表紙)



古郡院說

(朱印、印文「數嶋」) (朱印、印文「宗賢」)

我薩隅日之於諸郡、有自古以院呼者、則如建久八年圖田帳所載山門・莫禰・入來・祁答・牛屎・滿家・市來・伊集・知覽・給黎等、在薩之院也、蒲生・吉田・横川・栗野・小河・深河・財部・鹿屋・串良・禰寢等、在隅之院也、三俣・島津・眞幸・穆佐・救仁等、日之院而在諸縣郡、飢肥及櫛間在宮崎郡、新納在兒湯郡、此皆古來以院

呼者也、其呼云爾、雖多知之、未聞其所首說、愚近按續紀、延曆十年二月癸卯、令於諸國新造倉庫、各去其間隙於十丈、曰、諸國倉庫比近相接、一倉失火、合院燒盡、於是改置、隨處寬狹、量宜置之、又按後紀十四年閏七月、申令諸國新建倉院、宜須每鄉改置一院、曰、諸國建郡、故置一處、百姓之居僻遠去郡、跋涉山川有受納責、且倉甍近接、有失火憂、弘仁八年十月癸亥、常陸國新治郡災、甍不動故倉十三宇、穀九千九百九十斛、應此類也。令改之、今年租稅輸納新院、但於郡家如回動物、依舊莫動、漸遷新院、置倉之法依十年制、又其九月辛亥、更令諸國建正倉院、曰、諸國每鄉令建倉院、追尋此事、頗乖穩便、今須彼此相接比近之鄉、於其中央同置一院、村邑遙阻絕隔之處、宜量地便每鄉置之、餘依前制、據此觀之、我藩之諸呼院者、皆其遺名、而首于此者明驗孰大焉、其特多院、蓋以郡鄉善跨乎山川故也、然我大史白尾國柱・橋口善等曰、院字音瓊義與園同、唐人小說書莊院、後曰別墅、蓋此類云、今按說文、園所以樹菓也、恐未的確、所謂院字、今按字典、則有垣牆處、而宦靡曰院亦以其必有垣牆故也、而郡羣也、人所羣聚、而鄉向也、衆所向云、

參諸上令考本邦制、以國統郡、以郡統鄉、以鄉統村、黃白問答所謂、和名鈔國下注為郡名、郡下注為鄉名云、即此也、是故、村則隸鄉、鄉則隸郡、郡則隸國、國置國衙、國司治之、置官廨、倉庫建焉、郡司掌之所謂郡家也、其繞圍也、必以垣牆、故謂之院、或曰倉院、而百姓之居鄉村者、僻遠去郡、跋涉山川有受納責、且倉舍亦比近相接、有失火憂、故於郡鄉其應令者、分建倉院、村居相接比近之鄉、令量宜建諸其中央、邑落阻遠山川隔絕、令隨地利每鄉建之、以濟百姓兼備失火、於是乎倉庫之制矯而變革、郡院首焉、則以國統郡、又統其院、以郡若院、各統其鄉、以鄉統村、新田宮藏書所謂、諸郡檢田使幣分差等、大都五十疋、中郡卅疋、院廿疋、鄉五疋云亦可証也、是故郡司分而掌之、因其新院所其定名、謂是某院司、或依其舊尚曰郡司、其實皆一職耳、何以言之、按圖田帳、如給黎則此院也、而其掌之書曰郡司兼保、知覽亦院也、而書郡司忠益、至若牛屎、雖書院司元光、於古文書^{文永二年}或書牛屎郡司、此類尚多、則一職分兩員可以知也、而及屬鄉、亦聽令者皆繫管下、泛呼某院、又其統鄉云、則觀飫肥有

南北鄉稱寢有南北侯、可以証也、合而言之、惟曰飫肥南鄉、分而言之、曰飫肥院之類亦可觀也、譬諸今世、所謂倉院、猶呼藏本有曰祁答院組之類、其隸之者、猶曰藏屬鄉、今以牛屎等証之、則割伊佐郡置之二院、其一方、以牛山・羽月・山野・平泉・入山等曰牛屎院、^{會木氏譜所謂}而餅牛屎與多郎言之、^{藁刈兩院云}而藁刈、大隅郡名也、又一方、以佐志・黒木・鶴田・宮之城・山崎・大村・藺牟田曰祁答院、各屬其管下之類、應是遠僻遠去郡跋涉山川之令、以二分置之也、又如教仁、按圖田帳、有鄉有院、而其鄉為百六十町、院為九十町、以廣於院、則知分於鄉、亦應遠近鄉相接置中央之令以分之也、然自院建到于茲一千四十年矣、余稽古乘、欲能言之、古今文獻不足遍徵、況於他他邦、^(符カ)莫嘗聞有都鄉呼院者、惟觀陰德太平記載豐後州有野津院耳、^新荒井白石以博物聞、其問古制於野宮黃門、亦不及院則知絕既久矣、故今舉一二以俟博古、又其名之、大抵皆似乎由其所建地名以各命之、而如新納院、蓋迨邈令以其年租輸納新院、便因其所新納院、遂以名之、似有謂焉、若其然則新納稱呼、肇乎桓武帝延曆十四年冬、亦可以想也、而此是我久仰君及其^(新納)

族人伯剛^(時升)老兄等之所世為姓也、故為之説、述其概端、竊示君等、庶乎更質博識、以有研究焉、云爾、

時天保五年秋七月甲子

潛隱伊地知季安子静稿

(朱印、印文「宗賢」)



嘉永三年庚戌五月、於鹿府膳、

鮫島喜十郎宗賢